第八章　ポルティウンクラ（Portiuncula.）

一二一一年

「兄弟達」がリヴォ・トルトを去つたのは疑ひもなく、一二一一年の春の頃であつた。ある日彼等が祈禱に耽つてゐたときに、一疋の驢馬を伴へる農夫が現はれ、それを先にして憐な隱家へと、彼は騷々しく追ひ立てゝゐた。

「入れ、入れ」と、彼は彼の獸に叫んだ。「私達にとつて此處が極樂になるのだ」。もし「兄弟達」がこのうへ長く滯留せんか、彼等はこの荒れ果てた場所を、自分達の家であると考へ出すかも知れぬことを、フランチェスコは恐れたやうに見えた。かゝる亂暴なことは彼の甚だ好まぬところであつたので、彼は即座に立ち上がり、彼の伴侶者達を從へて去つたのであつた。

その人數が餘程多くなつたので「兄弟達」は、もはや種々の點において過去のやうに、彼等の流浪生活を繼續し得なくなつた。彼の要した金額の貸與を、まづ監督に、次いで聖ルフィノ「カノネ」に願つたが、ともに徒勞であつた。ところが幸にスバジョ山のベネデット派の僧院長にあたつて見ると、彼は「サンタ・マリア・デリ・アンヂェリ」(Santa Maria degli Angeli. 天使の聖マリア會堂) すなはち

ちポルティウンクラ (Portiuncula) の使用を、永久に彼等に許した。

フランチェスコは魅せられるほど喜んだ。この愼ましい聖殿の名と、彼の教團のそれとのあひだに、神御自身によつて制定された一の神秘な調和を彼は見た。兄弟達は速かにみづからのために、若干の小屋を建てた。極めて手輕な籬が、取り繞る障壁として役立ち、かくて三、四日のうちに、フランチェスコ派の最初の僧院が組織せられてあつた。

十年間彼等はこれをもつて滿足してゐた。そしてこの十年が、わが教團の英雄的時代であつた。聖フランチェスコは、彼の理想を堅く持し、それを弟子達に諄々として教へ込まうと努め、そしてしばしば成功するであらう。しかし兄弟團の餘りに急激な增加が、遠からず弛廢の或る徵候を惹起せしめるであらう。この時代の始まりの記憶が、チェラノのトゥマゾの唇から、修道院生活を稱へる一種の頌歌を抽き出さしめた。それは詩篇記者の叫びの、燃ゆる、そして翻譯すべからざる註解である。「視よはらから相睦みてともにをるはいかに善くいかに樂しきかな」。[1]

彼等の僧庵は、當時ポルティウンクラの四邊に擴がつてゐた林であつて、平原の大なる部分を占めてゐたのであつた。そこに心靈上の勸告を受けんがために、かれらの師の周圍に集合し、また其處へ彼等は引き籠つて瞑想し、祈禱した。[2] しかし傳道旅行に献げられなかつた日を、全然瞑想に耽つてゐたのであると想像するは、大變な誤謬である。彼等の時間の一部分は、手仕事に費されてあつ

た。

聖フランチェスコの意向が、他の何の點よりも、この點においてしばしば誤解を受けた。しかし彼が彼の托鉢僧達に、自己の手仕事によつて生活の資を得べきことを命じたときに優つて、斷然たる時はなかつたのである。彼は決して乞食教團を創設することを夢みなかつた。彼は勞働教團を建設した。彼が乞食をし、また彼の弟子達に斯くなすことを促すのを、しばしば私達が見るのは事實である。しかしこれらの事柄により、わたし達をして誤解せしめてはならぬ。これらは托鉢僧が或る地方に到着し、其處に長い月日のあひだ、彼の力を費して、饑ゑたる靈魂に、心靈上の糧を分かちあたへる場合に、その代償として物質上の糧を受けるのを、羞ぢではならぬことを意味してゐるにほかならぬのである。働くことが規則で、乞ふことが例外であつた。しかしこの例外は、決して不名譽なものではなかつた。イエス、聖母、弟子達は、あたへられた糧によつて、生活しなかつたか。しばしば行つて敎へた人々に向かひ、施與を爲すことを敎へるのは、これ即ち大いなる職責を果たすことではなかつたか。

フランチェスコは、「小さき貧しき人々」が取り圍んだこの愛の食卓に、かれの詩的言語をもつて、"mensa Domini" すなはち「主の食卓」といふ名稱をあたへた。施與の糧は天使の糧である。そしてそれはまた刈ることもせざる鳥の糧でもある。

この場合わたし達は生存の手段、または懶惰な生活の主要條件として考へられたところの、乞食といふことから、遙かに遠ざからねばならぬのである。それは眞に正反對であつて、乞食の讃美から勞働の義務を分離しないとき、始めて聖フランチェスコと彼の敎團の起原とに對して、私達は眞實であり、正當である。

疑ひもなくこの熱心は長く續かずして、チェラノのトゥマゾもすでに彼の書の冒頭に、「托鉢僧達の懶惰と貪慾とに對して、神の前に哭けよ」と云つてゐる。しかしわたし達はこの急速にして避く可からざる墮落のゆゑに、その起原の聖くして雄々しい美を、わたし達の視覺から蔽ひ去らしめてはならぬのである。

彼の深い柔和をもつてして尙ほ且つフランチェスコは、いかに撓むことなき峻嚴を、懶惰者に對して示すべきかを知つてゐた。かれは實に勞働を拒んだ一人の托鉢僧を、放逐することをさへ爲したのであつた。[3] このことに關しては、兄弟エヂディオの生涯に優つて善くわが Poverello（貧しい人）の意向を示すものは他にない。これは彼の伴侶者のうちの、最愛の一人であつて、フランチェスコは彼のことを微笑しながら、「彼はわが圓卓武士中の、勇者の一人である」と云つた。

兄弟エヂディオは大の冒險癖をもつてゐて、初代におけるフランチェスコ派の活ける模範である。彼は彼の師よりも二十五年生きながらへ、そして自由に、單純に、「規範」の文字と精神とを遵奉する

ことを決して廢めなかつた。

一日かれが聖地へ向け、巡禮に旅立ちするのを私達は見る。ブリンディジ（Brindisi）に到着するや、かれは船の出帆を待つあひだ、水を運搬しようと考へて、一つの水甕を借りた。そして毎日幾時間か、その都市の街上を廻つて、他の水運搬人達とおなじく Alla fresca ! Alla fresca !（汲み立て、々々）と叫んだ。しかし彼は土地と事情とによつて、彼の商賣を變更した。歸途アンコナにおいて彼は、柳を買ひ、籠を造り、それを賣つて金錢ではなく、食物を得た。時には死人を埋葬するために、雇はれることさへあつた。

羅馬に遣はされたときには、毎朝かれの宗教的勤行が終はつたのち、彼は數リーグを徒歩して或る林に赴き、其處から薪の一荷を持つて來た。歸途、或る日、それを買はうと欲した一人の貴女に彼は會つた。値が定まつたのでエヂディオはそれを彼女の家にまで運搬した。しかし彼が家に到着したとき、彼女はその托鉢僧であるのを認めて、先に定めた値段よりも多くを、彼にあたへんとした。「わが善き貴女よ」と彼は答へた「自分は貪慾に打勝たゝことを欲しない」。そして彼は全く何ものをも受け取らずに去つて行つた。

橄欖の季節には彼は、その收集の手傳ひをし、葡萄の季節には、その收獲者となつた。一日雇ひ人足どもの集まつてゐるピアッツァ・ディ・ロマ（Piazza di Roma）において彼は、おのが胡桃の樹を

振り落す者を見付け得なかつたひとりの padrone（主人）を見た。その樹は非常に高いので、誰も敢て危險を冒して、登らうとはしなかつた。「もし胡桃の幾分を自分にあたへるならば」と、エヂディオがいつた、「自分は喜んで登るであらう」。契約が結ばれて樹が振り落された、すると胡桃は非常に多くあつて、かれは彼の割前の入れどころに窮したほどであつた。外衣を引き寄せて、袋のやうにし、喜悅に充ちて羅馬に歸り、そこで彼はそれを、遇ふほどの人々に悉く分配した。

これは人の心を惹く出來事ではないか。これだけですでに初代フランチェスコ派の人情の潑溂、生氣、親切を表はしてゐるではないか。兄弟エヂディオの雅量についての物語は、盡きないほどである。朝彼の宗教的勤行のために、充分時間さへあたへられるならば、どんな種類の仕事でも、彼には善く見えた。あるときは羅馬における「四つの冠」の賄方に勤めて、彼は粉を篩つたり、「サン・シスト」（San Sisto）の井戸から水を、僧庵へ運んだりしてゐる。あるときは彼が僧正ニコロオとも滯留することを承諾したリエティ（Rieti）において、彼の必要物なれば喜んで用意して呉れる家の主人の懇願あるにも關らず、食事どきには必ず彼が儲けた糧を持つて來た。一日エヂディオが外出を思ひとゞまつたほど、烈しく雨が降つた。僧正は今日こそ彼が儲けざる糧を嫌でも受け取らなくてはなるまいと考へて、窃かに喜んでゐた。ところがエヂディオは臺所に行つて、そして掃事する必要があるのを見、彼は料理人に自分に掃かして呉れるやうに說いた。斯くして彼は彼が儲け

た糧を携へて凱旋し、それを僧正の食卓で食した。[4]

エヂディネの生涯はその初發からして尊敬を受けた。それは實に如何にも獨創的であり、華かであり、靈的であり、[5]また神秘的であつて、極めて不正確な、そして甚だしく誇張された數々の記事中にあつても、彼の傳記はすべての添加物から、殆んど自由に傳へられた。彼は聖フランチェスコに次いでフランチェスコ派精神の化身である。

茲に引用せられた諸の出來事は、すべて謂はゞ、「規範」の説明である。實際その中には勞働に關する命令に優つて、明白なるものはない。

「兄弟達」は教團に加入した後も、世にあつたときに爲してゐた職業を、營み續けるのであつた。そして若し無職業であつた場合には、何かその一つを習はねばならなかつた。報酬として彼等が受くるを得たのは、たゞ彼等に必要なだけの食物であつた。そして尙ほ充分でない場合にかぎり乞食することがゆるされた。その他勿論かれらは彼の職業の道具を、所有することが許された。[6]兄弟ヂネブロ（Ginepro）は大針をもつてゐて、彼が赴く到る處において靴直しをし、自分の糧を得た。彼のことについては、後にわたし達は見るであらう。また聖キアーラが、彼女の死の床にありてすら、仕事をしてゐたのをわたし達は見るのである。

手づから働くといふ義務は、一層充分に明らかにせらるべき價値がある。何故といふにそれは、殆

んど聖フランチェスコの死と運命を共にしたからであり、また教團の最初の時代の獨創的特徴は、幾分この一事に負ふところがあるからである。而もこれは「小さき兄弟達」の存立に對する、眞の理由ではなかつた。彼等の使命は何ごとよりも先づ、「清貧」の配偶者たることに存してゐたのであつた。

當時の教會の亂狀に愕かされ、彼の過去の生涯の痛ましい記憶にしばしば嚇かされて、フランチェスコは金錢を惡魔の特別な器具であると觀じた。興奮したときなどは更に極端に、あだかも金屬そのものゝうちに一種の魔力と、隱れたる呪詛とが、潛んでゐるかのやうに呪ふた。金錢は實に彼にとつては、惡の聖禮典であつた。

彼が誤つてゐたか否やは、こゝに問ふべき限りでない。眞面目な幾多の著者達は、もし人々が彼に從つたとすれば、世界に漫延するに至つたに相違ない經濟的混亂を詳細に立證した。しかし吁、彼の狂氣は、もし狂氣であつたとすれば、傳染を恐るゝ必要なき種類のものであつた！

彼はこの點に關して「規範」が、極端すぎるといふことの、有り得ないのを感じてゐた。また若しそれに對する種々な解釋にむかつて、不幸にも扉が開かるゝやうであつたならば、其處に制止すべき點のないことを思つた。彼の教團を動搖せしめた出來事の連續と、週期的痙攣とは、いかに彼の判斷が正當であつたかを、明白に示してゐる。神學者達がすでにイエスの清貧の教訓に關して、

科學的結論に到達したか否やを、自分は知らないし、また知らうとも思つてゐない。しかし手づからの勞働を伴へる清貧の生涯は、彼の弟子達に對する理想として、わが「ガリラヤ人」によつて主張せられてあつたやうに、自分には考へられる。

尙ほフランチェスコ派の清貧(ポエルタ)が、ストア派の無感情な傲慢や、また一種の狂熱家が抱いてゐるところの凡ての喜悅に對する馬鹿々々しい恐怖などゝ、混同さるべきものでないことが容易に分かる。聖フランチェスコがすべてのものを否定したのは、實は一層善くすべてのものを所有せんがためであつた。現代人の無量大多數の生活は、所有するところ多ければ樂しむところも多しといふ、致命的誤謬によつて支配されてある。わたし達の外的民權的自由は不斷に增進する、しかし同時にわたし達の內的自由は逃げ失せてある。その所有物によつて字義的に所有されてゐる人の、私達のうちに如何に多きことよ。[7]

清貧はたゞ「兄弟達」をして、貧民に交らし、彼等に對し權威をもつて語ることを得せしめたばかりでなく、彼等よりすべての物質的配慮を取り除き、かの純粹な理想家達のために自然が保藏するといふ諸の寶を、障碍なしに享受し得るやう、彼等を自由にしたのであつた。

近代世活が、その無益な歡樂に對する病的探求によつて、わたし達と自然とのあひだに造り上げたところの、ます〳〵厚くなりゆく障壁は、然く生氣と生命とに充滿し、廣濶な空間と戶外の空氣

とを熱愛してゐたところの、これらの人々には存在してゐなかつたのである。これ聖フランチェスコおよび彼の伴侶者達に、自然に對する敏感な感受性をあたへて、彼等と彼女(自然)とを神秘的な諸調に顫動せしめた所以であつた。自然と彼等との交通(コムミユニオン)は、極めて親密であり、極めて熱烈であつて、いま尙ほウムブリアは、その空の諧調的詩と、その春季の嬉々たる煥發とによつて、彼等を研究する最善の文書となつてゐる。この兩者間の絆は、到底解くべからざるものであつて、暫時聖フランチェスコ研究に身を委ねた人は誰でも、彼の傳記者達の或る章句を讀むとき、事件の起こつたその場處を見、動物や事物の朧げなる響きを聞かざらんと欲するも能はざること、あだかも敬慕せる著者の或る頁を讀むときに、人が彼の聲を聞くがごとくである。

斯くのごとく初代フランチェスコ派の清貧崇拜は、その中に、禁慾的な若しくは野蠻的な何ものも、Stylites(柱上に晒されて生活せし隱者達の一派)若しくはナジル(Nasir)派を回想せしめる何ものも含有してゐなかつた。彼女(清貧(ポエルタ))は彼等の新婦(はなよめ)であつた。そして眞(しん)の愛人同志のごとくであつて、耐んで彼女の近くにゐるといふやうな倦怠を、決して感ずることがなかつたのである。

La lor concordia e lor lieti semblanti,
Amor e maraviglia e dolce sguardo
Facean esser cagion de'pensier santi.

十三世紀初頭における理想的勳爵士（ナイト）の肖像を描くことは、すなはちフランチェスコの眞の像を描くことである。たゞ異なるは、勳爵士（ナイト）がその貴女に對して盡したものを、彼が「清貧（ポエルタ）」に對して注いだといふ一點である。この對照は單なる一時の思ひ付きではない。かれ自身がそれを深く感じて、極めて明白に表白してゐる。そして此ことを心に、明らかにして置くことによつてのみ私達は、彼の心情の眞の深處に覗き入ることができるのである。[4]

同一な性質の他の靈魂を見んがためには、ヂネヴァンニ・ディ・パルマ（Giovanni di Parma）および ヂアコポニ・ディ・トディ（Giacoponi di Todi）に、降つて來なくてはならぬ。南歐詩人（トウルバードゥル）としてのフランチェスコの生涯は、既に記されたところである。しかし勳爵士（ナイト）としての生涯を書いた方が、一層善かつたのである、蓋しこれは彼の全生涯の説明であり、また謂はゞ彼の心情の心情であつたからである。友等の歌を忘れて突然アッシジの廣場に立ちとゞまり、彼の新婦なる「清貧（ポエルタ）」に出遇つて、彼女に忠信と愛とを誓約したその日より、ボルティウンクラの裸の地上に裸のまゝ、最後の呼吸を引き取つたその夕に至るまで、彼の全思想が、彼の純潔な愛の、この貴女に注がれたと云ひ得るのである。[5]

ある。ある極めて眞劍な嚴肅な事件が、その甚だ臆病な唇から微笑を奪ひ去らないかぎり、往々子供らしく思はれるほどな無邪氣さをもつて、撓むことなく、彼は彼女に奉仕したのであつた。

「清貧（ポエルタ）」は當時の人々の抱いてゐた（そして恐らく人々が想像してゐるほどには、今日とても失はれてゐない）要求、すなはち極めて崇高で、極めて純潔、神秘であり、また接近すべからざる、しかも尙ほ人々が具體的な形態として描き得るところの、一の理想に對する要求に、驚くべきほど合致したものであつた。時として特權を受けた若干の弟子達は、愛と純潔とのわが貴女が、天から降つて彼女の配偶者に、挨拶するのを見はしたが、しかし見えつ隱れつ彼女は常に、彼女のウムブリアの愛人の側に、密接してゐたのである。恰度「ガリラヤ人」の傍に接してゐたやうに――降誕の厩に、ゴルゴタの十字架上に、また實に彼の肉體の横たはる、借用した墓にさへも。

數年の間この理想は只に聖フランチェスコばかりでなく、すべての兄弟達の理想であつた。清貧のうちにわが gente poverelle（貧しき人達）は、平安と、愛と、自由とを發見してゐたのである。そして新しい使徒達（アポストーレ）の全努力は、この貴重な寶の保存に向けられてあつた。

彼等の崇拜は時として、極端に見えることがあるかも知れぬ。彼等は彼等の配偶者（清貧）に、婚約の朝（あした）の光に濕ふ、纖美な留心や、精麗な慇懃を表したのであつた（しかしこれは、漸次薄らぎゆきて、つひに消え去つてしまふのである）。

弟子達の數は絶えず增加し、殆んど毎週數人の新入者を受け容れた。一一一一年は疑ひもなく、フランチェスコにより、ウムブリアおよびその近隣諸州への旅行に献げられてあつた。かれの說敎は良心の訴へであつた。彼の心情は、一種いふべからざる調子をもつて、聽衆へ傳達したので、その聞きしことを反復しようと人々が試みても、不可能であるのを見出した。一二二一年の「規範」は、これらの奬勵の一概括をわたし達に遺してゐる——

もし最善と認めるならば、すべての兄弟達が爲すべき一の勸告がこゝにある——神を畏れ尊び、彼を讃め稱へよ。彼に感謝すべし。三位にして一體なる、父、子、聖靈の、全能の神なる主を崇めまつれ。懺悔して悔改に適ふ果を結べよ、我等直ちに死すべきものなるを、汝等知ればなり。容せよ、さらば汝等も容されん、汝等容さずば、神もまた汝等を容したまはざるべし。悔い改めて死するものは福ひなるかな、その人は天國に入るを得べければなり——すべての惡より心して遠ざかり、善をもつて終極まで耐へ忍ぶことをせよ。[10]

初代フランチェスコ派の說敎の、いかに單純で純粹に倫理的であつたかを私達は見る。敎義とスコラ學派との煩雜が、全然其處にないのである。靈魂に對してこれが如何に新しくあり、新鮮であつたかを理解せんがために、わたし達は彼に引き繼ぎ來たつた弟子達を、研究せねばならぬ。

彼等すべてのものゝうち最も著名な、パドゥア(Padua)の聖アントニオ(一二三一年六月十三日死。

一二三三年聖列加入。)において、墮落は甚大である。これら兩人間の距離は、イエスを聖パウロから分離するほど大いなるものである。

しかし自分はこの弟子を審判しない。その思想するところを如何に單純に語るべきかを知らずして彼は、常にそれを煩瑣ならしめんことを欲し、御苦勞であつて同時に子供らしい努力により、本來の意義を牽强附會し、聖書の文句の抽出にのみ沒頭してゐた。練金家達が黃金を造り出し得ると妄想して、奇怪な混合に注ぎつゝあつた不斷の努力は、方しく說敎者達が眞理を齎らさうと欲して、聖句の本文に傾到しつゝあつたところのものであつた。

聖フランチェスコの獨創力は、更に一層著しく且つ有力なものであつた。彼によつて福音の單純が再び地上に出現した。かれ自身に擬することを非常に好んでゐたところの、かの雲雀のやうに、彼はたゞ廣い天空にあるときにのみ、自己の平安を感じた。死に到るまで然うであつた。彼の生涯の最後の週間に書き取らしたところの、すべての基督敎徒に對する書翰は、同一な言葉において同一な觀念を、おそらく多少の感慨と悲哀との陰影を添へて、繰り返してゐるに過ぎないのである。彼の顏面に吹き、彼の言葉を携へ去つた夕の微風、これその象徵的伴奏であつたのである。

「汝等の僕のうち最小さきものなる、われ、兄弟フランチェスコは、神そのものなる『愛』により、汝等の脚下に身を投じて、それを接吻せんことを望みつゝ、汝等に祈り且つ求む。なんぢら謙卑り

愛をもつて、主イエス・クリストのこれらの言葉、およびその他のすべての言葉を受け容れ、これに從ひて行はんことを」。

これには少しの辯舌的方式すらもない。こゝを以つて回心者が、信ずべからざる迅速さをもつて增加するに至つたのである。昔のイエスにおけるがごとく、往々一瞥一語がフランチェスコをして、人々を彼に惹き付け、死に到るまで彼に從はしめさすのに、充分であつた。全然愛と、內的洞察と、そして火とより成る、この雄辯の眞髓を分解することは、あゝ、不可能である。文字がその概念を表し得ざるは、恰度それがベエトオフェンのソナタや、レムブランドの繪畫の概念を、示し得ざるのに等しくある。靈魂の偉大なる征服者であつた人々の傳記を讀みながら、往々わたし達自らが依然として冷淡であり、その中に何等生氣と獨創との痕跡を、發見しないのを知つて愕くことがある。その理由は私達の手許にあるのは、たゞ生命なき遺物であつて、靈魂は夙に去つてゐるからである。それは聖餐の白い聖餅(チアルダ)であるが、しかしそれはどうして私達のうちに、最後の晩餐の夜、主の胸に倚(よ)りし、かの愛せられし弟子の情感を喚起し得ようぞ。

フランチェスコが彼が弟子達を募つた階級は、依然として同一なものであつた。彼等は殆んどすべてアッシジか、またはその附近の青年達であつて、或るものは農夫の、或るものは貴族の、息子達であつた。スコラ學派と敎會とを代表するものは、彼等のうちに極めて些少であつた。[11]

萬事が尙ほ未開の單純さをもつて進行した。理論上においては、長上に對する服從が絕對なものであつた。實際上においては、フランチェスコが始終彼の伴侶者達に、全然行動の自由をあたへてゐるのを私達は見ることができる。人々は如何なる種類の新參期もなしに、敎團に加入するを得たのであつて、たゞ彼とともに福音的完全の生涯を送りたき旨を、フランチェスコに語り、貧民に財產の悉くを施すことにより、それを證明すれば事足るのであつた。新入者が素直であればあるほど、彼はこれを愛(いつくし)んだ。彼の「師」(基督)のやうに、失はれし人々に對して、また一般社會がその圈外に放逐したところの、しかしそのすべての罪惡と恥辱とをもつてして、尙ほ且つ凡人や僞善者などよりは、一層聖徒たるに近い人々に對して、一種の偏愛を彼は抱いてゐた。

一日聖フランチェスコはボルゴ・サン・セポルクロ(Borgo San Sepolcro)の荒野を通過して、モンテ カザレ(Monte-Casale)[12]と呼ばるゝ場所に到り、一人の高潔で典雅な青年が、彼の方に來るのを見た。「父よ、自分は喜んで汝の弟子の一人たらんことを欲する」と、彼は云つた。

「わが子よ、汝は若く、典雅で、また高潔である。汝はわたし達のやうに、淸貧に從ひ、悲慘に暮らすことができないであらう」と、聖フランチェスコは云つた。

「然しわが父よ、汝も自分のごとき人間ではないか、汝の爲すことは、自分にもイエスの恩寵により、爲すことができる」と。この返答が聖フランチェスコを甚たく喜ばして、彼はこの青年を祝福し、直ぐ樣彼を敎團に加入せしめ、兄弟アンジェロ(Angelo)といふ名をあたへた。

彼は善く技倆を發揮したので、暫くの後モンテ・カザレの守護者に任命された。[13] さて當時その國に盛んに罪惡を犯してゐた有名な三人の盜賊があつた。一日彼等はこの僧院に來て兄弟アンザェロに、何か食ふべきものをあたへんことを乞ふた。すると彼は嚴しい叱責をもつて彼等に答へた。「何ごとぞ、盜賊、惡徒、暗殺者達よ、汝等は他人のものを盜むことを恥辱としないのみならず、そのうへ神の僕達の施與物をも貪らんとしてゐる。汝等は生きる價値のないものであつて、また人間に對しても、汝等の創造者なる神に對しても、尊敬の心をもつてゐない連中である。去れ、そして二度と汝等を自分に見さすな」と。

彼等は忿怒に充ちて去つた。しかし見よ。わが聖徒が施與の麪麭(パン)の一袋と、葡萄酒の一壜とを携へて歸り、守護者が盜賊を追ひ歸した狀を彼に告げたとき、聖フランチェスコは斯く殘忍な行動をした彼を、嚴しく叱責した ——「汝の服從によつて自分は汝に命ずる。直ちにこの麪麭の一塊と葡萄酒とを携へて行き、盜賊を見出だすまで、山々谿々を尋れ求めよ。そして彼等に自分からとして此をあたへ、彼等の前に跪いて、謙讓に容赦を乞ひ、そして今後惡事を爲すことを廢め、たゞ神を畏るゝやう、わが名において彼等に祈願せよ。彼等もし斯く爲さんか、彼等が常に食らふもの飲むものに事缺かぬやう、自分は彼等の必要品の備へをすることを約束する。かく爲した後、汝は謙讓って此處に歸れ」と。

兄弟アンザェロは命ぜられしすべてのことを爲した。その間に聖フランチェスコはフランチェスコで、盜賊の同心を神に祈つてゐた。すると彼等はわが兄弟に伴れだつて歸つて來た。そこで聖フランチェスコが神の赦罪(ゆるし)を彼等にあたへたとき、彼等はその生涯を一變して教團に加はり、その中にあつて、いと聖く生活して世を終へたのであつた。[14]

往々血の聲について語らるゝことが、更に一層靈魂の聲について眞理であることがある。人が他人を道德的生涯に覺醒せしめたとき、自分自身も一種云ひがたき感激を獲得する。maestro（師）といふ語はしばしば濫用せられてあるが、しかしそれは地上の絆の最も崇高な、最も純粹なものを表

明してゐると云ふべきである。

みづから良心を考察して、雄々しい清淨潔白な精神に充つるとき、恐らく自覺してゞはなしに、自分達を靈界に導き入れて呉れたその人の永久(とこしへ)に愛され愛さるゝ顏(かんばせ)が、過去より出でて眼前に浮び出づるを見ない人々とては、私達の中にあるであらうか。かゝる時にわたし達は、この父の脚下に身を投じ、燃ゆる言葉に私達の嘆美と感謝とを、彼に告げんことを願ふのである。しかしわたし達はそれを能くし得ない。これ靈魂には一種の羞恥があるからである。さりながら誰か知らん、わたし達の焦慮と困惑とが、私達を裏切らずに、却つて言葉が爲し能ふよりも善く、わたし達の心情の深處を披瀝することを。ポルティウンクラにおいて私達が呼吸した空氣は、斯くのごとき喜悅と感謝とを、深く孕んでゐたものであつた。

おほくの兄弟達にとり、聖フランチェスコは眞に救世主であつた。彼は牢獄のそれよりも更に重い鐵鎖から、彼等を救つたのである。それゆゑに彼等の最大の願望は、またこの同一な自由に、他の人々を招くことであつた。

教團に加入後數箇月にして、フィレンツェの傳道に赴いた兄弟ベルナルドを、わたし達は既に見た。衣鉢を受けた時壯年に達してゐた彼は、ある點においてこの使徒的一團の長者(セニオレ)のやうに見える。彼はいかに聖フランチェスコに服從すべきかを知り、最後まで初代の理想に患實であつた。しかし彼

は彼の崇拜する人物の姿に、自己を全く變化せしめ得ると云ふ青年の特權――一例を擧ぐれば兄弟レオのごとき――を既にもつてゐなかつた。彼の骨相には他の人々の、非常な蠱惑(チャーム)であつたところの、青春の獨創と、詩的幻想との觸感(タッチ)がないのである。

この頃二人の兄弟が教團に加入したが、それは聖フランチェスコの後繼者達の、決して受け容れたことのない人物であつた。兩人の物語は初代の單純さを、明瞭に示して呉れる。さて如何なる熱心をもつてフランチェスコが、數箇の會堂を修築したかゞ、記憶されてあらねばなぬ。彼の配慮は更に一段を進めた。會堂の多くが等閑にぜられてあつたのを見て、彼は一種の冒瀆を感じた。金襴で好加減に蔽はれた神聖な事物の不清潔さが、一種の苦痛を彼にあたへ、しばしば何處か傳道に赴いたとき、その地方の司祭達を寄せ集めて、彼は良く氣を付けて勤行の嚴肅を缺かないやうに、懇請するのであつた。そしてこの場合においても彼は、たゞ言葉で說くだけでは滿足せず、ヒーザー灌木の幾本かの莖を束(つか)ねて箒を造り、會堂を掃除することさへした。

一日アッシジの郊外にあつて彼がこの業を爲してゐたとき、一人の農夫が現はれた。彼はフランチェスコを見ようとして、牡牛と車とを野に置き去りにして來たのであつた。

「兄弟」と、彼は入りながら云つた、「自分に藁をあたへよ。自分は汝を助けるであらう」。そして會堂の殘部を彼は修築した。

やがて終はつたときに、「兄弟よ」と、彼はフランチェスコに云つた、「自分は長い間、そして特に人々が汝に就て語るを自分が聞いたとき、神に仕へやうと決心した。しかし自分は如何にして汝に遇ふべきかを知らなかつた。いま神は私達の相會するのを許したまふたので、今後汝の命ずることを悉く、自分は爲すであらう」と。

フランチェスコは彼の熱心を見て大なる喜悅を感じ、その單純と眞摯とにより、彼が善き一托鉢僧となるやうに思つた。

實際彼は餘りに單純過ぎてゐたのであつて、入團後彼は彼の師の一擧一動を、悉く模倣すべきものゝごとくに感じ、フランチェスコが咳をし、唾し、嘆息すれば、彼も同じやうにしたので、遂にフランチェスコはそれを知り、柔和に彼を譴責した。後彼は完全なものとなつて、他の托鉢僧達は大いに彼を嘆美したのであつた。間もなく彼が死んだ後に、聖フランチェスコは彼の回心を語ることを好み、彼を兄弟ヂオヴァンニ(Giovanni)と云はずに、兄弟なる聖(サン)ヂオヴァンニ(ヨハネ)と呼んだ。ヂネブロはその聖い愚行のゆゑに、更に一層有名である。一日彼は病者を見舞にゆき、用事を云ひつけられんことを乞ふた。患者は豕の足を非常に食(くら)ひたく思つてゐる旨を告白した。わが見舞人は即時に飛び出て、小刀(ナイフ)を掖にし、近隣の林にゆき、其處(そこ)に豕の一群を見つけて、その中の一疋の足を切り取り、彼の分捕品を誇りがに携へて、修道院に歸つた。

豕の所有主は狂氣のやうに咆え猛つて、間もなく彼の後を追ひ驅けて來たが、ヂネブロは直ちに彼のところへ行つて、實(じつ)は彼のために非常に善いことを爲したのであると、極めて雄辯に指摘したの

で、彼に非難を浴びせ掛けてゐたその所有主も、忽ち容赦を乞ひ、その豕を殺して兄弟全體を招き、御馳走をするに至つた。ヂネブロは多分、物語が私達を想像せしめるほどには、狂氣染みたものでなかつたであらう。彼に優つて眞摯なる弟子を、フランチェスコ派の謙讓が嘗てもたなかつた。勃興しつゝあつたわが教團に、夙くから民衆が惜氣なく降り掛け、そしてその無暗な使用が教團の墮落を大いに助成したところの嘆美の表彰に、彼は耐へることができなかつた。

ある日彼が羅馬に入らんとしてゐたとき、彼の到着の報知が汎く傳播されたので、彼を迎へやうとして大群衆が出掛けて來た。逃げることが不可能であつたので、彼は忽ち一つの靈感を受けた。都の門近くに若干の子供等が、鵠頑戯をして遊んでゐた。羅馬の人民の驚いたことには、ヂネブロは彼等と一緒になり、そして彼に向かつて爲さるゝ挨拶には一向無頓着で、遊戯に夢中になつてゐたので、遂に憤れる崇拜家達は立ち去つてしまつた。[15]

ボルティウンクラにおける生活が、普通の僧庵のそれよりは、大いに異なつてゐたに相違ないことが明白である。斯くのごとき豐かな若々しさと、單純と、愛とが、その方へ人々の眼を直ちに引き寄せた。四方より彼等は、世の人々の愛するに優つて互ひに相愛し、勞働、喜樂、敬虔の生涯を送りつゝある一の心靈的家族の住む、これらの茅葺の小屋へ引き付けられてあつた。些かな禮拜堂は、やがて世界を照らすべき、新しいシオンのやうに思はれ、多くの人々はその幻のうちに、肯目の人道が

來たつて、再び見ることを得んがために跪くのを見た。

聖フランチェスコに加はつた最初の弟子達のうち、わたし達は兄弟シルヴェストゥロを擧げねばならぬ。彼はわが教團に加入した最初の司祭であつて、またベルナルド・ディ・クインテヴァルレ（Bernardo di Quintevalle）が彼の財産を貧民に分配したその日に、既にわたし達が見た人物である。かの日以來彼には一瞬たりとも平安の時なく、おのが貪婪をみづから苦々しく責めてゐた。夜晝彼はたゞ其事をのみ考へ、幻のうちにフランチェスコが、その地方一帶を惱ました怕ろしい怪物を、咒念してゐたのを見た。[16]

その年齢と、また後に遺した追想とにより、シルヴェストゥロは兄弟ベルナルドに似てゐるのである。彼は通常神聖なる司祭と稱せらるゝ資格を備へてゐたが、大いなる事業、遠國への旅行、危險なる異邦傳道などいふ、眞にフランチェスコ派的な熱望を、抱いてゐたと云ふ氣配が少しもない。カルチェリ（Carceri）の洞窟の一つに退き籠もり、靜想的生涯に耽入して、彼は折に觸れ、彼の兄弟達に心靈上の奬勵をあたへてゐた。[17]

フランチェスコ派の典型的司祭は兄弟レオである。彼の教團加入の日附は、精確に分からないが、一二一四年であつたとするは、當たらずと雖も遠からざるものであらう。魅するがごとき單純、柔和、慈愛、典雅な彼は、兄弟エリアとともに、わが新しい改革が形成されつゝあつたところの、人目に觸れざ

る歳月のあひだ、最も崇高な使命を果たしたものであつた。フランチェスコの懺悔僧（コンフェッソレ）となり、書記となり、彼の寵兒として待遇せられたので、大いに他の反感を惹き起こしたが、その長い生涯の終はりまで、厳守派の首領となつてゐたのである。[18]

ある冬の日、聖フランチェスコは兄弟レオを伴せ、ペルザアから「サンタ・マリア・デリ・アンヂェリ」へ行きつゝあつたが、寒氣が激烈なので彼等は震へてゐた。彼は少し前方を歩んでゐた兄弟レオを呼び掛けていつた、「神の聖旨により、汎く世界の表にある「小さき兄弟達（フラティ・ミノリ）」が、聖淨と建德との偉大なる模範たらんことを所る。然しながら力を籠めて書き記せ、この中に完全な喜悅の存しないことを」と。

更に少し進んで行つて聖フランチェスコは、再び彼を呼んだ、「おゝ兄弟レオよ、たとひ『小さき兄弟達（フラティ・ミノリ）』が、盲人の眼を開き、病めるものを癒し、惡鬼を追ひ出だし、聾（つんぼ）を聞えさせ、尙ほそれ以上のことを爲すとも、たとひ死して四日のものを甦らしめるとも、その中に完全な喜悅の存しないことを書き記せ」。

更にまた少し進んで彼は叫んだ、「おゝ兄弟レオよ、たとひ『小さき兄弟達』が、すべての言語と、すべての學術と、また聖書のすべてとを識るとも、たとひ未來のことのみならず、良心と靈魂との秘密を、窺言し洞察し得るとも、この中に完全な喜悅の存せざることを書き記せ」。

更に少しく進みゆきて聖フランチェスコは再び彼を呼んだ、「おゝ神の小さき羊なる兄弟レオよ、たとひ『小さき兄弟』が、天使の言語をかたり得るとも、たとひ彼が諸の星の運行と、植物の力とを知るとも、たとひ地上のすべての財寶が彼に啓示（しめ）されて、鳥と魚と、すべての動物と、人と、樹木と、岩と、根および水との性質に通ずるとも、この中に完全なる喜悅のないことを書き記せ」。

かくて更にまた少しく前進して、聖フランチェスコは聲高く彼を呼んだ、「おゝ兄弟レオよ、たとひ『小さき兄弟達』が、すべての不

信者を基督の信仰に回心せしめるほど、雄辯に語り得るとも、この中に完全なる喜悅のないことを書き記せ」。

かくて語つてゐる間に彼等は、既に二哩以上を行いてゐたので、兄弟レオは吃驚して彼に云つた、「父よ、完全なる喜悅は何に存するや自分に告げられんことを、神の名において汝に願ふ」と。

すると聖フランチェスコは答へた、「雨に浸され、寒氣に凍え、泥に塗れ、飢餓に死せんばかりになつて私達が『サンタ・マリア・デリ・アンヂェリ』に到着し、門を叩き、門番が腹立たしく出て來て、『汝等は誰であるか』と云ふ。すると「私達は汝の兄弟達のうちの二人である」と答へる。『汝等は僞りを云ふ。汝等は世界を横行闊歩して、貧民の施與を盜む、二人の無賴漢であらう』と云つて、彼は私達のために開けることをせず、雪と雨とに私達を晒し、凍えて飢ゑたまゝ、夜に至るまで放寒して置く。その時、たとひ斯く虐待し、放擲せられても、もしわたし達が謙讓と慈愛との心をもつて、その門番が善く私達の眞相を看破したものであることゝ、また神が彼をして、かく語らしめ給ふたのであると考へるならば、彼に對して少しも囁（つぶや）くことなく、私達はすべてを忍んで耐へるであらう。おゝ兄弟よ、この中に完全なる喜悅の存することを、書き記せ……聖靈がその友等にあたへる、すべての恩寵と賜物とに優るものは、自らを征服し、進んで基督の愛のために、苦痛と、凌辱と、侮蔑と、そして虐待とを受けることである」。[19]

その輕佻でやゝ戯謔的な樣子によつて、この物語は十四世紀の生氣なき彫像を想起せしめるとはいへ、彼の精神は全然フランチェスコ派的であるので、まさに有名なものとなつてゐる。完全と喜悅とを同一視して、喜悅を自己完成の、純粹で清朗な境地に置くところの、その崇高な單純、これらは恐らく全然新を行ふ者や學者を、難なく彼等本來の位地に置くところの、その超越的理想主義、また奇蹟しいものでないであらう。[20] しかし斯く當時の人民の慣習と、その希望とに絶對に相反して、これら

の觀念を彼等に强制せんがためには、一種獨特な精神的精力を、聖フランチェスコが要したに相違ない。蓋し十三世紀の智識的貴族主義が、一樣に智識のうちに完全な喜悅を見出だしてゐた間に、一般人民は奇蹟のうちに、それを發見してゐたのであつた。

疑ひもなく私達は中世紀全體を通じて、最も崇高なる靈魂の避難所であつたところの、かの偉大なる團體の數々を忘却してはならぬが、しかし彼等は到底かゝる精美な單純を有してはゐなかつた。成るほどスコラ學派は常に幾干か、神秘主義への門口ではあつたが、それはたゞ精微な心を有する特別な人にのみ可能なものであつて、信心ぶかい農民には、「基督に倣ひて」は殆んど理解せられなかつたのである。

聖フランチェスコの哲學は、Fioretti（小さき花）のこの一章のうちに、含有されてゐると云つてもいいのである。これより私達は智識に對する彼の態度を豫想し、且つわが有名な聖徒の、いかに貧弱な奇蹟遂行者であつたかを、理解する助けを得るのである。

十二世紀前にイエスが云ひ給ふた、「心の貧しきものは福なり、責めらるゝものは福なり」と。フランチェスコの言葉はたゞ一の註解には過ぎないが、しかしその註解はこの本文に適しいものである。

フランチェスコ派運動において、常に兄弟レオと密接に結合してゐた二人の弟子達に關して、一言すべきことが殘つてゐる——すなはちルフィノ（Rufino）とマッセオ（Masseo）とについてゞある。

前者は聖キアーラの家族と關係ある一貴族の出であつた。かれの幻影と恍惚とのゆゑに、間もなく教團中に著名になつたが、しかし彼の極端な臆病は、說教の初陣において彼を閉塞せしめてしまつた。この理由で彼が常に、極めて遠く隔離した僧庵にゐるのを私達は見る——カルチェリ（Carceri）ヴェルナ（Verna）グレッチオ（Greccio）等に。[21]

アッシジの附近にある一小村マリニァノ（Marignano）の生なれるマッセオは、ルフィノとは正反對であつた。美男子で上品で機智ある彼は、彼の佳しい風采と非常な雄辯とで、人々の注意を引きつけた。彼は一般のフランチェスコ派傳說上に、一種特別な位置を占めてゐるが、確かに彼はそれに足るものである。聖フランチェスコは彼の謙讓を試驗せんがために彼を僧庵の門番[22]とし、料理人としたが、これらの職務に對してマッセオは、「小さきもの」として完全に行動したので、以後わが師は格別に彼を愛し、その異邦傳道旅行に彼を、伴侶者として連れて行つた。

ある日彼等が一緒に旅してゐたとき、シエナ（Siena）、アレッツォ（Arezzo）、およびフィレンツェへの道路の交叉點に到着した。

「いづれの道路をわたし達は採るべきか」とマッセオが訊ねた。

「神の欲したまふものを」。

「しかし神の欲したまふものを、わたし達は如何にして知るべきか」。

「汝は知るであらう。行つて道路の交叉點に立ち、子供がするやうにぐるぐる廻つて、自分が命ずるまで止めるな」。

兄弟マッセオは廻轉し始めた。眩暈して彼は危ふく倒れんとしたが、直ちに持ち堪へた。つひにフランチェスコは叫んだ、「止まれ、汝は何方に面してゐるか」。

「シエナの方へ」。

「大いに善し、神はわたし達がシエナの方へ赴くことを欲したまふ」。[23]

心の斯かゝる決定法は、疑ひもなく、日常生活に用ゆべきものでないが、しかしフランチェスコは、形式においては兎も角、實質においてはこれと同一な方法を、まだ幾個も行なつたのである。

今までは兄弟達が、彼等の僧院に一緒に生活するか、或ひは改悔を宣傳しつゝ、往還を遊歴してゐるのを私達は見たのであつた。然しながら彼等の全生涯が斯くして過ごされたと思ふのは、大いなる誤謬である。初代フランチェスコ派の眞相を知らんとせば、後代の彼等の狀態、並びに一般修道僧の有樣を、念頭から絶對に棄て去る必要がある。成る程ボルティウンクラは修道院であつたが、それは同時に一の工作所でもあつたので、各の兄弟は教團加入前に爲してゐた職業を營んでゐた。更に全く奇怪に考へられるのは、兄弟達が屢奴僕の出稼に行つたことである。

兄弟エヂディオの場合は、例外ではなくして常例であつた。しかしこれは長くは續かなかつた。

何故なれば、家へ雇ひ入れらるゝや否や、托鉢僧達は直ちに、特別な客人として待遇されたからである。勿論初めの間は彼等は文字通りに僕であつて、自ら最も賤しい勞働をなした。彼等が從事すべき働きのうち、フランチェスコが第一に薦めたのは、癩病者の看護であつた。これらの不幸なる者がフランチェスコの回心に、大いにあづかつたことについては、既にわたし達は見た。彼は常に彼等に對して、一種特別な愛憫を持續し、彼の弟子達をもそれに、あづからしめんことを索めてゐたのであつた。

日中は町々村々に傳道し、夜になればこれらの避難所に退き、この最も嫌らしい「神の患者達」を看護して「小さき兄弟達」は數年間を、癩病院から癩病院への遍歴に費したと云つていいのである。

癩病收容所の多數を監理してゐた Crucigeli（十字架を負へるもの）派は、何等の報酬を求めるどころではなく、患者達の殘したものを何でも喜んで食するところの、これらの厚意ある援助を、常に歡迎した。さて實際、癩病者看護の唯一の目的のために任ぜられたものであるとはいへ、病者達が餘りに横着で、感謝するかはりに、恩人達に對して囁いたり、時としては叱責したりする際には、この教團の兄弟達も、往々忍耐を失ふのであつた。かゝる度し難き場合には、フランチェスコおよびその弟子達の幹旋が、特別に有用なものであつた。大抵一人の兄弟が一人の癩病者に附き切りにな

り、その伴侶者兼奴僕として、しばしば長期に及ぶのであつた。[21]

以下に記す叙述は、これら不幸な者に對する愛と、彼等に對する彼の態度とを示してゐる。[23]

ある日聖フランチェスコがゐた場所に近い、一病院の癩病者と病人とを、兄弟達が看護してゐた。そのうちに一人、極めて短氣で、心僻み、怒り易い癩病人があつて、誰しも皆彼を惡鬼につかれたものであると信じてゐたのは、實際無理からぬことであつた。何故なれば彼は彼を看護する人々を、無暗に罵つて打擲し、更に甚だしいことには、始終愚罷の基督と、そのいと聖き母なる處女マリアとを侮辱し、冒瀆してゐたので、もはや誰一人彼を看護し得るものも、しようとする者もなかつたのである。兄弟達は彼等の忍耐の功德を積むために、彼が注ぎ掛ける罵詈讒謗を、喜んで受けたであらうが、しかし彼等の靈魂は到底、基督とその母とに對して發せられるそれを、聞くに堪へることができなかつた。この故に彼を見棄てゝしまふのであつた。然しながらその時、程遠からざる處に住んでゐた聖フランチェスコに一伍一什を詳しく告げずに去ることをしなかつた。

彼等が告げた時に、聖フランチェスコは自らこの憐なる癩病者のところへ行つて、「神なんぢに平安をあたへ給はんことを、わが愛する兄弟よ」と、寄り添ひつゝ彼に云つた。

「自分から平安とすべての善きものを奪ひ去り、且つ自分の肉體を、穢臭と腐爛との塊とした神から、一體どんな平安が受けられるのか」と、癩病者は云つた。

聖フランチェスコは彼に云つた、「わが兄弟よ、忍耐せよ、わたし達の靈魂の救濟のために、神が病氣をこの世にあたへられるのである。忍んで耐へるならば、それはわたし達にとり、大いなる功德の基となるであらう」と。「晝夜絶えず自分を苦しめる痛みを如何して忍ぶことができようぞ。然のみならず自分が苦しむのは病氣のためばかりでない。自分を看護するやうに汝が遣した托鉢僧達が一體怪しからぬのであつて、せねばならぬ看護を少しもしないのである」。

そこでフランチェスコはこの癩病者が、惡の靈につかれてゐたのを認めたので、彼は彼のために祈るべく跪くのであつた。それから起きあがつて彼に云つた、「わが子よ、汝は他のもの等で滿足しないがゆゑに、自分が看護するであらう」と。

「それは構ないが、しかし彼等よりも善く看護ができるであらうか」。「何でも汝の欲することをするであらう」。「大いに好し、惡臭に堪へ切れないがゆゑに、頭の先から足の端まで自分を洗つて臭れ」。

そこで聖フランチェスコは、急いで善き香のする草をもつて水を沸かした。次いで癩病者の着物を脱がし、一人の兄弟に水を掛けさせながら、彼を洗ひ出した。すると見よ、聖フランチェスコがその聖き手をもつて、彼に觸るゝすべての處、不思議なる奇蹟によつて、癩病が消え失せ、肉が完く健全なものとなるのであつた。そして肉が癒さるゝに準じて、この不幸なる人の靈魂もまた癒され、自己の罪惡に對する鮮かな悲哀を感じ初めて、愴然として彼は泣いた……かくて肉と靈とが共に全く癒されたとき、彼は全力を盡して叫んだ、「自分は嗣なるかな、兄弟達に向かつて發し、且つ行なつた罵詈と凌辱とに對して、自分の短氣と冒瀆とに對して、自分は地獄に價ひするものであつた」と。

既にその單純さについて私達が見、また特に或る一人の癩病者の看護を委ねられてあつたところの、かの兄弟ヂオヴァンニは、一日、恰かもフランチェスコがこの傳染病の犠牲たるべきものでないかのやうに、彼を伴ふてボルティウンクラの方へ赴いた。非難が假借することなく彼の頭上に加へられた。癩病人はこれを聞いて悲哀と苦惱とを蔽ひ得ず、ふたたび世界から放逐せられたかのやうに感じた。フランチェスコは速かにこの樣子を見て取り、鋭く悔恨した。「神の患者」の一人を悲しませたと云ふ考へは、堪へ得ざるものであつた。彼はたゞに患者の宥恕を乞ふたばかりでなく、食物の

準備を命じ、その者の側に座して食を共にし、一つ粥椀から食事をした。何たる忍耐をもつて凡る方法を盡し、彼が彼の理想實現を追ひ求めたかを、わたし達は見る。

今述べた此らのことは、わがウムブリアの運動が、神の王國を地上に實現する、最も謙讓な、そして同時に最も眞摯で實際的な企圖であつたことを示してゐると、自分には考へられる。機械的な敬虔の、迷信的な粗暴、また或る加特力教徒の欺瞞的奇蹟遂行から、こゝに私達は如何に遠ざかつてあるかよ。更にまた或る新教徒の凡庸で、自足し、理窟と議論とを好む基督教からも、如何に遠ざかつてあるかよ。

神と靈魂との間に、何等中間物を置かぬ點からして、フランチェスコは神秘家の徒であるが、しかし彼の神秘主義は、瞑想のタボル山に弟子達を伴へるイエスのそれである。喜悅に溢れて彼等が庵を造り、巔にとゞまりて恍惚の歡喜に、みづからを滿足せしめんことを切望したときに、「愚かなるものよ、汝等はその願ふところを知らず」と彼等に語り、彼等の視線を、收ふものなき浮のごとく迷へる群衆に向けさせて、彼は、平野のうちは呻吟し、苦難し、胃瀆する人々の眞中へ、彼等を伴ひ歸りたまふた。

フランチェスコの精神的身長が高くなればなるほど、ます〳〵彼は危險に曝露されて、たゞ極少數の人々によりてのみ理解され、彼に最も接近せる人々には失望せられるといふ有樣に、立ち到つ

たのである。フランチェスコ派の著者達を繙くとき、人は絶えず模型の灼耀たる美が、いかに弟子達の魯鈍によつて害はれてあるかを感ずる。それは止むを得ざることであつて、師と伴侶者達との間のこの差違は、教團の眞の始めからして明らかに認められるのである。傳記者達の大多數は、ある兄弟達並びに教會的段階政治から起こつた困難に、埋沒の面帕を被せてしまつたが、しかし私達はこの一般的沈默のゆゑに、みづから欺かるを許してはならぬ。

此處彼處に私達は、謂ゆる無意識であるといふので、一層貴重な記事を發見するのである。例へばフランチェスコの後年の一親友となつた兄弟ルフィノは、入團後間もなく反抗の態度を採つた。托鉢僧達を不斷の祈禱に耽らしめるかはりに、癲病人看護のために彼等を四方に派遣するは、フランチェスコの愚昧であると彼は考へた。[36] かれ自身の理想は、當時人口に膾炙してゐたところの、聖アントニオ、聖バウロ、聖パコニウス（Paconius）およびその他二十人の物語に叙べられてあるごとき、Theobaide の隱者達の生涯であつた。彼は一度カルチェリの一洞窟中に大齋を過ごした。聖木曜日が到來したので、等しく其處にゐたフランチェスコは、附近に散在して、洞窟や小屋のうちにゐた、すべての兄弟達を召集し、この聖別されし記念の日を、かれ自身とともに守らせようとした。ところがルフィノは來たることを拒んで云つた、「そのことに就ては自分はもはや汝に從はないことに決心した。すなはち自分はこゝに止まつて、孤獨に生活しようと思ふのである。斯くなすこ

とにより、この人（フランチェスコ）とその愚昧とに身を委ねるよりも、確かに善く自分は、救はれるであらう」と。

その大部分が若くて情熱的であつたので、兄弟達が彼等の活動を目立たぬやうにする習慣を造るのは、決して困難のないことではなかつた。根本においてわが師に一致しながらも、少しは耳目を聳動し、いま少し彼等の信仰を人目に觸れるやうにして、公衆の注意を惹かんことを願つた。其處にみづから聖徒たることをもつて滿足せず、しかも斯く見えんことを欲してゐた人々が、彼等のうちにあつたのである。

---

1 詩篇第百三十三篇の一節。

2 この森林は消え失せてしまつた。フランチェスコの勸告の若干が、Admonitionis のうちに蒐集せられてある。

3 「遺言」中の一句 licet eis habere ferramenta et instrumenta suis artifrus necessaria.（彼等の職業に必要なる道具と器具とを所有することが許される）は、或る托鉢僧達が實際仕事に從事してゐたことを、充分證明してゐる。

4 「小さき花」の Vita d'Egidio（ヨヂディオの傳記）を見よ。

5 彼の頭腦の機敏さを示す一例がある。曰く「神の處女なる榮光の母は、罪人をその兩親とし、また如何なる宗教的教團へも加入しなかつたが、しかし彼女は依然として彼女たるを失はない」と。

6 「遺言」中の一句 firmiter vole quod omnes laborent ……（すべてのものが勞働せんことを、自分は固く願望する……）は、教團の起原において既に爲した訓誡を、極めて崇敬に反復してゐるがゆゑに、至つて重要なものである。

7 Nihil volebat proprietatis habere ut omnia plenius possit in Domino possidere. B. de Besso（すべてのものが主にあつて裕かに所有してあらんがために、何人も所有せんことを望まなかつた。ベルナル、ド、ベッス）。

8 ダンテの神曲、天國篇第十曲の七六―七八。

9 「小さき花」第十三章を見よ。

10 「小さき花」の聖痕第一考。

11 フランチェスコ教團は最初は全然平徒信的であつた。また自分の知つてゐる限り、平信徒と司祭との間に服裝の相違のない、現代唯一の教團である。この點においてわが教團に變化をあたへたのは、北方諸國からの托鉢僧達の感化である。平信徒をすべての任務に携はらしめなくしたのは Eversham の Aymon（團長）であつた。僧職任命を拒んだ初代兄弟達のうちには、單に讓謙の精神からして然なしたものも確かにあつたが、しかし斯かる情緒をもつて全體を説明し去る譯にはゆかない。其處たはまた革命的願望からして、斯くなしたものもあつたのである。且つまた祭司の時代に引き繼いで來る時代に關する Gioachino di Fiore の聖言の朧げな記憶を抱いて、斯く行動したものもあつたであらう。Frate Pellegrino non volle mai andare come chierico, ma come laico, benchè fassi molto litterato e grande decretalista. Fior., 27.（兄弟ペルレグリノは、非常な學者でまた偉大なる布令研究家であつたが、決して僧侶たることを欲せずして、平信徒たらんことを望んだ。「小さき花」第二十七章）。

12 モンテ、カザレの僧院は、ボルゴ、サン、セポルクロより二時間の處にあつて、いま尙ほ原の狀態の儘に存在してゐる。それはフランチェスコ派隱遁地中の、最も意義あり、興味あるものゝ一つである。

13 修道院の長としてこの守護者の職は、兄弟達がウムブリアの村々に、小さな群々を形造つた時――即ち多分一二一一年頃から起こつたものであらう。數年後數々の修道院は一の custodia（監督區）を組織し、遂に一二一五年頃、中央伊太利亞は幾個かの Provincia（州）に分かたれ、その各に州長が置かれた。フランチェスコは決して既に存在してゐないものを、設定しようとはしなかつたがゆゑに、此等のことは徐々に形成されたのに相違ない。

14 「小さき花」第二十六章。
15 「小さき花」の Vita di fra Ginepro（ヂネプロ傳）を見よ。
16 「小さき花」第二章を見よ。この夢のうちの龍は、多分異端を象徴するものであらう。
17 「小さき花」第一章。第十六章。
18 彼は一二七一年の十一月十五日に死んだ。
19 「小さき花」第八章。
20 コリント前書第十三章の、パウロの有名な愛の歌と、これとの間にある形態上の類似を玆に指摘する必要がないであらう。
21 「小さき花」第一、二十九、三十、三十一章を見よ。
22 名を擧げてないが、多分カルチェリ（Carceri）の僧院であつたであらう。「小さき花」第四、十、十一、十二、十三、十六、二十七、三十二章を見よ。
23 「小さき花」第十一章。
24 「小さき花」第四章。
25 「小さき花」第二十五章。
26 「小さき花」第二十九章。

第九章　聖キアーラ

ウムブリアにおける人民の敬虔は、聖フランチェスコの記憶を、聖キアーラ（Santa Chiara）のそれより、決して分離しない。それは正當である。

キアーラは一一九四年、アッシジに生れた。從つてフランチェスコよりは、約十二歳若くあつた。彼女はスキッフィ（Schiffi）といふ高貴な家柄のものであつた。彼女の想像心が醒めて動く年頃に、ペルナルドネの息子（フランチェスコ）の愚行が、細々と述べ立てられるのを聽いてゐた。內部の軋轢によつて、支離滅裂になつてゐる都市へ、わが聖徒が突如として平和の天使のごとくに出現し、初めて殿堂において說敎したときに、彼女は十六歳であつた。彼女にとりて彼の訴ふるところは、まさに默示のやうであつた。恰もフランチェスコが彼女の秘密な悲哀と、彼女自身の深い深い煩悶とを觀破して、彼女のために語つてゐたかのやうに感ぜられた。そしてこの若い娘の心情にあつて、燃えてあり熱してあるものゝすべてが、恰度不意に吐き口を發見した奔流のやうに、彼によつて指示された流路へと、驀進するのであつた。蓋し聖徒達にとりて、英雄達のごとく、至高の激勵は女性の嘆美であるのである。

しかし茲にては、特に、かの性慾的本能が何ら關ることのないところの、男女間の結合を理解し得ない下劣な判斷を、わたし達は差し控へねばならぬ。兩性の結合をして神聖に近き或るものたらしめるのは、それが靈魂の結合の豫表であり象徴である場合に限るのである。肉體的愛は、更に一層永續すべき愛の焰を、人心の裡に點ずるやうに企てられたところの一時的な火花である。それは神殿の外苑であるが、至聖所ではない。その測るべからざる價値は、あだかも閾を越えて踏み入れようと招くがごとく、突然わたし達を至聖所の戸口に、殘し去ることに存するのである。

自然の神秘な嗟嘆が、靈魂の結合にむかつて發せられる。これ逸樂者すなはち愛の異教者達が、彼等の犧牲を献げる「識らざる」神である。そしてこの神聖なる印銘は、たとひ塗抹せられてゐるとしても、たとひすべての汚瀆に穢されてゐるとしても、世の人に靈感をあたへ、これに對して、酩酊者や犯罪者に對するごとき甚しき嫌惡を起こさゞらしめるのである。

しかし時として――わたし達が考へるよりもしばしば――その最初の會合において至聖所に入り、そして一たびかしこに入らんか、それ以外の結合を思ふことが、單に墮落であるといふのではなく、不可能であるとせらるゝほど、純潔にして、この世ならぬ靈魂がある。斯くのごときがこれ、聖フランチェスコと聖キアーラとの愛であつた。

しかし此等は例外である。この至高の純潔のうちには其處に神秘的な或るものがある。それは極

めて高貴であつて、人々に語らんとするのは、まさしく適はしからぬ言葉、いな害をあたへる言葉で、寧ろこれを汚す危險を、冒すものといふべきである。

聖フランチェスコの傳記者達は、一般群衆の眼前に、若干の佳人を出現せしめることの危險を、明らかに感じてこれを避けようとした。この一事がわたし達にとり、彼等の著述の大なる缺點となつてゐる。彼等はフランチェスコの眞の肖像よりも彼等がまさに斯くあるべきものと考へたごとく、彼の弟子達の典型として必要なるところの、教團の完全なる團長のそれとして、わたし達に傳へんと試みたのである。かくて彼等は、彼等が書き傳へようとする人々の事情を念頭に置いて、此處彼處に形狀を省畧せる典型を作成した。これ誤つて解釋せられもして、假借せざる敵人の惡意に對し、材料を供給することにもなり、或ひはそれよりして、心靈上の事柄に不徹底な弟子達が、自己を危險な親交(女性との)に容す口實を引き出すことになりはせぬかと、恐れたのであつた。斯くして聖フランチェスコと一般女性との關係、殊に聖キアーラとの關係は、チェラノのトマゾによつて、全然改竄されてしまつた。これは然らざるを得なかつたのであつた。わたし達はそれに對して彼に、不平を云つてはならぬのである。一教團の創設者の傳記が、一修道僧によつて書かれんとするとき、その當然の性質として、それは常に「規範」の附錄、もしくは説明としてゞあつた。そして「規範」は殊にもしその教團が、數千の團員を有してゐる場合には、必然に精選されしものゝためにではな

く、その群の大部分を占めるところの一般人のために造られねばならぬ。

このゆゑに斯かる肖像が描かれて聖フランチェスコは、峻嚴な禁慾者として表され、彼に對して女性は、化身せる惡魔の一種類として示される。傳記者達は更に進んで、彼がたゞ二人の女性しかを肉眼で見なかつたとさへ斷言してゐる。これは明らかに誇張であり、いな事實に相反するものである。

しかしこの事柄におけるわがウムブリアの豫言者の、眞の態度をわたし達は憶測し、發見しようとはしない。それと氣付かずにチェラノ自身が、かれの誤謬を訂正するに充分なほど、詳細に述べてゐるのである。またこの外に他の文書の數々があつて、その中に散見せらるゝ暗示が、全然故意でなしに、驚くべきほど相互に對應し一致してゐる。そして其等を綜合すれば、これらの美しい二つの靈魂の交際について、知りたく思ふことの殆んど全部が、あたへられるのである。

聖ルフィノにおけるフランチェスコの說敎の後に、キアーラの決意が急激に定められた。懶惰で華奢な生活の無意義から離れ去つて、みづからを貧民の婢とした。彼女の全努力は、毎日愛と淸貧との王者の道に、前進すべきやう傾けられてあつた。そしてこの事に對しては、彼女に圖らずもそれを啓示した彼に、彼女はたゞ從ふのほかなかつたのである。

彼女は彼を探がし出して、彼女の心情を打ち開けた。かの意氣昂揚、すなはち女性の美しい天賦

であつて、もし下劣な情慾と不安との陷穽を、實にしばしば氣遣はしめるやうなことがなかつたとすれば、自由に赴くまゝに働かしめんと待ち構へてゐる無邪氣と纖美との結合をもつて、キアーラは彼女自身を、フランチェスコに献げたのであつた。

他の人々よりも一層多くの苦難を受けることは、聖徒達の特權の一つである。蓋し彼等は彼等の一層愛に充てる心情のうちに、世界のすべての悲哀の反響を感ずるからである。しかし彼等はまた普通人民の決して味はゝざる喜悅と、歡喜とを知つてゐた。彼の前に跪き、祝福のうちに彼女を——福音的生涯に聖献せしむべき言葉を待つてゐるキアーラを見たときに、何たる喜悅の表白し難き歌が、フランチェスコの心情に爆發しなければならなかつたかよ。

この會見が他の聖徒フラ・アンヂェリコ（Fra Angelico）を靈感して、かの天上のエルサレムの光の裡に既に輝き、その閾を横切らんとするまへに、一の接吻を交はす二人の選ばれし靈魂を、彼の傑作のうちに引き入らしむるに至らなかつたとは、誰が知らう。

靈魂は、花のごとく、決して欺くべからざる自己特有の香をもつてゐる。一瞥がフランチェスコにとりて、この靈魂の深處に下りゆくに充分であつた。キアーラをして無益な吟味に委ねるには、彼は餘りに多く親切であり、またみづからを慣習と無意味な儀禮とに細心に服從せしむべく、餘りにおほく彼は理想家であつた。彼が托鉢敎團を創設したときのごとく、彼はたゞ彼自身と神とに相

談した。こゝに彼の力が存してゐた。もし彼が躊躇したか、或ひはひたすら教會的規則に單純に服從してゐたならば、彼は何ごとかを爲すまへに、二十度も立ちどまつたことであらう。しかし彼の成功は極めて偉大なるもので、彼が教會的規則を無視するに至つたことを、傳記者達が氣づかなかつたほどである。

一補祭に過ぎなかつた彼が、權能を冒してキアーラの誓約を受け入れ、そして暫時の新參期をすら課せずに、教團加入を許可したのであつた。かゝる行動は教會のすべての非難を、その遂行者のうへに引き寄せでは置かなかつた。しかしフランチェスコは、既に羅馬教會の名において語る人々によつてさへも、默認さるゝことの多い有力者の一人となつてゐた。

フランチェスコは棕梠日曜日と、聖月曜日（一二一二年三月十八日——十九日）との間の夜に、キアーラが父の城を竊かに去つて、二人の伴侶者とともに、ポルティウンクラに來たり、其處で彼は彼女を待ち受けて面帕をあたへようと決心した。彼女は丁度托鉢僧達が、朝禱を誦唱してゐたときに到來した。傳へいふ、彼等はこの新婦を迎へんがために、手に蠟燭を携へて外へ出た。その間ポルティウンクラの周圍の森林からは、この新しきはな嫁に對する、喜悅の歌々が反響した。次いで三年前フランチェスコが、イエスの決定的召命を聞いたところの、その同一な祭壇において彌撒が始まつた。彼は昔ながらの場所に跪いてゐた。しかし今や心靈的全家族に取り圍まれて。

キアーラの情感は容易に想像される。彼女が踏み出した一歩は、まさしく英雄的なものであつた。蓋し彼女は彼女の家族から來たる、如何なる迫害に身を暴露しつゝあつたのか、また「小さき兄弟達」の生涯について見聞したことが、清貧に婚約することにより、彼女自身が受けねばならぬ不幸に對して、充分な警告をあたへるものであつたことを、知つてゐたからである。疑ひもなく彼女はこの禮拜式の辭句を、彼女自身の思想に調和させて解釋した——

エホバいひたまへり、誠にかれらはわが民なり、虛僞をせざる子輩なりと
かくてエホバはかれらのために救主となりたまへり
かれら艱難のときに救ひなきにあらず
その面前の天使達彼等を救へり。

かくてフランチェスコは、彼の弟子達にイエスの言葉を再び讀んだ。彼女はその言葉に、彼女の生涯を歸依せしめんことを誓約した。彼女の髮は斷ち切られて、萬事が果たされた。數分後にフランチェスコは、一時間の道程にあるベネデット派の尼僧院へ、彼女を導きゆき、其處に彼女は暫時滯留して、事件の進行を待つことゝなつた。

その直ぐ翌朝彼女の父ファヴォリノ（Favorino）が、すべての人々に對して罵詈し、歎願し、惡口

しつゝ、數人の伴侶者をつれて到着した。彼女は頑として動かず、遂に彼等が腕力に訴へても、彼女を奪ひ去らんとする考へを、放棄するに至つたほどに、大なる勇氣を示したのであつた。

然しながら彼女の苦難は、これで終はらなかつた。この活劇がペネデット派の人々を愕かしたのであつたのか、われし達は斷言し得ないが、しかし二週間を經ざるうちに、彼女がアッシジの他の僧廡、すなはちパンソ（Panso）における「サン・タンヂェロ」（Sant-Angelo）のそれにゐるのを私達は見る。復活節の一週間後、彼女の妹なるアニェゼ（Agnese）が、またもや「清貧」に奉仕すべく、其處に彼女とともになつた。この時の父の忿怒は怕ろしいものであつた。親屬の一群を率ゐて、彼は修道院に侵入したが、しかし暴行も毆打も、彼の十四歳の子供を屈服せしめるに足らなかつたのである。彼女の叫喚に拘らず、彼等は彼女を曳き摺り去つた。彼女は失神した。するとその小さい生氣なき肉體が、突然非常に重くなつて來たので、彼等はこれを野原の眞中に、遺棄するに至つた。數人の勞働者達が、この痛ましい光景を憐憫をもつて眺めてゐたが、遂にその叫びは神に聽かれてキアーラは、急いで彼女の妹を救ひに來たのであつた。

この修道院における彼女達の滯留は、極めて短い期間であつた。彼女達はこれについて、甚だ愉快な印象を受けて、去らなかつたやうに見える。フランチェスコは他に幾人も、彼の二人の女友達と一緒にならんことを熱望してゐたのを知つた。そこで彼は、彼女達が彼の指導のもとに生活し、そして全

く自由に、福音の規範を修業し得る隱遁所を、發見することに身を委ねた。

彼は長く探がすにおよばなかつた。スバジオ山のペネデット派の修道僧達は、常に彼等自身を人氣あらしめる有りと凡ゆる機會を捉へようとしてゐた。彼等はカマルドリ（Camaldoli）の修道會に屬してゐたが、一般人民はそれを殊更に憎惡し、その修道院の幾個かは、近く掠奪を被つたのであつた。幾分の犧牲を拂つて、自分達の財産と特權との破滅を救はんと試みつゝあつた八人の修道僧達のほかに、僧院には數へられる人とてはなかつた。一二一四年四月二十二日に、彼等はアッシジの自治市に、市廳として今尚ほ立つてゐる一記念物、すなはちミネルヴァの神殿をあたへた。

ボルティウンクラのために、既に彼等の債務者となつてゐたフランチェスコは、更にもう一度彼等に話を持ち掛けた。一般人民の要求の化身であつた彼に、用立て得るこの新機會を喜び、彼等は聖ダミアノ禮拜堂を彼にあたへた。多分彼等はこの新教團を庇護することによつて、彼等が不平をいふ理由のあつた監督グイドに、面當するのを大いに快く思つたのかも知れぬ。それは兎も角として、新禱と瞑想とに、極めて善く適してゐたこの僧庵に、フランチェスコは彼の心靈上の娘達を置いた。彼自身の手によつて修復されたこの聖殿のうち、彼に告ぐるところがあつた彼の十字架像のもとにあつて、キアーラは以後新禱することゝなつた。それは神の家であつた。それはまた宜しくフランチェスコの家であるといつて、差支へがなかつた。その閾を横切るとき彼女は、かの未來の輝け

るまた混亂せる幻影に、情感を顫はしつゝ、生まれて始めて彼女の夫の家に入らんとする妻の、甚だ甘美なるとともに、また極めて嚴格なる感情を、疑ひもなく經驗した。

かゝる始まりの事情を、全く誤解しないために、いかに急速に外部的影響が、フランチェスコの最初の思想を變形せしめたかを、わたし達は知らねばならぬ。この時において彼は、第一の教團に對するとと同樣、決して第二の教團を創設しようとは、期待してゐなかつたのである。彼女の家族からキアーラを奪ひ去つたのは、壓制さるゝ女性を救ひ、彼女をおのが保護の下に置くところの、一人の眞の勳爵士(ナイト)として行動したのに過ぎなかつた。聖ダミアノに彼女を置いたのは、彼に模倣せんとするもの等のために、隱家を準備し、世より離れて福音の「規範」を、修業せしめんがためであつた。しかし彼は、彼および弟子達が、その使徒とし宣傳者として努力し、またキアーラと彼女の伴侶者達とが獨身の生涯において實現せんとしてゐた「完全」てふことが、社會的生活の裡にあつても亦實行し得ざるものであるとは、決して考へてゐなかつた。そこで不適當に名づけられた Tertiari(テルティアリ)すなはち第三（教）團といふものが出來た。これはその根本においては、第一教團とは分離すべからざるものであつた。この第三（教）團は一二二一年に創設せらるゝ必要がなかつたのである。蓋しそれはたゞ一個の良心がフランチェスコに從ひ、しかもボルティウンクラに赴き得なかつたので、彼の教訓を實生活にあつて行はうと決心した、その瞬間から存在してゐたのであつた。靈魂の仇敵は

彼に對して、イエスに對してと同樣に、廣き意味に解せらるゝ貪婪といふことであつた――換言すれば、人々をしてその心情を物質的執着に束縛し、黃金の幾片と土地の幾エーカーとの奴隷にし、自然の美に對して無感覺にし、そしてと清貧と愛との弟子達たる彼等のみが知る無限の喜悅を、彼等から奪ひ去るところの、盲目これである。

心情においてすべての物質的隷屬から自由であつた誰でも、貯蓄することなしに生活せんと決心した誰でも、おのが手をもつて勞働することを喜び、そして自分の消費せざるものをすべて、聖フランチェスコが「主の食卓(メンサ・ドミニ)」と呼んだ公共基金を設定するために、忠實に配分する凡(あら)ゆる富者、勞働することを喜び、缺乏の度合に嚴密に應じて、この「主の食卓」に自由に赴き得る凡ゆる貧民、斯くのごときがこれ當時、眞のフランチェスコ派の人々であつたのである。

それは一の社會的革命であつた。

その當時には一若しくばそれ以上の教團がなかつたのである。「天福の福音(ベアライトワド)」が再び設定されたのであつて、十二世紀を拒つるその昔のごとく、それはすべての境遇にみづからを適應せしめ得るものであつた。

あゝ、僧正(カルディナル)ウゴリニによつて代表された教會は、よしフランチェスコ派の運動を失敗せしめる原因でなかつたとしても、少くともその周圍に籬(まがき)を廻らして、遂に數年後には、その本原的特質の全

部を殆んど失ふに至らしめた。

既に見たやうに、清貧といふ言葉は、聖フランチェスコの見解を如何にも不完全にしか表現してゐない。何故なれば、眞意においては清貧の誓約が、自由の誓約であるのに、この言葉は禁慾や戒律の觀念を含有してゐるからである。財産は鍍金した針金の籠であつて、その中に憐なる雲雀が、時としては全然馴れてしまひ、遂に蒼空に翔らんがために、飛び去らうといふことすらを、考へなくなるのである。[7]

最初より聖ダミアノは、今日の峻嚴な規則を遵守するキアーラ派の僧庵からは、極端に相反するものであつた。この會堂は今日も尙ほフランチェスコが見たそのまゝの姿である。この神嚴な、また魅するごとき隱舍を、害はれずに保存し、そして愚にもつかぬ裝飾で汚損しなかつたことに對して私達は、「小さき兄弟達」に感謝すべきである。ウムブリアの土地のこの小さい一隅は、わたし達の子孫にとり、基督が暫時坐したふたヤコブの井のごとく、靈と眞とにおいて禮拜する、慕はしき庭の一つであるであらう。

其處にキアーラを置かうとしてフランチェスコは、彼のために準備して置いた「規範」を、彼女に手渡した。それは疑ひもなく、宣教者的生涯に關する教戒を除ける、「兄弟達」の規範に似てゐた。彼はそれに加ふるに、彼および彼の弟子達が、キアーラと彼女の將來の伴侶者の必要物を、勞働

かまたは施與によつて供給することを約束した。それに對して彼等はまたでき得る限りの用事を、「兄弟達」のために盡した。フランチェスコがいかなる熱心をもつて會堂を、その中に行はるゝ禮拜に適しいものたらしめんと盡力したかを私達は見た。神聖なる用務に使はるゝ亞麻布が、少しでも清潔でないことは、彼には忍び得るところでなかつた。キアーラは祭壇布と聖餐布とのために、絲を紡ぐことに身を委ね、「兄弟達」はそれを、その地方の貧乏な會堂へ配布した。加ふるに初め數年間彼女は、フランチェスコが送り越す病人を看護してゐた。そして聖ダミアノは一時、一種の病院であつた。[8]

「貧しき貴女達の奉仕者」と呼ばれた一、二の托鉢僧は、ポルティウンクラの人々に倣ふて、禮拜堂の側にみづから小屋を造り、特に「姉妹達」の保護に任じてゐた。フランチェスコもまた手近にゐた。四歩の長さある一種の高臺が、隱舍を瞰下してゐる。キアーラは其處に些なか花園を造つた。黄昏になり、彼女の花に灌ぐために其處に行つたとき、彼女は半リーグ足らずの距離にポルティウンクラが西方の空の極光に向かつて、屹立してゐるのを見ることができた。

數年間この二つの家の關係は繼續して、美と自由とに充滿してゐた。「兄弟達」を受け入れたフランチェスコの伴侶者達は、また「姉妹達」をも受け入れて、傳道旅行からの歸還には、常に聖ダミアノへの新參者をも伴ふて來たのであつた。

しかし斯かる狀態は永くは續き得なかつた。フランチェスコとキアーラとの親交、初期の托鉢僧達と「姉妹達」との親密は、その各が數百の人員となるに及んでは、この二教團の關係に對する典型たることが、出來なくなるであらう。たとひその女友人（キアーラ）ほど明白にではなかつたが、フランチェスコみづからもこのことを、夙に認めてゐた。キアーラは彼よりも二十七年間生き存らへた。かくて彼女は「兄弟達」のあひだに、並びに最初聖ダミノの「規範」を遵守した僧院の各における、フランチェスコ派の理想の破滅を見る時を得た。彼女自身も事件に迫られて、彼女の修道院に規範を置くの、餘儀なきに到らしめられた。しかし臨終の床に至るまで、彼女は强烈にして同時に聖き、英雄的精神と勇敢とをもつて、眞のフランチェスコ派の理想擁護のために戰つた。これによつて彼女は、良心の證明者としての、第一位を占めたのであつた。半世紀以上に亘つて、法王座に引繼ぎ來たる法王達と、瞬間また瞬間、抗爭を支持し、常に變らず、尊嚴に、不動に、遂に彼女の勝利を贏うるまで、死をさへ肯んじなかつたこの女性の姿は、宗教歴史における最も愛すべき畫像の一つではないか。

彼女の生涯を叙述することは、この抗爭を叙述することである。その數おほき變遷の跡方は、羅馬教會廳の書類のうちに見出され得るのである。フランチェスコは彼の僧院に對し、多くの危險を防禦してはゐたが、しかし少しの權能すらを讓歩することを肯んじなかつた守護者達には、遠の敎も我

を折らざるを得なかつた。特に後にグレゴリウス九世となつた僧正ウゴリニは、これらの事件に關して、頗る解し難い態度を採つた。彼がフランチェスコおよびキアーラのうへに、絶えず愛情と嘆美との表白を濫費してゐたのを私達は見る。そしてそれが如何にも眞摯らしく見えるのである。しかもフランチェスコ派の理想は、――人が物質的事物に對するすべての隷屬から、一身を自由にすることによつて到達するところの、愛の生活に關する――彼に優つて惡しき仇敵を、殆んど有たなかつたのであつた。

一二二八年五月にグレゴリウス九世は、聖フランチェスコの聖列加入式の準備としてアッシジに赴いた。この都市に入るまへに、彼は道を曲げて聖ダミアノを訪れ、そしてキアーラを見た。彼は長い以前からして彼女を識り、また彼女に彼は嘆美と、父らしい愛情とに燃ゆる數々の書翰を、送つてゐたのである。

かかる時、即ち聖列加入式の前夜に（一二二八年七月十六日）、法王が彼女に勸めて、彼女の誓約に不信たらしめやうと考へたとは、如何して私達に理解ができよう。

彼は彼女に時勢が、無財産の女性をして生活し能はざらしめたことを說いて、そして幾干かの財産を彼女に提供した。キアーラがこの奇怪な提言に對し、驚愕して彼を眺めてゐたときに、彼は云つた、「汝の誓約が汝を妨げるならば、私達はそれより汝を解放するであらう」と。

「聖き父よ」と、わがフランチェスコ派の姉妹が答へた、「自分の罪より自分を解除したまへ、しかし自分は基督に従ふことから解かるることを、少しも願はない」。

高貴にして敬虔な發言、良心がその自治權を誇りがに宣言する獨立の卒直な叫び！　これらの言葉のうちに、遺憾なくわが Poverello（貧しき人）の心靈的娘が、寫し出だされてゐる。

眞に熱烈な、眞に純潔な女性達に、しばしば來る直覺の一つによつて、彼女はフランチェスコの心情の、最奥の深處にまで透徹した。そして彼の裡に燃えてゐたところの、同一な熱情をもつて、彼女自身の燃やさるるのを感じた。彼女は終局に至るまで、彼に忠實なるものとして遺存した。しかしそれが困難なしにではなかつたことを、わたし達は認めるのである。

グレゴリウス九世が、宗教的團體の財產を所有せんことを望んだのは、正當であつたか否やを、訊ねる場合でこれはない。彼はこの問題に對する彼自身の見解にむかつて、正當な理由をもつてゐた。しかし他のことは云はぬとして、彼がフランチェスコを、聖徒達の群に置いたその瞬間に、彼の最も愛した理想を裏切り、且つ依然として忠實であつた人々をして、裏切らしめるやうに努めたのを見るときに、其處に忌まはしき或るものがあるのである。

キアーラとフランチェスコとは、彼等が聽て出遇ふべきこの困難を、先見したであらうか。然りと私達は想像し得られる。蓋し既にインノケント三世の法王在位時代に、彼女は清貧の特典の許可を

得てゐた。法王は斯くのごとき請願に對して非常に愕き、該特許狀の冒頭の數行を、かれ自らの手にて書かんことを欲したほどであつて、かかることは羅馬の法王廳において、嘗て顧ひ出られたことがなかつたのである。

彼の後繼者オノリウス三世の治下において、法王廳の最も重要な人物は、この僧正ウゴリニその人であつた。一二一六年に約七十歳になつてゐた彼は、彼の人相により、一見直ちに畏懼を生ぜしめるのであつた。彼は吝嗇な壽命を生き延びた老人に特有な美をもつてゐた。敬虔で、利發で、精力的な彼は、みづから偉大なる事業を爲すべきことを感じた。彼のうちには僧正ラヴィジェリエ（Lavigerie）、または僧と云ふよりも赤衣を纏へる軍人、もしくは壓制者とも稱すべき、すべての主教者達を想起せしめる或るものがあつた。

フランチェスコ派運動は種々なる方面において、猛烈に攻擊されてあつた。彼はそれを防禦しようと試みた。そしてこの教團の保護者たる職務が、公然彼に委ねらるるに至つた以前甚だ長く、彼は貪婪なほどな熱心をもつて、既にすでにこの任務を果たしてゐたのであつた。彼はフランチェスコとキアーラとに對して無限の嘆美を感じ、しばしば切實な方法においてそれを表白した。もし彼が一私人としてゞあつたならば、彼は彼等を愛し、彼等に從つたであらう。恐らく彼は斯くなさうとさへ考へたであらう。しかし吁、彼は教會の王であつた。彼が聖ペテロの船を導くべく召さるる場合に、

いかに行動すべきかについて彼は考へざるを得なかつた。

この考へに從ふて彼は行動した。それは彼の心中における畫策であつたのか、それとも單に目的の到達に沒頭して、方法手段を顧みざる人の、一種の良心狀態であつたのか、自分は知らない。しかしインノケント三世の死するや直ちに、キアーラ派を保護するといふ口實のもとに、彼が彼等に一の「規範」をあたへ、そして聖フランチェスコの理想に代へるに、彼自身のそれをもつてしたのを、わたし達は見る。法王の使節として彼が一二一九年七月二十七日に、モンティチェルリ（Monticelli）のためにあたへた特典のうちに、キアーラとフランチェスコの何れもの名が擧げられてない。そしてダミアノ派は、ベネデット派の修道會（コングレガツイオーネ）のやうになつてゐる。

その不在中にこの特典を受領した「貧しき貴女達の奉仕者」の一人である、兄弟フィリッポに對するフランチェスコの忿怒については、後更にわたし達は見るであらう。彼の態度は極めて堅固であつて、時を同じうしてウゴリニから授與されたところの同一性質の他の數々の書類が、三年後に至るまで法王によつて、署名せられなかつたほどであつた。

フランチェスコ派の觀念によりて、到る處に振起せしめられた熱心を、利用しようとのこの僧正（カルヂナレ）の熱望は、極めて大なるものであつて、一二二一年の彼の使節記錄中に、聖ダミアノの「姉妹達」のそれのごとき、僧庵を建設しようと欲する人々のために、細かく準備せられた一種の規約をわたし達が

發見するほどであつた。しかしその中にさへフランチェスコやキアーラの姓名を、探がしても徒勞である。

この老人は、然しながら、わが若き尼僧院長に對して、實に神祕的な愛情を有してゐた。彼は愛と、尊敬と、嘆美との言語を聯らねて、彼女から遠く距たるの、止むなきを嘆く手紙を彼女に書いた。ウゴリニの裡に少なくとも、二個（ふたり）の人があつた——キアーラとフランチェスコとのまへに自ら跪伏したと感じた基督教徒と、主教、すなはち教會の榮光が、時として神の榮光を忘れさした人と。

彼に對してフランチェスコは、殆んど常に抵抗しつつではあつたが、終はりまで心からの感謝の念を、持續してゐたやうに見える。これと反對にキアーラは、彼女のこの保護者の態度に關して、些少の幻惑をだに抱き得べく、餘りに長き抗爭を爲した。一二三〇年以後彼等のあひだには、何等の關係の痕跡がないのである。

キアーラの清貧に對する誓約の强固さを緩和しようとの法王のすべての努力は依然として徒勞であつた。多くの他の尼僧達は、聖フランチェスコの「規範」を嚴格に實行せんことを願望した。彼等のうちにはボヘミア王オットカル（Ottokal）一世の娘もあつて、彼女はキアーラと、不斷の關係を持續してゐたのであつた。しかしグレゴリウス九世は、彼女自身が申し開いたときにも、頑として動かなかつた。彼女に對して讃語を降り注ぎながら、彼が彼女に交付したその「規範」——即　彼

がまだ僧正(カルディナレ)であつた時に作成したもの――に從ふべきことを命ずるのであつた。わが Peverello(ペヤレロ)(貧しき人)の「規範」は異端といふほどでないにしても、夢想郷(ユトーピア)の一種と見做された。しかし彼は決して聖キアーラを、全然屈服せしめることができなかつた。一日キアーラは、實際彼の命令に反抗した。そして讓歩すべく餘儀なくされたのは、法王であつた。彼は嘗て果たされたものよりも、一層廣い離隔を、托鉢僧達と「姉妹達」との間に、造らんことを願望した。蓋しフランチェスコの死後長く、ある親密が聖ダミアノとボルティウンクラとの間に、繼續してゐたのであつた。キアーラは特にこの隣接關係を愛して、しばしば「兄弟」が交々來たつて說敎することを乞ふた。法王はこれを惡(わる)いことと考へて、嚴しい刑罰のもとに、ボルティウンクラの托鉢僧が誰にても、法王廳の公然な許可なしに、聖ダミアノに赴くことを禁じた。

この時にキアーラは憤激した。彼女は彼女の修道院付の、數人の托鉢僧の處に行き、彼等の勞役に對して感謝を述べて、そして云つた「去れ、何故なれば彼等は、私達に心靈の糧をあたへる人々を奪ひ去つたがゆゑに、わたし達は私達のために物質上の糧を獲得する人々を、もたぬであらう」と。「王侯達の頸が僧等の足下に俯伏した」と記した彼が、この女性の前に俯伏して、彼の禁止命令を解かざるを得なかつたのである。

フランチェスコを忘れて普通の僧庵となるには、餘りに繁く聖ダミアノに、彼の愛と自由との聖歌

が反響されてあつた。キアーラは依然として、わが師の初代の伴侶者達に取り圍まれてあつた。エヂデオ、レオ、アンヂェロ、ヂネブロは、勤勉な訪問者たることをやめなかつた。これら清貧の眞(しん)の愛人達は、其處(そこ)をおのが家庭のごとくに感じ、そして他の處にあつては必ずや驚かるるに相違ないほど、自由に擧動(ふるま)つたのであつた。一日英吉利の托鉢僧であつて有名な神學者が、敎職の命令に從ひ、聖ダミアノにおいて說敎するために來た。突然一平信徒に過ぎなかつたエヂディオが、彼を遮つて、「止(と)まれ兄弟、自分をして語らしめよ」と云つた。するとこの神學の敎師は、彼の首(かうべ)を垂れ、服從の表號として僧帽で身を蔽ひ、そしてエヂディオに聽くべく跪坐(ひざまづ)くのであつた。

キアーラはこの一事を見て、大(だい)なる喜悅を感じた。更に一度聖フランチェスコの時代に生(い)き歸つたかのやうに、彼女に思はれたのである。この些(さや)かなる一團は、彼女の死に至るまで持續せられた。彼女は兄弟達レオ、アンヂェロ、そしてヂネブロの腕に抱かれて、息氣絕えたのであつた。彼女の最後の苦痛と、彼女の臨終の幻影(ゆめ)のうちにあつて、彼女と同じい理想のために、生涯を獻げた人々に取り圍まれると云ふ、至高の幸福を獲たのであつた。

彼女の遺言のうちに、既にわたし達が見來たつた彼女の生涯が示されてある――フランチェスコ派想念の擁護に對する日每の抗爭。通常僧庵の花のごとくに脆く、痩せて、蒼白なものとして表されるこの女性が、いかに勇敢で大膽であつたかを私達は見る。

彼女はフランチェスコ派をたゞに他の人々に對してのみならず、フランチェスコその人に對しても擁護したのであつた。極めてしばしば、また極めて深く、いとも高貴なる靈魂を困惑せしめて、最も崇高なる努力を實らざらしめる暗憺たる失意の時々に、彼女は彼の傍にあつて、彼の行くべき道を示した。彼が彼の使命を疑ひ、そして休息と孤獨の祈禱との高處に、逃れんことを考へたときに、蒐むべき刈手なき饒れる收獲、導く牧羊者なしに迷ひゆく人々を彼に示し、そして彼を再びわがガリラヤ人の群に引き寄せ、多くの人々の贖ひとして、その生命をあたへたまふた人々の數のうちに、入れたのは彼女であつた。[10]

しかも聖デミアノにおいて、フランチェスコがみづから取り圍まるるのを感じたこの愛が、時々彼を愕かしもした。彼は彼の死が、餘りに大なる空虛ともなつて、僧院そのものを危殆に瀕せしめるであらうことを恐れた。そして妹姉達のことを想ひ、彼が彼女達と永久に共なり得ざることを苦痛に感じた。一日彼等に說敎しようとして彼は、講壇に入る代りに幾干かの灰を持ち來たらしめ、そしてそれを身の周圍に蒔き、頭に散して、「ミゼレレ」(Miserere) を吟誦した。斯くして彼の塵に過ぎず、然も速かに塵に歸することを彼等に想起せしめたのであつた。

しかし一般的にいへば聖フランチェスコが、自己の有りのままであつたのは、聖ダミアノにおいてゞあつた。彼の最も美しい作品、すなはちエルネスト・ルナン (Ernest Renan) が近代宗敎的情感の

最も完全なる發言なりと稱した、「太陽の頌歌」を作つたのは、彼に侍くキアーラを伴ひ、その橄欖樹の下蔭においてゞあつたのである。

---

1 チェラノのトムマソは、フランチェスコが自己の意志の薄弱なのを知り、情慾に負けんことを恐れて眼を垂れてゐたときへ女性との間の關係の、如何に自由なものであつたかを示してゐる。ベルナル・ド・ベッス (Bernard de Besse) は、聖フランチェスコの臨終を見に、Jacqueline がポルティウンクラに赴いたことを述べてゐる。またキアーラはポルティウンクラで食事をしてゐるのである。「小さき花」第十五章。

2 イザヤ書第六十三章八、九節。聖木曜日の彌撒において、書翰(epistola)としてはイザヤ書の第六十三章が、福音書(evangelo)としては、マルコ傳第十四章が、朗讀されてある。

3 パスティア (Bastia) に近く、キアスコ (Chiasco) の上にある「サン・パオロ」(San Paolo).

4 現今のアッシジの敎區的僧寮 "Seminarium seraphicum".

5 第五章「使徒職の第一年」の註5を見よ。

6 書翰のうちに聖キアーラは彼女の敎團を、「兄弟達」のそれの一部分に過ぎないものとして、語つてゐる。

7 「小さき花」第十三章にある、愛すべき物語を見よ。

8 「小さき花」第三十三章。

9 聖ダミアノの規範を裁可する法王令は、一二五三年の八月九日に發せられた。キアーラはその二日後に死んだのであつた。

10 「小さき花」第十六章。

第十章

一二一二年の秋――一二一五年の夏

初代の「小さき兄弟達」は、フランチェスコの激勵を受け、彼の模範に接することを大いに要し、確實にポルティウンクラにおいて、彼に遇ひ得る或る一定の時期を夙くから定めざるを得なかつた。しかし此等の會合は一二一六年頃までは、まだ眞の僧大會にはなつてゐなかつたやうである。最初は年に二回、すなはち一回は聖靈降臨日、他の一回はミカエル節（九月二十九日）であつた。中聖靈降臨日の會合は最も重要であつたので、すべての兄弟達は參集しきたり、フランチェスコに接することによつて新しき力を受け、またその奬勵と指導とにより、彼から裕かな熱誠と壯大なる希望とを汲み取るのであつた。

この若い仲間の面々は、すべてのものを共通にしてゐたのである、彼等の喜悅をも、またその悲哀をも。彼等の不安をも、また彼等の成功をも。これらの會合において、彼等の專ら努めたことは「規範」のことで、必要なる變更をそれに加へること、就中かれらが益それを善く遵守することについてであつた。かくて全く一致和合して、托鉢僧達の各地方への割り當を定めるのであつた。

フランチェスコの反復した勸告の一つは、僧侶に對する正當な尊敬といふことであつた。彼は彼の弟子達に、司祭達に對して　格別な敬意を表し、その手を接吻することなしに、決して彼等に面接しないやうに懇請した。すべてのものを棄てたといふので兄弟達が、地上の富者と權力者とに對して、非道であり、酷烈となる危險のあることを、善く善く承知してゐた。それゆゑに彼はこの傾向に對して、彼等を防禦しようと欲し、しばしば彼の勸告を結ぶに、これらの崇高な言葉をもつてするのであつた。曰く「今日わたし達に惡魔の肢體であるかのやうに見える人が、他日基督の肢體となるであらう」と。

彼は更に云つた、「世界の眞中における私達の生涯は、わたし達を見、わたし達に聽くとき、すべての人々が私達の天に在す父を、讃美せざるを得なく感ずるやうなものでなくてはならぬ。汝等は平安を宣傳する。先づそれを汝の心情に有て。いかなる場合においても、人を怒り罵ることなく、却つて汝の柔和により、すべての人々を、平安と、和合と、そして善き業とに導けよ」と。

フランチェスコが最も成功してあつたのは、彼が特に彼の弟子達を鼓舞し、誘惑に對して堅固にし、そしてその力から彼等を救ふ場合であつた。靈魂がいかに焦慮つてゐても、彼の言葉はそれを靜寧に立ち歸らしめた。悲哀を鎭めるときに彼が現した熱誠は、墮落する人々を譴責するときには、火のごとくになり、怕ろしくなつたが、初期時代においては、峻嚴を現すべき機會を殆んどもたなか

つた。却つて熱心の餘り、懺悔と苦行とを誇大した兄弟達を、靜かに譴責する必要があつたくらゐである。

すべてのことが終はり、愛の宴會に各があづかつたとき、フランチェスコは彼等を祝福し、彼等は異鄕の人、また旅人として、四方へ散つて行くのであつた。彼等は何ものをももつてゐなかつたが、しかし彼等は既にすでに壯大な終局の、再生の徵を見たと考へた。パトゥモス（Patmos）の流竄者のごとく、彼等は「われまた聖なる都、新しきエルサレム、夫のために飾りたる新婦のごとく準備して神のもとをいで天よりくだるを見たり――而して萬國民の俟ち望めるもの、すなはち新しき時代のメシア、萬物を新たにするものの、寶座にある」のを見たのであつた。[1]

しかしすべての眼はシリアの方へ向けられてあつた。其處にては佛蘭西の勳爵士ジュアン・ドゥ・ブリアンヌ（Jean de Brienne）が、恰度エルサレムの王と宣言され（一二一〇年）、また小兒十字軍の一隊が、其處へ馳せ向かつてゐた。

フランチェスコの回心は根本的であつて、彼の思想と意志とに、新しい方向をあたへたとはいへ、彼の性格の基礎を變へる力をもつてゐなかつた。「偉大なる心情においては、何ごとも偉大である」。回心において「人」は變化しない――彼は依然たるものである。變化すると云ふのは、「人」が回心したと云ふのではなくて、その人の環境である。彼は忽然として新しい徑へ入れられたのである。

が、しかし彼は同じ熱心をもつてそれを馳るのである。フランチェスコは依然としてひとりの勳爵士であつて、そして彼が中世時代の優秀な靈魂の崇拜を、かく高き度合において贏えたのは、恐らくこの點であつたのであらう。多くの暗黑な方面があるにも關らず、彼の世紀の歷史をして、斯くも壯大ならしめ、また引力あらしめる原因であるところの、かの「未知」に對する憧憬、冒險と犧牲とに對する渴望が、彼のうちにあつた。

宗敎に對して天才を有する人々は、一般に幻惑といふ特權を有してゐる。彼等は殆んど如何に世界が大いなるものであるかを決して見なかつた。彼等の信仰が山を動かしたとき、彼等は古代ヘブルの豫言者達のごとくに、歡喜に顫動した。そして「狼と羔とともに食して主の榮光の顯はるる」その日の曉をを見るやうに感じた。强き葡萄酒のごとくに血を燃やし、かくて義の兵卒達をして、極めて怕しい城砦に殺到し、これを占領せんか、戰ひは終はるであらうと信ぜしめるところの、祝福されし幻惑よ。

フランチェスコは斯くのごとき喜悅を、おのれと淸貧との結合のうちに發見してゐたので、萬人はたゞこの幸福に憧れる人たるべきであること、また全く單純に敎へるならば、サラセン人が群をなして、イエスの福音に回心することを、確實なものとして彼は考へた。それ故に彼はこの新しい十字軍のために、ポルティウンクラを去つたのである。何處から彼が乘船したかは不明であるが、時日

は多分一二一二年の秋であつたであらう。暴風雨が船をスラヴォニア（Slavonia）の海岸に押し上げたので、彼は數箇月間その邊に滯在するか、或ひは伊太利亞に歸るかの、餘儀なきに至つた。彼は歸らうと決心した。しかしアンコナへ向け出帆しようとしてゐた一隻の船まで赴くことが、甚だ困難であるのを見た。然しながら彼は水夫達に對して怒ることもせず、却つて食糧の貯藏の缺乏したのを見て、彼の友人達が彼にあたへた夥しい食糧品を、彼等に分けて遣るのであつた。

上陸するや否や彼は、傳道旅行に出立したが、過去におけるよりも一層熱心なる彼の奬勵に、多くの靈魂は反響した。一二一二年から、一二一三年に亘る冬のうちに、彼がスラヴォニアに歸り、續く春を中央伊太利亞の傳道に用ゐたことを、わたし達は想像し得る。彼がトゥラジメノ（Trasimeno）湖の一島に退隱し、後に彼の傳說中に有名になつた滯在をなしたのは、おそらくこの大齋中であつたであらう。[2] それは兎に角として、充分に信憑すべき一文書は、一二一三年の五月、彼がロマニア（Romagna）にゐたことを示す。一日フランチェスコと彼の伴侶者、多分兄弟レオとが、マチェラタ（Macerata）とサン・マリノ（San Marino）とのあひだなるモンテフェルトゥロ（Montefeltro）の城塞に到着した。[3] 折しも一人の新しい勳爵士の歡迎のために、盛なる祝筵が催されてゐたが、噪音も歌謠も彼等を恐れしむるに足らずして、何の躊躇もなく、その土地のすべての貴族が集合してゐた宮廷へ入つた。それからフランチェスコは本文として

Tanto è il bene ch'aspetto
Ch'ogni pena m'è diletto,

わが俟ち望める善は大いなるがゆゑに
すべての苦痛もわれには喜悅となるなり。[4]

と云ふ二行を採り、惻々人の心に迫る說敎をしたので、出席者の數人は暫し、彼等の參會の目的たる比武のことを、忘れてしまふのであつた。彼等のうちの一人、カゼンティノ（Casentino）におけるキウジ（Chiusi）の伯爵であつた、オーランド・ディ・カッタニ（Orlando di Cattani）は甚く感動し、て、フランチェスコの傍に寄つて來て云つた、「父よ、わが靈魂の救濟について、汝と語らうことを大いに願ふ」と。フランチェスコは答へた、「甚だ善し、しかし今朝は行つて汝を招待した友人達に敬意を表し、彼等と食を共にし、斯くしてのち汝の好むままに、大いに語らうであらう」と。

その如くに偽された。伯爵は歸つて來たり、會見を終はらうとして云つた、「自分はトスカナに、格別瞑想に適する一つの山をもつてゐる。それは全く離隔せられてあつて、世の喧噪から遠ざかり、懺悔をなさうとする人には、如何にも好都合であるであらう。汝もし善しとせば、わが靈魂の救濟

のために、それを汝と汝の兄弟達とのために、喜んで捧げんことを望む」と。

フランチェスコは喜んでそれを受け納れたが、しかし聖靈降臨日の僧大會(カピトゥルム)のため、ボルティウンクラに赴かねばならなかつたので、ヴェルナ山の訪問は、更に好都合な時期まで延ばすことにした。

彼がイモラ(Imora)に行つたのは、恐らくこの巡回においてゞあつたであらう。少くとも斯く想像するのを禁ずる何ものも其處(そこ)にない。常に慇懃であつた彼は、到着するや否や直ちに、自ら監督の許へ赴いて、傳道の許可を彼に乞ふた。「自分は自分の仕事に對して、誰の助けをも必要としない」と、監督は冷淡に答へた。フランチェスコは常よりも禮儀を一層正しく、また柔和にし、首を垂れて退いた。しかし一時間と經(た)たぬうちに彼は歸つて來た。「兄弟よ、如何(どう)したのか、まだ自分から何を望むのか」。「Monsignori(モンシニオーリ)(わが主よ)、父が息子を追ひ出すときに、息子は窓から歸つて來る」と、フランチェスコは答へた。

監督もこの敬虔な固執には叶はずして、願ふままに許可をあたへるのであつた。

當時フランチェスコの目的は、然しながら、伊太利亞傳道といふことではなかつた。彼の托鉢僧達は既に隨分多く伊太利亞に汎く散在してあつた。彼は寧ろ彼等をして新しい國々へ、向けようと欲してゐた。

シリアにおける不信仰者に達し得なかつたので彼は、モロッコに不信者を索めようと決心した。

暫く前(一二一二年の七月)に、アルモアド(Almohades)の軍勢がトロザ(Tolosa)の平野において回復すべからざる敗北に遭遇した。アラゴネ(Aragone)、ナヴァラ(Navarra)およびカスティリヤ(Castiglia)の王達の聯合のために擊たれて、モハメッド・エル・ナゼル(Mohammed-el-Nasor)はモロッコに歸つて死んでしまつた。福音的精神の平和の勝利が、その後に繼がれないならば、軍勢のこの勝利も空なものであると、フランチェスコは感じた。

彼の心はこの企圖に充ち滿ちてゐたので、彼の旅行の目的地に早く到着しようと急ぎ、しばしば彼は彼の伴侶者を忘れて、遠く置き去りにするのであつた。傳記者達は不幸にして、この遠征については極めて簡潔であつて、たゞ西班牙に到着するや彼が、非常な病氣に罹つて、如何(どう)しても歸國せねばならなかつたといふことだけを語つてゐる。地方的な、しかも餘り確實でない若干の傳說以外には、この國におけるわが聖徒の活動についても、また彼が往來した道程についても、わたし達は何の記錄をもつてゐない。

この沈默は少しも驚くに足らないものであり、また私達をしてこの異邦傳道の價値を、輕んぜさすべきものでもない。數年後敎團が餘程發展してあつたとき、托鉢僧の纒(まとま)つた一隊を率ゐて企てられた埃及への傳道のことが、チェラノのトゥマゾにより、僅か數行しか記されてゐないのであるが、しかし近頃發見された兄弟ヂォルダノ・ディ・ヂアノ(Giordano di Giano)の年代記と、ジャック・ドゥ・

ヴィトリ（Jacques de Vitry）が傳へる、豐饒な詳細とからして私達は、またこの旅行について憶測を加へてもいいであらう。いま擧げた西班牙の傳說も、ラングドック（Languedoc）やピエモンテ（Piedmont）への聖フランチェスコの旅行に比して、全然根據なきものとしてはならぬ。が、しかし資料の現在狀態にては、權威をもつてその歷史的事實と、全然價値なき附加物とのあひだに、區別を置くことが不可能である。

西班牙への異邦傳道は疑ひもなく、一二一四年の聖靈降臨日と、一二一五年のそれとのあひだに起こつた。フランチェスコはその前年を、伊太利亞に過ごしたと自分は考へる。多分彼はそのとき、ヴェルナを見に行かうとしたであらう。アンコナの疆域とリエティの谷とは、この頃等しく自然に彼を惹き付けたであらう。そして最後に、敎團の二分派の發達が、彼のポルティウンクラおよび聖ダミアノに在ることを、必要としたに相違ない。これら異邦傳道の盛なる成功は、決して驚くに當たらず、また仰々しい批評的疑惑を惹起するものでもない。兄弟團の一員たるには、たゞ數時間を要すれば足るのであつて、また私達はこれらの活動の誠實如何を、疑ふにおよばないのである。何故といふに、その條件と稱せらるるのは、貧民のために、いかなる種類の財產をも、悉く直ちに放棄することであつたからである。新しい托鉢僧達はまた直ちに、他のものを受け入れるといふ有樣であつて、往々にして會（たまゝ）その赴いた處で、運動の首領となるやうなこともあつた。一二二一年獨逸

において、また一二二四年英吉利において見られるところの、その發展して行つた有樣は、この心靈的播種に對する、極めて潑溂たる繪畫を供するのである。

一修道院を建設せんがためには、二、三の兄弟が善しと思ふところに、一種の隱家を造くればそれで充分であつた、其處から彼等は、都市と附近の田舍へと出掛けて行つた。それゆゑに聖フランチェスコがその生涯を、僧院建設に過ごしたものとして描くのは、彼をして一百の修道院の創造者とする地方的傳說を全然否定するのと同樣に、一の誇張といはねばならぬ。多くの場合において、古い時代からのこの主張が、果たして正當なりや否やを示すには、たゞ一瞥で充分である。一體一二二〇年以前においては、敎團はヴェルナやカルチェリの雛型に則れる、たゞ暫時を隱退のうちに過ごさんと欲した兄弟達のために圖られた僧院をもつてゐたのみであつた。

アッシジに歸るやフランチェスコは、學識ある人々の幾人かを敎團に入れた。そのうちには多分チェラノのトゥマゾもゐたであらう。トゥマゾ自身が、實際、神がそのとき慈悲深く彼を記憶したまふたといつて、更に續けた、「祝福されしフランチェスコは極めて高潔な心情を有する、甚だ賢明な人物である。絕大な注意をもつて各に、その適する仕事をあたへ、そして常に彼等の有する身分の相違を考量に加へた」と。

これは私達が描寫し來たつたフランチェスコの性格とは、いかにも善く調和してゐない。かれが彼

の教團のうちに、當時異なれる社會的階級の間に存在してゐたやうな區別を、保持してゐたとは、何人も想像することができないが、しかし彼は眞實で變らない慇懃を備へてゐて、それは彼の心情に根を有し、またそれは鍛錬と愛との一表現に過ぎなかつたのであらう。慇懃を神の性質の一つであると觀じてゐた人にとつては、然あらざるを得なかつたのである。

彼の生涯中の、最も朦朧たる時期の一つへ、わたし達に接近せんとする。一二一五年の僧會(カピトゥルム)後かれは、この世界において理想を實現せんことを望む人々に、極めてしばしば來たるところの、沮喪の危機の一つを通過したやうた見える。彼の團體のうへに來たらんとしてゐた不運た對する警告的徵候を彼は發見したのであらうか。人生の必至が彼の幻を暗くし、阻碍しようとするのを見るに至つたのであらうか。シリアおよびモロッコにおける彼の異邦傳道の阻止が、彼の方法を變更すべき攝理の指示であると觀じたのであつたか。わたし達は知らない。しかしこの頃彼は彼を襲ふて疑惑し、遲疑せしめた問題について相談すべく、聖(サンタ)キアーラと兄弟シルヱストゥロとを訪れる必要をみづから感じた。彼等の答は彼に平安と喜悅とを回復した。神は彼等の口によつて、彼の使徒職を繼續すべきことを命じたまふた。[5]

直ちに彼は起き上がり、未だ嘗て表したことのない熱烈をもつて、ペヴァニア(Povagna)の方向へ出立した。彼を鼓舞し堅忍たらしむるためにキアーラは、或る方面において彼に新しい情熱を接

種したとも云へる。彼女の一言は彼の勇氣を、悉く呼び返すに充分であつた。そして彼の生涯のこの瞬間からは、前よりも一層多くの詩と、愛とを、わたし達は彼のうちに發見するのである。

喜悅に充ちて途を辿つてゐたときに、鳥の一群を見つけた彼は、少しも道路を離れてその側へ行つた。飛び去るどころではなく、彼等はあだかも歡迎の挨拶をするかのやうに、彼の周圍に群がるのであつた。そこで彼は彼等に云つた、「兄弟なる鳥どもよ、汝等は汝等の創造者を大いに讃美し、また愛すべきである。彼は汝等に着るために羽毛を、飛ぶために翼を、そしてすべて汝等に必要なるものをあたへたまふた。彼はすべての被造物中、汝等を最も高尚なものに造りたまふた。彼は汝等が新鮮な空中に住むのを許したまふ。汝等は播くこともせず、刈ることもしない。しかし彼は汝等を注意し、汝等を護つて導く」と。すると鳥はその頸を弓狀にし、翼を擴げ、嘴を開け、あだかも彼に感謝するかのやうに、彼を眺めるのであつた。フランチェスコは彼の下衣の端で彼等を撫でつつ、その間を行きつ戻りつしてゐたが、遂に祝福をあたへて翔り去らした。[6]

アルヴァノ(Alviano)[8]を通過して行つたこの傳道旅行中、彼は人民に若干の奬勵をあたへたのであつた。が、燕が、その囀る聲で空中を充たしたので、彼の語ることを人に聞かすことができなかつた。かれは彼等に云つた、「もう自分の語る番である、小さい姉妹なる燕達よ、神の言葉に耳を聳てよ。沈默せよ。そして自分が語り終はるまでは、極めて靜肅にせよ」と。

いかにフランチェスコの愛が萬物に擴がつてゐたか、また如何に萬象のうへに汎く注がれてあつた生命が、彼を靈感し感動せしめたかを私達は見る。太陽から、わたし達が脚下に踏み躙る蚯蚓に至るまで、萬物が活きて患み、而して死に、且つ彼等の死におけるがごとく、その生において、神の聖業の一部分となつてゐる生物の、抹殺すべからざる嗟嘆を、彼の耳に吹き込むのであつた。

「汝のもろ〳〵の被造物のゆゑに、わが主を讃美せよ。特に兄弟太陽のきみゆゑに、然すべし。彼日を來たらし、また光を齎らす。且つ彼は大いなる輝きもて佳はしく照り映ゆ。いと高きものよ、彼は汝の御姿を宿せり」。

こゝに再びフランチェスコは、ヘブルの靈感、イスラエルの豫言者達の、單純にして壯大なる思想を復活せしめる。王なる詩篇の作者は歌つた、「主をほめたゝへよ、火よ、霰よ、雪よ、霧よ、みことばにしたがふ狂風よ、もろ〳〵の山、もろ〳〵のをか、實をむすぶ樹、すべての香柏よ、獸、もろ〳〵の牲畜、はふもの、翼ある鳥よ、地の王たち、もろ〳〵のたみ、地の諸侯よ、地のもろ〳〵の審士よ、少きをのこ、若きをみな、老いたる人、をさなきものよ、主をほめよ、汝等すべて主をほめたゝふべし」と(詩篇一四八の一――一二)。

ペヴァニアの鳥の一日は、彼の全生涯中の最も美しい記憶の一つとして永く殘り、通例探へ目であつた彼が、これだけは常に語ることを好んでゐた。そのゆゑは彼をしてすべての生物とも秘密な、

甘美な交通に入らしむるに至つたこの純なる熱誠を、キアーラに負ふてゐたからであつた。彼を悲哀と疑惑とから復活せしめたのは、彼女であつた。彼が丁度要したときに、いかに善く彼に應じて、愛に愛を、靈感に靈感を、通ずべきかを知つてゐた彼女に對する、甚深な感謝を彼の心情のうちに湛へてゐたのであつた。

ここにその燦爛として輝き出でたのを私達が見たところの、動物に對するフランチェスコのこの同情は、決してかの人爲的で、また他のすべての愛情を拒否し、そして當時の或る一團の人々が騷しくも示してゐた感傷的なものではなかつた。彼にあつては、それは實に自然に對する彼の感情の發露であつた。深い神秘的な、謂はゞ汎神的情緒ともいふべきものであつた(もしこの言葉にして、フランチェスコ派思想の正反對であつたところの、嚴密な哲學的意義を有しないものとすれば)。

十三世紀の詩人達においては、しばしば虛僞であり、假裝せられてあるこの情緒が、彼にあつては只々に眞實であるのみならず、そのうちに一種潑溂として、康かな頑健なものがあつたのである。伊太利亞を自覺に醒めさせ、彼女をして數年間に、清淨派の觀念の惡夢を忘却せしめ、悲觀から救つたのは詩のこの血脈である。それによつてフランチェスコは、かの文藝復興に先き立つ藝術的運動の先驅者となり、ラファエルロ前派一群の靈感者となつたのである。當時これらの人々はその描寫において、鈍拙であり、怪奇であつたが、今日わたし達は一種敬虔の念をもつて彼等を回顧し、

かれらの優美ならざる聖徒達のうちに、到底わたし達のところにおいて索め得ざるところの、精神的感情、内的生命を見出だすのである。

アッシジのわが Poverello（貧しき人）の聲が、何ゆゑに善く理解せられたかといふに、それは他のすべての場合におけると同様、この點において、彼が全然傳習的でなかつたからであつた。動物の牝すら僧院に入るのを禁じた修道僧達の、激しいパリサイ的な信仰から私達は、彼とともに如何に遠ざかつてゐるかよ。貞潔に對する彼の觀念は、決して斯かる極端な細心には似通つてゐない。ある日シェナにおいて彼は、若干の斑鳩を求め、彼の下衣の裾に入れて云つた、「小きい姉妹なる斑鳩よ、汝等は單純で、無垢で、純潔である。どうして汝等は捕へられたのか。自分は汝等を死から救ひ、汝等のために巣を造り、そしてわたし達の創造者の命令に從ふて、汝等が子を生み、繁殖るやうにするであらう」と。

かくて彼は行つて、彼等すべてのものゝために巣を造つたが、兄弟達の眼前において斑鳩は卵を抱き始め、雛を孵すのであつた。[9]

リエティにおいては知更鳥の一團が、修道院の珍客であつて、若い鳥等は兄弟達が食事をしてゐたその食卓のうへに掠奪的遠征を試みたのであつた。其處から程遠からざるグレッチオにおいて、生きたまゝ罠に捕へられた一疋の小兎を、彼等はフランチェスコのもとに持つて來た。「自分のところに

來たれ、兄弟小兎よ」と、彼はそれに云つた。それからこの憐なる動物は放たれたが、彼を隱家として逃げて來たので、彼はそれを採りあげて抱き、そして終に逃げ去るやうにとて地上に置いた。しかしそれは幾度も彼のところに歸つて來たので、自由な身に立ち歸らさすために、餘儀なく彼はそれを附近の林まで、遣らねばならかつた。

一日彼はリエティの湖を横切りつゝあつた。彼が乘つてゐた舟の舟子が、並はづれて大きい鯉を一疋彼にあたへた。フランチェスコはそれを喜んで受けたが、この漁夫の非常に驚いたことには、それに神を稱へることを命じて、水中へ歸らしてしまつたのである。

かゝる種類のすべての出來事を叙べ盡すことは、到底わたし達にはできないであらう。[10] 蓋し自然に對する情緒は、彼の生得であつたからである。それは彼をして全被造物を愛せしめたところの、不斷の交通であつた。かれは大いなる森林の魔力に漂らされてあつた。荒寥たる禮拜堂のうちにたゞ獨り祈るときに、彼は小兒のごとき恐怖を感じたが、しかし花の香をたゞ吸ひ込むだけで、或ひは小川の澄んだ水を眺めるだけで、云ふべからざる喜悅を味ふのであつた。

清貧のこの完全な愛人は、たゞ一つの贅澤を許した——ポルティウンクラにおいては、それを命ずることをさへした——すなはち花のそれであつた。わが「兄弟達」は野菜やその他實用的な植物のみを播かないやうに命ぜられてあつた。彼等は善き地面の一隅を、わたし達の姉姉なる野の花のた

めに、備へて置かねばならなかつた。フランチェスコはまた彼等と語らつた。いな寧ろ彼は彼等に答へたのであつた。蓋し彼等の神秘な柔和な言語が、彼の心情の深處に、忍び入つたからである。

十三世紀はわがウムブリアの詩人の聲を、理解すべく準備せられてあつた。鳥に對する説教は、ビザンティウム藝術の終局となり、またその思想の形像でもあつた。それは獨斷主義（ドグマティズム）と教權との終局であり、個人主義と靈感との出現である。疑ひもなく極めて不安であり、また頑固なる反動に連續せらるべきではあつたが、しかも人間良心の歴史に、一時期を劃したのであつた。フランチェスコの伴侶者の大部分は、かくも單純で深奥な情緒を善く理解するには、餘りに多く當代の子であり、餘りに深くその時代の神學的乃至形而上學的法式に浸潤してあつた。しかも各はみづからの度合に應じて、その魔力（チャーム）を感じた。こゝにチェラノのトゥマゾの言葉は、彼の著述の他の如何なる部分においても發見し得ざるほど高揚し、人をして雅歌を聯想せしめるごとき、フランチェスコの描寫をもつて終はつてゐる。

中背以上のフランチェスコは華奢（きしゃ）で、親切な顔、黑い眼、柔和で高音な聲をもつてゐた。彼の全風采のうちには、典雅と優美とがあつて、如何にも彼を愛すべきものとした。すべてこれらの特徴は最も舊い肖像のうちに、發見せられるのである。[11]

1 ■ハネ默示錄第二十一章。

2 「小さき花」第七章。

3 現今のサッフ・フェルトゥロ（Sasso-Feltro）であつてコンカ（Conca）とマレッキオ（Marecchio）とのあひだにあり。サン・マリノから南方約二時間の歩行。

4 すべての文書はフランチェスコの使用した本文を、伊太利亞語で記すがゆゑに、彼は詩のみならず説教をも、この國語で語つたことを示す。

5 「小さき花」第十六章。

6 アッシジより南四二リーグにある村落。

7 「小さき花」第十六章。

8 オリヴキエトとナルニとの中間にあり。

9 「小さき花」第二十二章。

10 「小さき花」第十三章。

11 M. Thode は約三十の肖像の研究を爲してゐる。(一)、在世中兄弟 Eudes によつて描かれしものが現今スピアコにあり。(二)、Giunta Pisano(?)により一二四〇年に描かれたものが、ボルティウンクラにあり。(三)、Bon. Berlinghieri 筆一二三五年頃のものが、トスカナのペッシア（Pescia）にある。以上三つが重要なものである。

第十一章　衷なる人と奇蹟

聖キアーラの激勵のもとに企てられ、またベヴニアの鳥に對する説教によつて、かくも詩的に開始せられた宣教事業は、フランチェスコにとつて、連續せる凱旋であつたやうに見える。傳説が彼について着々形造られた。彼の欲すると否とに關らず、彼の足跡の下に奇蹟が發生した。自らには少しも氣づかれずに、彼が使用した事物は、驚異すべき結果を生ずるのであつた。村々から住民が列をなして彼に遇ひに來たり、そして北方人民の堅苦しく整頓した祝祭とは全く異なるところの、伊太利亞の嬉々として一般的な、騒々しく、日光を浴びた宗教的祝祭の反響を、傳記者達がわたし達に聞かして與れるのである。

アルヴィアノ(Alviano)からフランチェスコは、疑ひもなくナルニ(Narni)に赴いた。ナルニは自治的自由を獲たので、まさに人民が一の殿堂の建立に忙殺されてゐたところの、ウムブリアにおける極めて甘美な小都會の一つであつた。彼はこの町並びにその周圍の村々に對して一種特別な愛好を有つてゐたやうに見える。[1] 其處から彼はリエティの谷の中へと、進んで行つたやうに思はれるが、こゝにはグレッチオ(Greccio)、フォンテ・コロムボ(Fonte-Colombo)サン・ファビアノ(San Fabiano)、サ

ン・テレウテロ(Sant-Eleutherio)、ポッヂオ・ブスコネ(Poggio-Buscone)などが、アッシジの周圍よりも實に彼について、一層顯著な遺蹟を留めてゐる。

チェラノのトゥマゾはそれ以上の行程について、何等詳しいことを私達に告げない。しかし他方において彼は、アンコナの邊疆、殊にアスコリ(Ascoli)における、わが使徒の成功を細々と叙べてゐる。これらの地方の人民は、フランチェスコとエヂディオとが、六年前(一二〇九年)に彼等に對して傳へたところの奬勵を尚ほ記憶してゐたのであらうか。或ひは彼等は新らしい福音を理解すべく、特別に準備せられてあつたのであると私達は信ずべきであるか。それは兎に角として、他の如何なる處においても、かゝる情熱は表されなかつたのである。説教の功果は極めて顯著で、三十人の新入者が一時に、教團の衣鉢を受けたのであつた。

アンコナの邊疆は、就中フランチェスコ派の州であつたと稱すべきである。其處にはオッフィダ(Offida)、サン・セヴェリノ(San-Severino)マチェラタ(Macerata)、ファルナロ(Farnaro)、チンゴリ(Cingoli)、フェルモ(Fermo)、マッサ(Mssa)、および其他一世紀間あまりに、「清貧」がその先驅者とその殉教者達を輩出せしめた二十の僧庵がある。其處からヂオヴァンニ・デッラ・ヴェルナ(Giovanni della Verna)、ヂャコポ・ディ・マッサ(Jacopo di Massa)、コッラド・ディ・オッフィダ(Corrado di Offida)、アンヂェロ・クラレノ(Angelo Clareno)等が來たのであつた。また無名の革命家、夢想家、および

豫言者達の多數があつて、彼等は教團長なるジェジ（Jesi）のクレセンティウス（Crescentius）によつてなされたところの、一二四四年の exstirpés（絶滅）以來も、決して新しい補充をなすことを廢めず、すべての權力に對する彼等の敢然たる抵抗によつて、中世紀宗教歴史の最も美はしい一頁を充たしてゐる。

フランチェスコの靈魂を喜悅に浴せしめたこの成功は、かれの心中に傲慢の些少な萠をすら起こさしめなかつた。自己を傳ふること稀ならざりしがゆゑに、說教者は人心のうへに更に大なる力を揮ひ得なかつたのである。一日兄弟マッセオは彼の愼しさを試みようと欲した。

「何ゆゑに汝を、何ゆゑに汝を、何ゆゑに汝を」と、あだかもフランチェスコを嘲けるかのやうに、彼は幾度も〳〵も反復した。「汝は何をいつてゐるのか」と、遂にフランチェスコが叫んだ。「すべての人々が汝に從ひ、すべての人々が汝を見、汝に聽き、汝に服從せんことを欲してゐる。しかも畢竟するに汝は美はしくもなく、學問もなく、また高貴な家柄のものでもないことを、自分はいはうとしてゐるのである。さらば如何にして汝は、世界の人々が從はんと欲する人物となつたのであらうか」。

これらの言葉を聞いて祝福されしフランチェスコは、喜悅に充ちて彼の眼を天上に向け、長い間靜想に沈潛して跪坐いてゐた後、異常な熱誠に溢れて神を讃め稱へた。それからマッセオの方へ向いて、「汝は何ゆゑに人々が自分に從ふかを知らんと欲するのか。汝は知らんと欲するのか。それは「至高者」の眼がかく意志せられたからである。彼は絶えず善人と惡人とを鑑てたもられる。そして彼のいと聚き眼が罪人のうちに、更に小さき者を、また更に不充分であつて一層罪多きものを、發見せられなかつた。そこで彼は自分を撰んで、この驚くべきことを成就せしめ給ふた。これ神が爲し給ふたのである。これに優つて價値なきものを見出だされなかつたので、彼は自分を撰びたまふた。そして茲にこの世の貧き者、偉大なる者、力ある者、美はしき者、および智慧ある者を驚かさうと欲したまふたのである」と。

この答は聖フランチェスコの心情に一條の光線を投げる。彼がこの世に齎らした使命は、依然として貧者に對して傳へられた喜き音である。その目的はメシア的事業を再び取つて立つことであつた。これに對する閃光をナザレの「處女」は、愛と自由との歌なる彼女の Magnificat（「崇む」、すなはちマリアの頌歌）のうちに認めてゐる。そしてその歌の囁きのうちに新しい社會的狀態が現されてゐる。人の幸福、人心の平安、生活の喜悅、これらが決して金錢や、學問や、力などにではなく、たゞ正しい眞摯な意志にのみ存することを、彼は世界に反省せしめた。善き意志の人々に對する平安。

同胞市民の爭論に對して、彼がアッシジにおいて採つた態度を、彼は伊太利亞の他のすべての處においても、採らんことを欲したであらう。蓋し何人も彼ほどに徹底した革新を、夢想したものはなかつたのである。しかし彼が望んだ目的は、彼の後に立つた多くの革命家のそれと、同一であつたとしても、彼等の手段は全然違つたものであつた。彼の唯一の武器は愛であつた。

しかし決局の結果は彼の意志に反するものとなつた。アンコナの邊疆の illuminati（光照派や、わがプロヴァンスの Fraticelli（小兄弟派）から分離して、彼の弟子達は互に爭ひあうて、彼の思想を

誤解した。[2]

彼の事業を繼續しようとして何人かゞ立たないとは誰が知らう。腐蝕せる思索に對する熱情は、既に充分な犧牲を拂つたのではないか。奢侈が一の幻惑(デリユウジヨン)であり、また人生が一の戰鬪であるとしても、それは獰猛な獸が餌食を奪ひ爭ふ屠殺所ではなく、それは如何なる形態にみづからを現すにもせよ、神々しい眞と、美と、愛とを以つてするところの、一の搭鬪であることを認識する人々が、わたし達のうちに多くあるではないか。この盡きなんとする十九世紀がその身を蔽ふ布から起き上がり、その後繼者に對して amende honorable (公然の謝罪) をなし、信仰の雄々しい一語を、貽さないであらうとは誰が知る。

然り、救世主(シア)は來たるであらう。ヂオアッキノ・ディ・フィオレによつて布告されし、人類の歷史上に一新紀元を確立すべき人物が出現するであらう。「希望は耻辱(はぢ)を來たらせず」。わが現代のバビロンには、またわが山上の茅屋には、數多の靈魂があつて、偉大なる徹宵の聖歌(インノ) Rorate coeli desuper et nubes pluant Justum[3] (天は露を滴らし、雲よ義人を降らすべし) を神秘に囁(ささ)くがゆゑに、わたし達は神々しき誕生の前夜に、あらぬ譯には行かないである。

すべての起原は神秘なものである。それは物質について眞理であるが、他の萬象に卓紀する、すなはち私達が神聖と呼ぶ生命については、更に一層眞理である。フランチェスコがその要する靈的

勢力を獲得したのは、祈禱においてゞあつた。この故に彼は沈默と孤獨とを索めた。人々を信仰に導き得んがために、人々の眞中(たゞなか)にあつて、いかに戰ふべきかを知つてゐたとは云へ、チェラノが述べてゐるがごとく、彼の鳥のやうに翔つて、山上に巢くふために赴くことを好んだ。[4]

眞(しん)に敬虔な人々にとつては、唇の祈禱や、儀式的祈禱は、眞(まこと)の祈禱の劣等な形式といふべきものである。それが眞摯で熱心であつて、機械的反復でない場合においてすら、單なる宗教的物質主義に死せざる靈魂に對しては、一の序曲(プレルデイオ)に過ぎないのである。

愛ほど善く敬虔に似てゐるものは何もない。雛型(モデル)の愛の書翰が、情熱に燃ゆる心情を語り得ざるがごとく、祈禱の諸式は、靈魂の情感を語ることが不可能である。眞(しん)の敬虔並びに深奥な愛に對しては、形式は一種の冒瀆(プロファーノ)である。

祈ることは神と語らうことであり、わたし達自身を彼にまで高めることであり、彼がわたし達に降り來らんがために、彼と會話することである。

この意味から見れば祈禱は、すべての自由と、すべての解放との母である。

それが靈魂みづからの獨語であるにもせよ、あらざるにもせよ、この獨語は依然として、强い個性の眞(しん)の根柢であるであらう。

イエスのごとく聖フランチェスコにとつて、祈禱は斯かる努力の性質を帶び、みづから最大なる

精神的活動となつてゐる。斯くのごとき人物を眞に知らんがためには、弟子達とともに行き、數夜を過ごしたまふた山上へと、イエスに從ひ得る人でなくてはならぬ。三人の愛せられしもの、ペテロ、ヤコブ、ヨハネは、一日彼處まで彼に從つて行つた。しかし彼等の見しこと、すなはち彼等が崇め畏んだ彼の光輝と、神秘的莊嚴とに添へたところの、雄々しい sursum corda（心を擧げよ）の全光景を書き記さんがためには、彼等は象徵的言語を使用せざるを得なかつた。

聖フランチェスコにとりてもまた同樣であつた。その師（基督）のごとく、彼に對しては、祈禱の目的は天父との交通であり、神性と人性との和合であつた。或ひは寧ろ單なる受働的、斷念的、無氣力な Fiat（爲させたまへ）を唱へるのではなく、敢然として頭を擧げ、「主よわれを見そなはせたまへ、われは汝の聖旨を爲すことを喜ぶ」と稱して、神の業を行ふために、人がその力を注ぎ出だすことである。

「人心には測るべからざる深處がある。これその奥底に神が親しく臨在したまふからである」。この神が超越的であるか內在的であるか、唯一であり、創造者であり、永遠不變の原理であるか、或ひはライン河の彼方なる學者達がいふやうに、「自我」の理想的客觀化であるか如何かは、人道の英雄に對しては問題でない。戰鬪の眞中にある兵卒は、愛國的情緒のうちに、幾千の眞實があり虛僞があるかについては、決して思索しない。たゞ彼の武器を採り、彼の生命を賭して戰ふのみである。

斯くのごとく靈的抗爭の兵卒達は、祈禱と、反省と、靜思と、靈感とに力を索める。すべてのもの、詩人、藝術家、敎師、聖徒、立法家、豫言者、人民の指導者、學者、哲學者達は、悉くこの同一な源泉から汲み出すのである。

然もあらばあれ靈魂が神に結合することは、或ひは言葉を換へていへば、靈魂がそれ自身を見出だすことは、決して困難なしにではない。祈禱はたゞそれが苦鬪をもつて始まつた場合にのみ、神的交通をもつて終局するのである。ペテルに近く眠つたイスラエルの族長が、既にこのことを推斷した。曰く、「過ぎ行く神は、彼を呼び止めて强ひて聞かんとするものにのみ、彼の名を告げたまふ」と。彼は抗爭の長き時間の後にのみ、祝福したまふのである。

福音書はイエスの祈禱を形容するのに、一の飜譯すべからざる言葉を用ゐて、基督の自發的犧牲に先き立つ煩悶を死の苦惱に比してゐる——Factus in agonia（痛く哀しむ）。彼の生涯は一の長い誘惑であり、苦悶であり、祈禱であつたと云つていいので、これらの言葉はまさしく靈的活動の、異なれる瞬間々々を表すものである。

その「師」のごとく、基督の弟子達とその後繼者達は、だゝ耐忍によつてのみ、かれら自身の靈魂を征服することができる。しかし敬虔なる非國敎徒達には、無意味であるこれらの言葉が、宗敎的天才の人々に對しては、一種の悲劇的意味を有してゐたのであつた。

歴史上から見れば、わたし達の會堂に祭られる、「もの柔しい姿、憐げな表情、甚だしく貧血して憔悴した——殆んど去勢せられたともいふべき——容子、これらがその全人格を示すものとせらるゝ聖徒達ほど、虚妄なものはまたと世にあるまい。彼等は聖アルフォンソ・ディ・リニォリ（St. Alphonso di Lignori）や聖ルイ・ディ・ゴンツァグァ（St. Louis di Gonzagna）の指導のものに教育せられた敬虔な學僧であつて、到底彼等は聖徒でもなく、また勵みて天國を採る强襲者でもないである。

わたし達はフランチェスコの生涯中の最も微妙な一方面に到着した。すなはち彼と惡魔的力との關係これである。惡魔の存在と、その人間との關係に關るすべてのことにおいて、慣習と思想とが全然變化してしまつたので、當時惡鬼の思想が人心のうちに占めてゐた法外な地位を心中に描くことは殆んど不可能となつた。

中世時代の卓絶した人々も何等疑ふことなく、邪惡な精靈の存在と、その人間の誘惑してこれを罠に陷れんがために、絶えず變現出沒することゝを信じてゐた。十六世紀においてすら、幾多の信仰を覆したルーテルその人が、魔法、呪禱、憑靈等と同樣に、惡魔の人格的存在を、少しも疑はなかつたではないか。

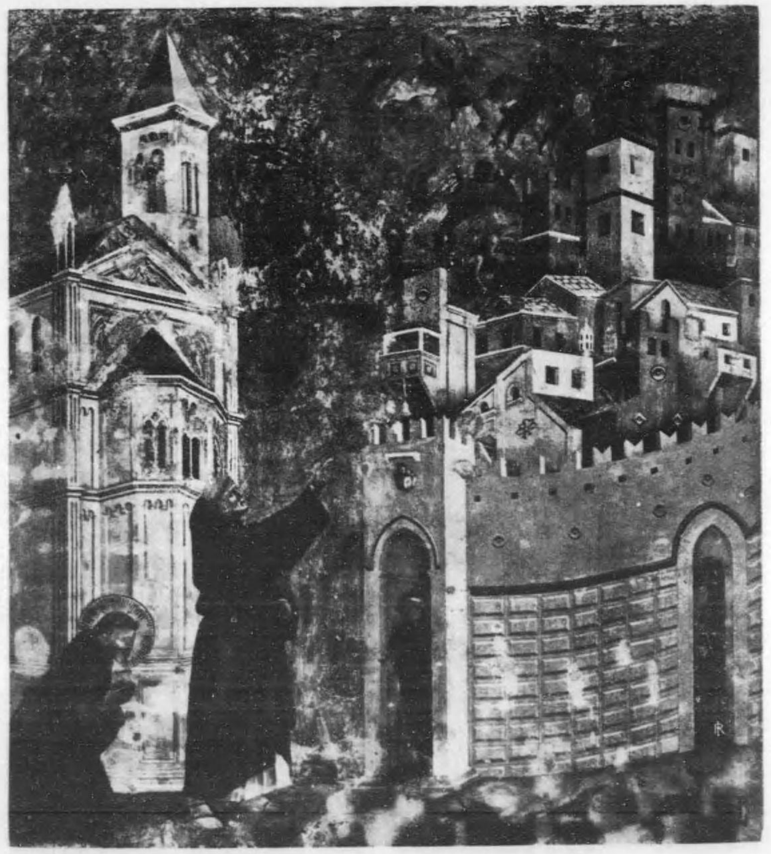
おのが靈魂のうちに、崇嚴であるとともにまた慘憺たる、廣い背景が存在し、往々其處から彼等を更に崇高な生活に招く、遠い諧調の爆聲を聞くのであるが、忽ち野性の嘈音のために壓倒せられ

るのを見て、わたし達の祖先はこの決鬪の解釋を索むるを禁じ得なかつた。彼等はそれを神と惡魔との抗爭に歸したのである。

神が天使達の王であるやうに、惡魔は惡鬼どもの王である。變現出沒自由自在である彼等は、世の終局まで戰鬪をなし續ける。この戰鬪は勿論神の勝利に終はるのではあるが、しかし目下のところ各人の全生涯は、これら兩者の戰鬪の標的となり、就中最も崇高な靈魂は最も甚だしく爭奪せられるのである。

これ聖フランチェスコが當時のすべての人々とともに、しばしば彼の心情を襲ふを不安、恐怖、苦悶、並びに通常の靈魂が浸つてゐた希望、慰藉、喜悅を說明する方法であつた。彼の足跡の及ぶところには常に地方的傳說が、彼が受けねばならなかつた誘惑者の、粗暴な攻擊の記念を貽すのであつた。

時代とともに風習は變遷するが、人間そのものも同樣に著しく變化すると云ふ根本的事實をこゝに別に語るにおよぶまい。もし教育と生活の樣式とにより、某々の感覺が發達して、その鋭敏さが、普通の經驗を愕かすに到るものである以上——音樂家の聽覺、盲人の觸覺等——これより或る感覺が、今日あるよりも大いに鋭くあり得たことを推察することができる。數世紀前にあつては、視覺幻惑の大人におけるは、恰度今日それが遠い僻陬の地方に住む小兒達におけるとおなじであつた。



震へる葉、有らぬもの、一陣の風、分からぬ響等が、一の影象を創造して、彼等はそれを目擊し、その實在を絕對に信ずるのである。人はたゞ一碎片に過ぎない。意志の過敏は感覺の過敏を豫想してをり、前者は後者によつて條件づけられる。そして革命時代の人々をして通常よりも、遙かに强大ならしめる所以のものは、これである。眞實といふ口實のもとに、これらをわが現代社會の一般的思想標準に、歸趣せしめんと試みるのは妄誕なことである。何故なれば彼等は善に對しても惡に對しても、眞に半神半人であつたからである。

傳說は必ずしも妄誕であるとは限らない。'93 年時代の人々は、いま尙ほわたし達とともにゐるが、然しながら傳說に彼等が捉へられてゐたのは、少しも無理からぬことであつて、萬事窮した場合、一身上に關する運命——ときとしては一國の運命に關る——に對して、日に十度も決斷するを要する人々が、あだかも每朝その着るべき衣服や、晝食の menu（献立）について、諄々（くどくど）しく論ずる暇（ひま）のある、實に尊き市民達と駢べて論難せられるのを見るは、誠に憫然の至りである。大抵の場合歷史家は彼等について、眞理のたゞ一部分をしか、認識し得なかつた。蓋し彼等のうちには、二種の人があるばかりでなく、彼等の殆んど全部は、同時に詩人であり、煽動家であり、豫言者であり、英雄であり、殉敎者であつた。歷史を書くことは、この故に、殆んど常に翻譯し、變化することである。十三世紀の人々は外的原因に、彼等の靈魂の內的情感を、附與しない譯には行

かなかつた。わたし達には私達の反省の結果に過ぎないと考へられるものに、彼等は靈感を發見した。わたし達が願望、本能、情熱と稱する場合に、彼等は誘惑と云つたのであるが、しかし私達はこれらの言語の差異のために、彼等の心靈的生命を幾部分なりとも看過し、或ひは虛妄なりと誣ひ、かくて狹隘で無知な主智主義に陷いるやうなことがあつてはならぬ。

聖フランチェスコは許多惡魔と戰つたと自ら信じてゐた。エトゥルリア（Etruria）の Inferno（地獄）の怕ろしい惡鬼どもは、尙ほもウムブリアとトスカナとの森林に、出沒してゐたのであつたが、しかし彼の同時代の人々と、彼の弟子達の或るものとに對しては、幽靈、妖怪、還靈等が、日常の現象であつた間に、彼に對しては彼等は例外であつて、全然背景に止まつてゐたのであつた。人口に膾炙せる聖徒達の大部分と同樣に、聖ベネデットの肖像畫中には、惡魔が重大な位地を占ゐてゐる。聖フランチェスコのそれには、惡魔は全然消え失せて、アッシジにおけるヂオットの壁畫の長い連續の中に、それはたゞの一度すらも、現はされてないのである。

同樣にすべて魔術的なものや奇蹟遂行は、彼の生涯の全然第二位を占めてゐるに過ぎない。福音書のイエスは惡しき靈を逐ひ出だし、すべての病と疾とを癒やす力を、彼の弟子達にあたへられた。フランチェスコほ確かにこれらの言葉を文字通りに採つて、彼の「規範」の一部分とした。彼は彼が奇蹟を行ひ得ると信じもし、かく爲さんことを欲しもしてゐた、しかし彼の宗教的思想は

餘りに純潔であつたので、奇蹟を人々の苦難を救ふ、全然例外の手段以外のものとして考へることは、到底かれには堪へ得ることでなかつた。彼の使徒職を證明せんがために、或ひは彼の想念を支持せんがために、彼が奇蹟を利用しようとしたことは、たゞ一度もわたし達は見ない。彼の直覺は彼に敎ふるに靈魂の、更に優れる方法によつて贏らるべきものなることをもつてした。異能の殆んど皆無であることが、それが當時の傾向に全然相反する點からして、一層著しいものとなる。[8]

彼の弟子なるパドゥアの聖アントニオ（一二三一年死）の傳記を繙け。それは怪事と、醫癒と、甦生との、一の冗慢な目錄である。それは回心と崇高な生涯とに人々を招く召命といふよりも、寧ろ新しい藥材を發明した或る藥種屋の、効能書と云つた方がいいと人はいふかも知れぬ。それは病者や熱心家を喜ばすかも知れぬが、如何なる心情も良心も、それからは感動を受けない。パドゥアのアントニオに關し、彼とフランチェスコとの關係が、極めて微弱であつたやうに見えることを云つて置かねばならぬ。師の思想をその眞の深處にまで測る時をもつてゐた初代の弟子達のうちにはこの崇高なる異能侮蔑の痕跡をわたし達は發見する。完全なる喜悅とは怪事をもつて世を驚かし、瞽の眼を開けることでもなく、また死して四日になる人々を、復活せしめることでもなく、たゞ往々自己犧牲にさへもおよぶ愛のうちに存することを、彼等は餘りに善く知つてゐたのである。Mihi absit gloriari nisi in cruce Domini.（われには主の十字架のほかに誇るものなし）。

この故に兄弟エヂディオは、奇蹟を行はないやうに、神の恩寵を乞ふたのである。智識に對する慾望と同じくそのうちに、傲慢者が捕へられ、また敎團からその眞の使命を奪ひ去る罠を彼は見た。

聖フランチェスコの奇蹟はすべての愛の行動である。その大部分は、一見說明すべからざる不安であつたが、實は危急な場合における殘忍な苦悶とも云ふべき、神經的病患の醫癒であるのを私達は見る。甚だ同情に富むと同時にまた極めて力强くあつた彼の一瞥は、彼の心情からの使者のやうに見えて、しばしばそれに遇ふた人々をして、彼等の苦難を全く忘却せしむるに充分であつた。

毒づけき眼は普通考へられてあるよりも、重大な邪敎で恐らくあるかも知れない。一瞥が人をして姦淫者たらしめるに足ると、イエスの云つたのは正しい。しかし其處にはまた——例へば思ひに沈めるマリアのそれのごとき——凡ゆる犧牲に價する一瞥もある。何故なればそれはすべての犧牲を包括し、眺むるものを献げ、聖別し、生贄にするからである。

文明は瞥見のこの力を鈍らす。世界がわたし達にあたへる敎育の一部分は、わたし達の眼をして表情なきものとし、その焰を熄滅せしめて、人を欺くように敎へるのである。しかし單純で卒直な性情は、「生命と健康とを灼燿たらしめる」心情のこの言語（眼）の使用を、決して放棄することをしないのである。

「一人の兄弟が云ふべからざる苦悶に患んでゐた。往々彼は地上に輾轉して、途に横たはるすべ

てのものに衝突し、見るも怕ろしく口から泡を吹いてゐた。時々彼は硬くなつたが、暫らく突んのめつてゐた後、再び怕ろしく拗れて輾轉した。ときとしては地上に塊となり、頭を足に接せしめ、高く人の頭上を越すほど飛び上がるのであつた」。フランチェスコは彼を見に來て癒した。

しかしこれらは例外であつて、大抵のときはわが聖徒は、彼手づからの奇蹟を、彼の伴侶者達が乞ふた場合に、その懇願を拒絶したのであつた。

要するにフランチェスコの信念の全分野を測定すれば、それが祈禱によれる彼の靈魂と神との結合から、出て來てゐるのを私達は見る。觀念界を洞察するこの直觀的能力が、彼を神秘家の階級に入れる。實に彼は神秘主義の恍惚と自由との、雙方を知つてゐたが、しかし彼をしてまた神秘主義から異ならしめる種々なる特徴、就中彼の使徒的熱誠を、わたし達は忘却してはならぬ。然のみならず彼の信仰は必ず指摘せらるべき、一種獨特な性質を有してゐた。

その第一は、戒律に對する自由の精神である。フランチェスコは大抵の宗教的戒律が、全然空虛でまた誇りとなつてゐたのを感じた。かれは其處に隱されて横たはる罠を見た。蓋し宗教的典例のすべての細目を、力を盡して遵守せんとする人が、愛といふ至高の律法を、忘却する危險を冒してゐるからである。加ふるに規定外の業を積む托鉢僧は、愚民の賞讃を博した。そしてこの賞讃のうちに彼の感ずる喜びが、事實彼の敬虔な行動を罪惡に變せしめる。斯くて甚だ珍らしいことには、彼

は諸教團の他の建設者達と異なり、その制定せし種々なる「規範」の峻嚴さを、絶えず輕減しつゝあつたのであつて、[10] 私達はまたこれをたゞ一の偶然事として考へてはならぬのである。何故といふに、彼の意志を透徹せしめ得たのは、常に弟子達との抗爭を經た後であつたからである。且つ清貧の誓約を最先に弛緩せしめんと欲してゐたのは、豈に圖らんや、公衆の眼前には如何にも頑固な嚴守家のやうに見られんことを焦慮してゐたところの人々であつたのである。

かゝる時に際してフランチェスコは云つた、「罪人も斷食することができる。彼は祈禱し、哭き、苦業することもできるが、しかし彼は一事を爲し得ない。即ち彼は神に忠實であり得ない」と。神殿なく、祭司なく、靈と眞との禮拜を宣傳せんがために來た、その人の唇から洩るゝに適しい、崇高なる言葉よ。彼は進んで各の爐邊が神殿であり、おの〳〵の信徒が祭司であるべきことを教へた。

宗教的儀禮は、禮拜の如何なる形式においても、常に無理な重くるしい樣式を採る。凡ゆる時代のパリサイの徒は、おのが信心のほどを人が氣付かぬやうなことがあつてはならぬと考へて、彼等の顏を憔れさすのである。フランチェスコはたゞに虛僞の澁面を、忍び得なかつたばかりでなく、積極的に歡喜と喜悅とを、宗教的義務の數に算へたのであつた。

引き出せば出すほどます〳〵增してくる、生命と眞理との盡きざる寶を心中に蓄へてゐる人が、如何して憂鬱であり得ようぞ。しばしば蹉跌するにも關らず、前進して止まざる人が、如何して悲

しんでゐられようぞ。成長發展する敬虔な靈魂は、かの弱い小さい肢體が強くなりゆき、日に日に自由に動かし得るやうになるのを感じて嬉しがる幼兒のやうな喜悅を抱くのである。

喜悅[11]といふ言葉はフランチェスコ派の著者の筆に、恐らく最も繁く上つたものであつて、わが師は更に進んでそれを、「規範」の戒規の一とするに至つた。喜び勇む軍勢が、常に勝利の軍勢であることを知らざるべく、彼は餘りに善き將軍であつた。初代フランチェスコ派傳道の歴史には、高く清らかに鳴り亘る笑聲の爆發が幾千もあるのである。

この點について私達には中世紀を、事實あつたよりは一層憂鬱なものとして想像する傾きがある。成る程人々は當時大いに患んではゐたが、しかし憂愁の觀念は、嘗て刑罰の觀念から分離さるゝことなく、苦難は贖罪かまたは試練のいづれかであつたので、これにより悲哀はその刺を失ふものとせられてあつた。光と希望とはそれを通じて輝くのであつた。

フランチェスコは彼の喜悅の一部分を聖餐から汲んだ。彼は晩餐の聖禮典に對して、云ふべからざる情感と。喜悅に充てる涙とに滲んだ禮拜を捧げた。これは人間の靈魂中の最も崇高なるものを扶けて、重荷と日中の暑熱とに耐へしめたものであつた。教義の文字は十三世紀においては、今日あるごときものではなく、それはイエスによつて始められた饗宴のうちに、永遠に、全く美はしく、眞實で、力籠り、當時各人の心中に潑溂たるのであつたのである。

聖餐は眞に靈魂の旅の糧であつた。遠き昔エマオへの巡禮のやうに、黄昏の影は落ち、朧なる悲哀が靈魂を襲ふとき、夜の妖精は醒めて、わたし達のすべての思想の背後に、隈どるやうに見ゆる頃、わたし達の父達は、彼等の方に來たる神來の不可思議な「伴侶者」を見た。彼等は彼の言葉を吸ひ込み、彼等は彼の力が自分達の心情のうへに降るのを感じた。彼等の內的存在は全く再び暖められて、再び彼等は囁いた、「主よ、われらとゝもに宿りませ、日は夙に去りて、夜は近づきたれば」と。

そしてしばしば彼等の祈禱は聽かるゝのであつた。

---

1 聖フランチェスコの死後、彼の墓に祈願するために來た最初のものは、ナルニの人々であつた。

2 (一)、清貧に對する忠實。(二)、「規範」變更の禁止。(三)、「遺言」と「規範」との同等權威。(四)、羅馬法王廳の特典を要求すること。(五)、托鉢僧をして高き教會的地位に昇格せしむること。(六)、俗僧に對抗することの絶對的禁止。(七)、大會堂と富裕な僧庵建立の禁止。以上がその論爭の重な點であつたが、フランチェスコの死後二十五年を出ないうちに、全然彼の意志は蹂躙されてしまつた。

3 降臨節の頌歌。

4 In foraminibus petræ nidificant. 巖の洞窟に巣を造つた。

5 ルカ傳第二十二章第四十四節。

6　マタイ傳第十章の一節。

7　奇蹟はチェラノの第一傳記中、たゞ十節（六十節より七十節まで）を占めてゐるのみである。そしてこれも悉くフランチェスコの奇蹟とはいへないのである。

8　異端者達は奇蹟に對するこの渇望心を、加特力教徒誘拐に利用した。モンクウル（Moncour）の清潔派は、片目で齒のない聖母の像を畫いて、基督はその降世のとき母として、極めて醜い女を選ばれたのであると稱した。彼等は斯かる手段を用ゐて容易に多くの病氣を癒してゐた。この肯像は有名になり、到る處に祭られたが、遂に異端者達がその欺瞞を暴露するに至つて、信者達は大いに恥辱を感じたのであつた。

9　ガラテヤ書第六章の第十四節。これは今日に至るまで「小さき兄弟達」の格言である。

10　Secundum primum regulum fratres feria quarta et sexta et per liceliam beati Francisci feria secunda et sabbato jejunant, 第一の規範によりて兄弟達は第四日（水曜日）と第六日（金曜日）とに斷食を守り、祝福されしフランチェスコの許可を受けて、第二日（月曜日）と安息日とに斷食を守る）。或るところには金曜日のみが斷食の日として規定せられてある。

11　Caveant fratres quod non ostendant se tristes extrinseus nubilosos et hypocritas; sed ostendant se gaudentis in Domino, hilares et convenientes gratiosos（兄弟達は外面憂ひを帶びて悲し氣に、僞善者のごとく見せざらんことを努め、却つて主にありて喜び、嬉々として心より感謝するものと見られんことを願ふ）。

第十二章　一二一七年の僧大會（カピトウルム）

一二一七年の聖靈降臨日以後、フランチェスコの生涯の年代記的記述は、誤謬に陷らないことが殆んど不可能なほど夥しくある。しかし不幸なことには、それに先き立つ十八箇月間に對しては然うでないのである（一二一五年の秋――一二一七年の聖靈降臨日）。この期間については、精々憶測を下すくらゐのことである。

フランチェスコは當時異邦傳道には赴いてゐなかつたがゆゑに、彼は疑ひもなく彼の時間を、中央伊太利亞の傳道と、彼の團體の基礎建設とに用ゐたであらう。ラテラノ會議中彼が、羅馬に滯在してゐたことは可能である（一二一五年九月十一日より三十日まで）が、その何らの痕跡が最初の諸傳記のうちに殘つてゐない。この會議は確かにわが新教團について審議したに相違ないが、しかし結局既に教會により裁可された諸の「規範」中の一つを採用するといふ、五年前至高の法王がわが教團に向かつて做したところの勸告を反復することに過ぎなかつた。おのが團體の建設許可を乞はんがために、その時羅馬にゐた聖ドメニコも同じ勸告を受けたが、彼は直ちにそれを承諾した。もし聖ベネデットの「規範」を基礎として採用さへしたならば、法王廳は喜んで「小さき兄弟達（フライ・ミノリ）」に、獨特な憲法を

許容したであらう。實際キアーラ派は、聖ダミアノのそれを除き、斯くのごとくしてその名とその習慣の若干とを保存しながら、つひにベネデット派の「規範」を承諾するの餘儀なきに至つたのである。

このすべての勸誘にも關らず、フランチェスコは自己の規範の維持を主張した。インノケント三世が死んだ一二一六年の七月に、彼がペルヂアに赴いたのは、これらの問題について協議するためであつたやうに思はれる。

それは兎に角として、この時期の僧會には重大な意義があつた。わが教團に對して、やゝ困惑せる感情をもつて眺めてゐた教會は、もはや斯く深奥な運動に對しては、單なる傍觀者として安んじてはゐられなくなつた。教會はそれを利用すべき必要を感じた。

ウゴリニは斯かる仕事に對して、驚嘆すべきほど善く適當してあつた。インノケント三世からわが「兄弟達」を監視すべき任を受けたところのサビノ（Sabino）の監督なるヂオヴァンニ・ディ・サン・パオロ（Giovanni di San Paolo）は一二一六年に死んだが、ウゴリニは時を逸せず、フランチェスコの保護にみづからを任じ、フランチェスコもそれを感謝して受けたのであつた。この異外な申し出は「三伴侶者」によつて、詳細に述べられてある。それは確かにヂォヴァンニ・ディ・パオロの死後間もなき、一二一六年の夏であつたに相違ない。

この僧正が臨席して開かれた最初の僧會が、一二一六年の五月二十九日に催されたといふのは、い

かにも事實らしくある。歴史に始終有り勝ちな誤謬であるが、多くのフランチェスコ派の著者達は、教團のこの最初の崇嚴な審議會に關する、散亂した諸の出來事を、單一な日附に歸してしまひ、そしてこの典型的會合を「莚の僧會」と呼んだ。事實長い年月の間、「小さき兄弟達」のすべての集會は、この名に價ひするものであつた。

極暑の季節に集合し來たつて、かれらは露天に眠り、葦の假小屋に身を凌ぐのであつた。しかし私達は彼等を憐む必要がない。ウムブリアにおける夏夜の、輝く澄明のごときは又と世にあるまい。時として人はプロヴンスにおいてその一端を味ひ得るが、しかしバウ（Baux）にあつてドン（Dons）の嚴々のうへに、或ひは聖バウム（Baume）において、光景は等しく崇嚴で、壯大ではあるが、尙ほそれらは抱擁する甘美と、生命の流出とを缺いでゐる。これらはウムブリアの夜に、魅する蠱惑をあたへるものである。

近隣の町々村々の住民達は、群をなして集會に寄せ集まつた——儀式を見んがために、兼ねて彼等の親戚朋友達の受衣式に臨席し、わが聖徒の奬勵を聽聞し、且つ托鉢僧達にその必要とする糧食を供給せんがために、この光景は亞米利加人の非常に喜ぶ天幕集會にやゝ似てゐないことはない。傳說に殘つてをり、そしてたゞ〳〵フランチェスコ派の一僧なる教父パピニ（Papini）をして懷疑的趣味を弄せしめる機會をあたへたところの、數千人の出席者の數は、恐らく、想像せられてあ

るほどに怪しむべきものでないであらう。

すべての「兄弟達」が熱心に馳せ參じ、遠隔の地から寄つて來た群衆の眼前において、露天に催されたこの等初代の集合は、この故に、爾後引き續いた僧大會とは何等共通するところがないと云はねばならぬ。後代の僧大會は小數の代議員の會合する、眞の秘密會議であつて、その仕事の大部分は隱密のうちに果たされ、しかもたゞ教團の事務に關したことだけであつた。

フランチェスコの生存中には、これらの集會の目的は、徹頭徹尾宗教的であつた。人々は事務を語つたり、或ひは團長推擧のためにではなく、相互の交通のうちに、他の兄弟達の喜悅と模範と、そして苦難からして、新しい力を獲得せんがために、集まつたのであつた。

一二一六年の聖靈降臨日に引き續く四箇年は、わがウムブリアの運動の發展における、一段階を形造くる。すなはちその間フランチェスコは、自治を獲んがために戰鬪しつゝあつたのである。教會的著者達並びにその反對者達によつて、等しく誤解せられたところの、かなり明瞭でない暗い影の、こゝに存するのを私達は見る。蓋しフランチェスコはひたすら反抗の態度に身を置かざらんことを願つたとはいへ、彼は彼の獨立を曖昧にしようとはしなかつた。また羅馬の法王廷が彼のうへに積むすべての特典も、もつて自由に換へるに足らざることを、鋭敏な先見によつて感じてゐた。しかし吁、彼は間もなくこの鍍金した鎖に繫がるゝの餘儀なきに至り、これが爲に一生の最後の呼吸に到るまで

も、反抗することを止めなかつた。然もあらばあれ法王廳がこの點において彼に加へた、道德的暴行に眼を塞ぐは、彼の事業を全然誤解する過を、敢てするものと云はねばなるまい。

フランチェスコ派の人々に送られた法王令の蒐集の瞥見は、諸の修道院的教團によつて、極めて熱心に探求されたその愛顧に反對して、何たる熱心をもつて彼が抗爭したかを、示すに足るのである。

傳說的逸話の夥しき數が、特典に對するフランチェスコの輕蔑を、最も明瞭に表はしてゐる。しかし彼の最愛の友達すら、彼の憂慮を常に推察はしなかつた。

彼等は一日彼にいつた「しばしば監督達が說教することを私達に許さず、かくて神の言葉を宣傳することが許可さるゝ前に、數日間何ごともせずに、わたし達を放置することを、汝は知るか。この目的に對して法王から特典を獲ることは、蓋し詰め好都合でもあり、また人々の靈魂のためでもあるであらう」と。

「自分は先づ第一に、謙讓と尊敬とによつて、主教達を回心せしめんことを欲する」と、彼は直ちに答へた、「蓋しわたし達が彼等に對して謙讓であり、恭しくあることを見るならば、彼等自身からして私達が、人民に說教し、これを回心せしめんことを乞ふに至るであらう。自分は自分で、わたし達の『規範』の命ずるやうに、全人類をかぎりなく尊重し、彼等を回心せしめんがためにわたし達の模範と、わたし達の言葉とのほかに、何ものをも自分がもたないと云ふこと以外に、神に向かつて如何なる特典をも乞はない」と。

法王廳の特典に對する彼の嫌惡において、フランチェスコは正當であつたか不當であつたかといふ問題は、歴史の範圍内のことでない。しかし斯かる態度が長く繼續し得なかつたことは明白である。教會はたゞ忠義な者と謀反者とを知るのみである。然もあらばあれ最も崇高な心情すら、しばしばこの種の妥協において、立脚地を造らうとするものである。彼等は激動なしに、また危機なしに未來が過去より成長せんことを願望する。

一二一七年の僧會は、フランチェスコ派の異邦傳道が、確實に組織せられたことによつて有名であつた。伊太利亞および他の國々は、數々の Provincia（プロヴィンチア）（州）に分割され、その各が州長を戴くことになつた。位に即くや否やオノリウス三世は直ちに、十字軍に對する一般人民の熱情を復活せしめやうと努めた。彼はそれを宣傳するにとゞまることなく、彼の法王時代中に聖地が征服されると稱する豫言に訴へた。斯くして喚起し、その躍動が遠く獨逸にまでも感ぜられたこの熱情の復活は、「小さき兄弟達（フラティ・ミノ）」のうへに深奥な感化をあたへた。このときフランチェスコは、恐らく謙讓の心からして、シリアへの異邦傳道の使命を授けられた托鉢僧達の長にならなかつた。指導者として彼は彼等に、曩にフィレンツェにあつて、卓越せる材幹を發揮し得た有名なエリアをあたへたのであつた。

爾後この物語の前面に現れて來るこの兄弟は、社會の最も賤しい階級のものであつた。教團に彼が

加入した日附と事情とが不明であるので、從つて憶測は彼を、フランチェスコの決定的回心の直ぐ前までその腹心の友となつてゐたところの、かの巖窟における人と同一視するやうになつた。それは兎に角として、青年時代には彼は、アッシジにおいて寢藩團を造り、數人の子供達に讀書を教へつゝ生活してゐた。それから暫時 scriptor（スクリプトル）（記者）としてボロニァに過ごした。その後突然彼が、「小さき兄弟達（フラティ・ミノ）」の中にあつて、極めて困難な使命を委ねられてゐるのを、わたし達は發見するのである。

彼の反對者すら彼が、その世紀の最も秀れた人物であつたことを、互に爭ふて確言してゐるが、しかし不幸にも文書の現在狀態においては、彼の性行に關して斷定を下すのは、極めて困難である。學識があつて、精力的で、宗教改革事業の主動的役割を演せんことを熱望し、且つ前もつてそれを實現する適當な方法として、計畫を整へ、かくて一直線に半ば政治的で半ば宗教的な、彼の目標に向かつて邁往した。フランチェスコに對する嘆美と感謝とに充ちて、彼はこの運動を調整し、統一して、革新運動たらしめんことを願望した。レオ、ヂネブロ、エヂディオ、その他多くの人々が、自由の精神と、謙讓と單純の宗教とを代表する、内的フランチェスコ派の圏内にあつて、エリアは學術的教會的精神、深慮と理性とを代表してゐる。

彼はシリアにおいて大成功をなし、フランチェスコの最愛の弟子達の一人なる、スペア（Speyer）のチェザレ（Cesare）を教團に引き入れた。この者は後に二年足らずのあひだに、全南方獨逸を征服

し（一二二一年より一二二三年に亘りて）、そして遂に兄弟エリアその人の攻撃に對して防禦しつゝ、規範嚴守の忠誠を、彼の血をもつて封じたのであつた。[1]

スペアのチェザレは、かの十三世紀において、諸處を往來上下し、先づ知識を求め、次いで彼等を悶えさせた神秘的渇望を鎮靜せしめるところの宗教的生涯を希つたところの、理想に渇するそれら無數の患める人々の、一の赫々たる範例となつてゐるのである。スコラ學者コルラドの弟子として彼は、教會を改革せんとの願望に壓倒された。尙ほ一平信徒であつたとき、彼は彼の理想を宣傳したが、スペアの幾人かの貴女が新生涯を始めたので、若干の成功なしではなかつた。しかし彼等の夫達が承知しなかつたので、彼等の復讐を避けんがために、彼は巴里に逃亡するの餘儀なきに至つた。巴里から東方へ赴いたが、其處で彼は「小さき兄弟達」の說教のうちに、再び彼の希望と夢とを發見した。この一例はフランチェスコ派の福音が傳播せられたとき、靈魂の俟ち望める狀態が、如何に一般的であつたか、またその道が到る處に、如何に準備せられてあつたかを示す。

然しそれは一二一七年の僧會に立ち歸るべきときである。ヂオヴァニ・ディ・ペンナの指揮のもとに、獨逸へ赴いた托鉢僧達は、エリアとその伴侶者達との成功には、遠く及ぶべくもなかつた。彼等はその傳道せんと試みた國の國語には、全然無智識であつた。恐らくフランチェスコは、伊太利亞語が善く、必要な場合には、地中海に浴するすべての國々に對して、事足るものとしても、以つて

中部歐羅巴に當て嵌め得ないといふ事實を、考量に加へなかつたらしくある。

匈牙利に赴いた一隊の運命も、これよりは幸福なものでなかつた。彼等を虐待した農夫牧羊者達を宥めようとして、宣教者達がその着物をさへあたへようとしたことが、實にしばしばであつた。しかし彼等自身を理解せしめることは扨て措き、彼等の語ることが第一人々に通じなかつたので、間もなく彼等は餘儀なく伊太利亞に歸らうと考へた。フランチェスコ派の著者達が、これらの阻碍の記錄をわたし達のために保存し、そして後日しばしば述べられたやうに、托鉢僧達が忽然として神來の靈感により、すべての國語を識つたやうに、描かうとはしなかつたことを、わたし達は感謝すべきである。

西班牙に派遣せられた人々もまた、迫害に遇つた。この國には、佛蘭西の南方のやうに、異端が跋扈してゐた。しかし既に當時においては、大々的に鎭壓されてつた。フランチェスコ派は僞れる加特力教徒であると疑はれ、從つて熱心に獵り立てられたので、葡萄牙の女王ウルラカ（Urraca）のもとに避難處を發見した。彼女は彼等がコイムブラ（Coimbra）、グヰマルレアン（Guimarraens）、アレンクエロ（Alenquero）およびリスボン（Lisbon）に定住することを許した。

フランチェスコは自ら佛蘭西に赴かんがために準備をした。この國は聖禮典に對する彼の燃ゆる愛ゆゑに、彼に對して格別な盛惑を有してゐた。恐らくまた彼は彼の名と、彼の青春時代の武士的夢

想と、彼の生涯に入り來たつた詩と、歌と、音樂と、甘美な夢のすべてとを負へる、この國の方へ知らず知らず惹き寄せられたのであらう。

この新傳道旅行を企てたとき、彼の全身を震はした情感の幾分が、彼の傳記著達の物語のうちへ移された。人は其處に甘美であつて、また同時に苦惱な戰慄、不可知の前途を恐れつゝ、而もその日が愛と正しきものとに、聖献さるゝことを知つてゐるので、尙も喜悅に溢れつゝ、地平線を見究めんがために、拂曉に全馬具を整へて出掛け行く勇敢なる勳爵士の脈動を感ずるのである。

想像力の眼前に常にその姿を寫し出してゐながら、永久に理想の祖國として殘るところの、地球の際涯さして出立する武士や、旅行を企てる夢想家や、藝術家や、または聖徒達に、伊太利亞の詩人は「愛の巡禮」といふ名稱をあたへた。斯くのごとき巡禮が、フランチェスコの企圖であつた。

「出立せよ」と、彼は彼に伴つてゐた兄弟にいつた。「そして二人宛、雙讓に柔和に、第三時の勤行の濟むまでは沈默し、すべての虛しく無益な言葉を避けて歩めよ。恰も汝等は僧庵または僧房に、閉ぢ込められたかのごとくに、この旅行の間は瞑想せよ。蓋し私達は、何處にあり、何處に行くとも、わたし達の僧房を身に携へてゐるからである。兄弟なる肉體は私達の僧房である。そして靈魂はそのうちに住む隱者であつて、其處に主に祈禱し瞑想せんがためにゐるのである」。

フィレンツェに到着するや、十字軍を遊說し、その成功を確實にするすべての必要な方法を告知せしめんがために、トスカナへの使節として法王から派遣されたウゴリニのゐたのを彼は發見した。

フランチェスコは勿論この主教から、かゝる待遇を受けやうとは、少しも豫期してゐなかつた。彼を奬勵するかはりに、この僧正は、彼の計畫を放棄するやうに捉した。

「わが兄弟よ、汝が山を横切らんことを、自分は喜ばない。汝のことに就き、ひたすら羅馬法王に羅盤を持ち掛けんと、待ち構へてゐる多くの主教達がゐる。しかし汝の教團を受する自分と他の僧正達とが、汝を保護し、援助せんことを願望してゐる。但し汝がこの州を去り出でないといふことを、條件としたい」と。

「しかし monsigor（わが主よ）、わが兄弟達を遠方に派遣して置きながら、自分だけが彼等の受けてゐる苦難を少しも分かたずにこゝに安閑として居殘つてゐるのは、自分に對する大なる恥辱であるであらう」。

「しかちに何故に汝は彼等を斯くのごとき遠遠の地を派遣して、饑餓と、有りとあらゆる危險とに、暴露させたのであるか」。

フランチェスコは熱心に、また恰も豫言的靈感に動かされたかのやうに答へた、「神が兄弟達をただこの國のみのために、起こしたまふたと汝は考へるか。眞に自分は汝にいふ、全人類の覺醒と救濟とのために神は彼等を起こしたまふのであつて、彼等はただ信ずる人々の中における靈魂のみならず、同時に不信者達の眞中にある靈魂をも獲得するのである」と。

これらの言葉がウゴリニの心の中に醒めさせた驚愕と嘆美とは、以つて彼の心を變せしめるには足らなかつた。彼が飽くまで強固に主張したので、フランチェスコはおのが事業に對する永久に搖がざる靈感であつたところのポルティウンクラに歸つたのであつた。佛蘭西を見れば感ずるに相違ないと思はれた喜悅の情が、彼をしてこの計畫を排斥すべきものであるといふ觀念を、固くせしめなかつたか否やを、誰が知らう。犧牲たらんことを渴望する靈魂は、往々斯くのごとき躊躇を爲すものである。神への献物たらんがために、彼等は極めて正當な喜悅をすら、拒否するのである。

フランチェスコが兄弟パチフィコ（Pacifico）を、佛蘭西派遣の宣敎者達の首領に任じたのは、この會見の後直ぐであつたのか、または翌年であつたのか、わたし達は斷言し得ない。

才能ある一詩人であつたパチフィコは、回心前に「詩の王公」と稱せられ、首府において皇帝から冠を受けたものであつた。アンコナ（Anconna）の邊疆にある「サン・セヴリノ」（San Severino）の一尼僧であつた親戚のものを訪問してゐたときに、フランチェスコもまたこの修道院に來着して說敎したのであつたが、その聖き猛烈さに對してこの詩人は聖書の謂ゆる節々骨髓までも刺し徹す劍をもつて、自らを抉らるゝやうに感じた。翌日彼は衣鉢を受けて、彼の象徵的な異名を受けたのであつた。

彼は、一二二四年英吉利への、最初の宣敎の首領となるに至つたところの兄弟アニェルロ・ディ・ピザ

（Agnello di Pisa）を伴つて行つた。

彼等を送り出したとき、フランチェスコは、彼に斯くも蠱惑をあたへたその國から、彼の夢想を危うする感化が來ようとは、少しも考へはしなかつた。——すなはち巴里がアッシジの破壞であらうとは！しかもその時期は甚だ遠いものではなかつた、數年を經てわがPoverello（貧しき人）は、その靈的家族の一部分が、謙讓と彼等の名と、彼等の起原と、そして彼等の憧憬とを忘れて、智識の蜉蝣的月桂冠を慕ひ求めるのを見るであらう。

當時フランチェスコ派の慣習は、大都會へ容易に達し得る處に、彼等の住家を造くることであつたのを、わたし達に既に見た。パチフィコと彼の伴侶者達とは、聖デニ（St. Denis）に定住した。[2] 彼等の活動については、詳細なことは分からないが、しかし數年後大成功をもつて英吉利を攻擊してゐるところから見れば、著しい結果を獲たに相違ない。

フランチェスコは翌年（一二一八年）を、伊太利亞の傳道旅行に過ごした。これらの旅路に彼の跡を追ふことは、勿論不可能である。旅程はその日その日の靈感か、乃至曩に彼のシエナ行きを決したものと同じい、狂想的な暗示によつて定められたのであつた。ボロニャ（Bologna）、リエティ（Rieti）の谷、スビアコ（Subiaco）における聖ベネデット（St. Benedetto）派のサクロ・スペロ（Sacro-Speco）、ガエタ（Gaeta）、ガルガノ（Gargano）山のサン・ミケレ（San Michele）等が、多分このときかれを

迎へたであらう。しかし彼がこれらの場所にゐたといふ記錄が、餘りに稀で漠然たるものがあるがゆゑに、この物語の組み立ての中に入れる譯にはゆかない。

この間に彼が羅馬を訪れたといふことは、如何にも事實らしくある。彼とウゴリニとの交通は、一般に想像せられてあるよりも、一層頻々たるものであつた。この點につき傳記者達の物語によつて、わたし達を欺かしめてはならぬ。ある人について知つてゐることを、悉く三、四の顯著な日附に歸してしまふのは、自然な傾向である。わたし達が最も善く知悉し最も多く愛する人々の、全生涯を忘却し、取繞れる朦朧を深くすればするほど、ます〳〵煌々と輝く若干の灼耀たる事件の周圍に、それらを群集せしめるのである。百の異なれる場合に語られたイエスの言葉が、ついに單一な談論、すなはち「山上の說教」となるに至つた。

批評が微妙なるを要するのは斯かる場合であつて、科學的議論の重々しい大砲に加ふるに、若干の直覺をもつてすべきである。

本文(テキスト)は神聖なものであるが、しかし私達は彼等を崇拜物(フエティシュ)としてはならない。マタイ傳に然か記してあるにも關らず、何人も今日イエスが「山上の說教」を、一時に語られたと思ふものはない。これと同じく、最初まづ私達が陷り易いまゝに、すべてのことを二、三の會合に歸せんとするならば、聖フランチェスコとウゴリニとの關係についての記述のうちに、矛盾せる記事に遭遇して、始終わた

し達みづからの行き止(とま)りに追ひ込められるのを發見するであらう。

分析のたゞ一擊によつて、これらの困難が消滅し、異なれる記錄がおの〳〵相結合して、つひに心理學的に眞實な、活ける、有機的な物語となる斷片を、わたし達に齎らす。

わたし達が今到達したこの瞬間よりして、ウゴリニに過去におけるよりも一層大なる地位をあたへねばならぬ。抗爭が斷乎としてフランチェスコ派の理想——おそらく怪想的ではあるが、しかし崇嚴な——と、教會の政策とのあひだに開かれて、遂に半ば譲譲からして、半ば落膽からして、心破れしフランチェスコが彼の心靈的一族の指導を辭するに至つた、その日まで繼續した。

ウゴリニは一二一七年の終はりに羅馬に歸つた。その冬彼の副署が、最も重大な法王令の下部に押されてあるのが見出される。彼はこの時日を、特に新教團の問題に關する研究に獻げ、そしてフランチェスコを召還した。主教達が彼を法王から離間せしめんがために凡(あら)ゆる方法を講じてゐると云ふことを、フキレンツェにおいて如何に腹癪なくウゴリニが、彼に述べたかを私達は見た。わが教團の成功、然らずと固く言明せられしにも關らず、異端の香あるその遣り方、全世界到るところに彼の托鉢僧達を散在せしめながら、インノケント三世によつて交附さるゝ、文字だけで眞(まこと)の假のものに過ぎなかつた認可を受けやうなどゝは更に試みないフランチェスコの不羈獨行——すべてこれらの事が、僧侶を驚愕せしめるものであると考へられたのは明らかである。

他の何人よりもウムブリア、トスカナ、エミリア、アンコナの邊彊等、すべてフランチェスコ派の傳道の最も成功した地方を、善く知つてゐたウゴリニは、親しくこの新運動の力と、それを指導すべき逼迫せる必要とを判斷することができたのである。法王並びに神聖なる一團の人々が、フランチェスコに對して抱いてゐた偏見を緩和する最善の方法は、彼を法王廳に出頭せしめることであると彼は考へた。

フランチェスコは最初、「イエスの代理者」の前に說敎すると云ふ考へに對して、大いに當惑したが彼の保護者の懇請により承諾し、念のために彼の語るべきことを、暗記したのであつた。

ウゴリニ自身もこの行動の結果については、全然安心してはゐなかつた。チェラノのトムマゾは、彼を心配に食ひ盡されしものとして描いてゐる。彼はフランチェスコにつき、その飾なき雄辯がラテラノ宮殿內に、幾多の危險を冒して進むことであらうと心を傷めた。彼にはまたその上一身上の心配も加はつてゐた。蓋し彼の protégé（被保護者）の失策は、彼自身にとつても極めて不利益なことであつたからである。殊に法王の足下に到來して、フランチェスコが云はうと志してゐたことを、悉く忘れてしまつたとき、彼の心配は實に一層であつた。しかしフランチェスコはそのことを率直に告白して、瞬間の靈感により新しい談論を得んことを索め、極めて熱烈にまた單純に語り出でゝ會衆を感動せしめたのであつた。

この謁見の實際的結果については、傳記者達は沈默してゐるが、しかし彼等は敎訓といふ單一な目的をもつて書いてゐるのであるからして、これに對してわたし達は驚くにおよばない。かれらは彼等の師を崇拜せんがために書いたので、初期時代に彼が遭遇した困難などは、餘り喜んで述べなかつたのである。

その信仰と謙讓とは明瞭であるが、しかし敎會的服從を敎へることが不可能であつたところの、この奇妙な人物に對して法王は大いに困惑したに相違ない。

圖らずも同時に聖ドメニコは羅馬にゐて、法王からの愛顧で壓倒せられるほどであつた。インノケント三世が彼に、既に敎會が認可した「規範」のうちの一つを擇るやうに願つたので、彼は彼の托鉢僧達をノトゥル・ダム・ドゥ・プルイユ（Notre Dame de Prouille）に歸還せしめ、かれらと協議したのちに聖アウグスティヌスのそれを採用したことは、歷史上の一事實である。故にホノリウス（Honorius）は彼に特典をあたへることを惜まなかつた。ウゴリニがこの前例によつて聖フランチェスコのために、計らうとしなかつたとは到底考へられない。

その敎團が僅かに五六十人の團員を抱擁するに過ぎないドメニコが、當時の精神的勢力の一つでないことを、法王廳は明白に知つてゐた。且つ彼に對する情緒は、フランチェスコについて抱いてゐたものほど決して複雜なものではなかつた。

これら二教團を結合すること、ドメニコ派の肩上にアッシジの「貧しき人々」の、褐色の衣を投げ掛けること、斯くして「小さき兄弟達」に對する人氣の反映を減少し、後者に等の名稱と彼等の衣と、進んでは似かよへる「規範」をさへあたへて、結局聖アウグスティヌスのそれを完成せしめること、以上のごとき提議はウゴリニに著しく氣に入り、且つフランチェスコの謙讓が、いくらか成功の機會を仄めかしてゐるやうに見えた。

一日敬虔な主張の結果ドメニコは、フランチェスコをしてその繩を彼にあたへしめ、それを素早く身に纏ふた。彼は云つた Vellem, frater Francisce, unam fieri religionem tuam et meam et in Ecclesia pari forma nos vivere. (兄弟フランチェスコよ、汝と自分との宗教團體が一つになつて、教會内の一團結となることを切望する)と。しかしわが「小さき兄弟」は、依然として在來のまゝならんことを欲して、この申出を拒絶した。この後三年を經ないうちに、時代と教會との要求を眞に感じて、ドメニコは不可抗の感化により、聖アウグスティヌスの法規に從ふ彼の教團を、托鉢修道僧の一教團に變ずることになり、その憲法はフランチェスコ派のそれに則られてあつた。

數年後ドメニコ派は、謂はゞその復讐として、「小さき兄弟達」をして、知識をその活動の大切なる部分とならしめるやうにした。かくて未だ壯年時代に達するか達しない間に、これら二個の宗教的一族等は、互ひに競爭し、感化し、相互に影響をあたへ、しかも決して彼等の起原のすべての特

徴を失ふことなく、――一言にして云へば、一は清貧と平信徒の傳道とを特徴とし、他は智識と僧侶の傳道とを特色としたのであつた。

---

1 ヱヲアの命令によつて禁錮せられ、一日獄外を散歩してゐたときに毆打されたが、そのためにつひに死するに至つた。

2 一二二四年頃に「小さき兄弟達」は集合するやうになり、巴里の城壁に近い、ヴァウヴェル(Vauvert) もしくはヴァルヴェル(Valvert. 現今のLuxembourg 公園)と呼ばれた地點に、一の廣大な僧院を建築した。一二三〇年に彼等は、サン・ヴェルマン・デ・プレ(Saint-Germain-des-Prés) のベネデット派から、巴里において數々の家屋を受けた。最後に St. Louis は、彼等を有名な Cordeliers(帶繩派、フランチェスコ派のこと)の Convento (僧院) に入らしめた。その食堂はいま尙ほ存在して、Dupuytren Museum となつてゐる。一二一七年の九月十二日に巴里に到着したドメニコ派は、直ちに市の中心に赴き、イル・ド・ラ・シテ(Ile de la Cité) にある監査の宮殿近くに居を占め、一二一八年の八月十六日にサン・ヂャック(St. Jacques の僧院に入れられてあつた。

3 「小さき花」の第二十七章。

4 フランチェスコが此處を訪問した痕跡が數々ある。ヱゥデス(Eudes) といふ一兄弟が、此處でフランチェスコの肖像を描いた。

第十三章　聖ドメニコと聖フランチェスコ

埃及傳道。一二一八年の夏――一二二〇年の秋

藝術と詩とが、善くも聖ドメニコと聖フランチェスコとを聯結して、分離することをしなかつた。前者の榮光は後者のそれの反映に過ぎない。そして私達がわが Poverello（貧しき人）の天禀を、最も善く理解することは、彼等を相駢べて置くことに存するのである。フランチェスコが靈感（インスピレーション）の人であるならば、ドメニコは命令に對する服從の人である。彼の生涯は羅馬への道路のうへに、過ごされたと云つてもいいくらゐであつた。彼は絶えず指導を乞ひに其處へ赴いた。この故に彼の物語は、何ものもその自由に花吹くのを妨げはしなかつたが、形成せらるゝことが、如何にも遲かつたのである。そして彼を記念せんとするグレゴリウス九世の熱心も、また彼の弟子達の學識も、もつて人民の愛がわが「貧者の父」（フランチェスコ）に對して爲したことを、「異端者の鐵槌」（ドメニコ）に對して爲すことができなかつた。彼の物語には二つの缺點がある、すなはち問題が教會によつて禮拜するやうに命ぜられた或る聖徒である場合に、必ず聖徒傳の讀者をして直ちに倦怠に陷らしめるところのもの此である。[1] それはまた僞造の超自然力と、夙き時代の傳說から

左右に借用した出來事とに、背負はされてある。フランチェスコのうちに、彼等のすべての希望の天使を發見して、これを歡呼し、また彼の聖物を然く貪望した伊太利亞人が、說教托鉢僧教團の創設者の遺骸を尊重しようとは餘り考へなかつた。そして彼をしで聖列加入に對して、十二年間待たしたのであつた。[2]

僧正（カルディナレ）ウゴリニがこの二教團を結合しようと努力したこと、および斯くする理由を有してゐたことを私達は既に見た。さて彼は、ボルティウンクラに集合せる、聖靈降臨日の僧大會に赴いた（一二一八年六月三日）。これに聖ドメニコもその弟子達の數人を伴ふて出席した。諸の儀式の方式は、一二一六年以來、常に殆んど同一であつたやうに見える。「小さき兄弟達（フラティ・ミノリ）」は列をなして僧正（カルディナレ）を迎へに行つた。僧正（カルディナレ）は直ちに馬から下りて、愛情の表白を彼等の上に振り蒔いた。一つの祭壇が戶外に設けられ、そのうへにおいて彼は彌撒（ミサ）を稱（ミな）へ、フランチェスコは補（ディアコノ）祭の務を果たしたのであつた。

ウムブリアの風景の美しい背景のうちに、五旬節禮拜（ペンテコーステ）式のこの部分が響き出でたとき、臨席せる人々を壓倒し去つた情感の、如何なるものであつたかを想像するは、容易なことである。すなはち加特力教の全禮拜式のうち、最も興奮的で、最も默示錄的な聖歌、Alleluia, Alleluia, Emitte Spiritum tuum et creabuntur, et renovabis faciem terrae.（ハレルヤ、ハレルヤ、汝の靈（みたま）を注ぎ出だせ

よ、さらば萬物は創造せられん、且つ地の面を新しくなし給はん)。Alleluia（ハレルヤ)、これフランチェスコ派の夢の全體を、包含するものではないか。

しかし格別ドメニコを愕かしたことは、物質的配慮の皆無と云ふことであつた。フランチェスコ派は食物や飲物について一切心配しないやうに、彼の弟子達に勸告した。彼は經驗によつて、彼等が恐れなく隣人達の愛に、斯かることはすべて信頼していいことを知つてゐた。この憂慮の皆無といふことが、甚たくドメニコを驚かして、彼はそれが誇張せられてあると考へた。しかし食事時が來たときに、彼はそれを確かめることができた。すなはちその地方の住民が群をなして急ぎ集まり、數千人の托鉢僧達に對して要するよりも、遙かに多い食糧品をもつて來て、そして彼等に給仕するのを名譽とするのを見た。

フランチェスコ派の人々の喜悅、彼等に對する人民の同情、ボルティウンクラの小屋の貧困さ、すべてこれらのことが彼を深く印象した。それによつて彼が感動せしめられたことは極めて大なるものであつて、感激の極彼は福音的清貧を抱擁せんとの彼の決心を、宣言するに至つたのであつた。[3]

ウゴリニもまた感動し、涙をさへ流したが、しかし彼の昔の心配を忘れはしなかつた。教團は不平家の一群を含有せざるべく、餘りに多數となつた。改心前大學に學んだ若干の托鉢僧達は、彼等

のうへに義務として負はされた極端な單純を非難し始めた。熱心によつてもはや支へられざる人々にとつては、「規範」の短い戒律は、廣い社會に對するには、餘りに不充分な憲章のやうに見えたのである。彼等は羨望の心をもつてペネデット派や、正式の僧員達や、シトー派の記念物的僧院、または古代の修道的團體の方へ思ひを向けた。彼等は何の困難もなしにウゴリニにおいて有力なる同盟者を認め、また彼に彼等の意見を打ち開けた。

ウゴリニは好機會が到來したと考へて、フランチェスコとの私交的會話のうちに、若干の暗示をあたへた。かれは彼の弟子達殊にその中でも教育ある人々に、更におほくの責任を分かちあたふべき筈でなからうか。彼等と協議し、彼等の意見から靈感を受くべきでなからうか。他の古い多くの教團の經驗を、利用すべき餘地がないであらうか。すべてこれらのことが夫となく、また出來るかぎりの巧妙さをもつて語られてあつたが、フランチェスコは夙くも傷づけられたのを感じて、何の返答もせず、僧正を僧會の眞中に引き出すのであつた。

「わが兄弟達」と彼は火のやうになつて云つた、「主が自分を單純と謙讓との途に召されたのである。これらのものによつて彼は、自分と自分を信じて從ふ人々とに對する眞理を、自分に示された。ゆゑに來たつて聖ペネデットや、聖アウグスティヌスや、聖ベルナルドや、その他何人の「規範」についても、自分に語ることを廢め、たゞ神がその慈悲のうちに、自分に示すを善しと認められた

こと、またこの手段により、世と新しい契約を結ばうとしたまふことを、自分に告げられたこと、およびわたし達が他のいかなる方法を採ることをも、彼が欲したまはぬこと、只これらのことのみを語れよ、しかし汝等の學識と、汝等の智慧とは、汝等を困惑せしめるであらう。蓋し神が汝等を懲しめたまふことを自分は確信する。汝の欲すると否とに關らず、汝等は必ず改悔するやうになり、そして汝等に對しては困惑のほか、何ものも殘らぬであらう」。

彼の想念を辯護し確言するこの熱心が、ウゴリニを深く驚かし、彼をして一言も加へることを得ざらしめた。ドメニコにとつては、彼がボルティウンクラにおいて見たこのことが、一の啓示となつたのであつた。實際彼は敎會に對する彼の熱誠が、もはや增し得ざることを感じてゐたが、しかし同時に彼は、武器に若干の變化を加へることにより、一層の成功をもつて、彼女(敎會)に奉仕し得ることを認めた。

ウゴリニは疑ひもなく進んで、かゝる意見を有する彼を激勵した。そしてドメニコは新しい希望に促されて、數箇月の後、西班牙へ向け出發した。彼が經過した危機の重要さが、充分注意されなかつた。宗敎上の著者達は詳かに、セゴヴィア (Segovia) の巖窟における、彼の滯在の模樣を述べてゐるが、しかし彼等はたゞ遁世的修業や、祈禱や、跪拜などを認めるだけであつて、すべてこれらのことの原因を、探索することをしてゐない。この時期以後彼は、絶えずフランチェスコの

模倣に、專らになつたと云つていいのである。(もし斯かる言葉が、幾分なりとも不快な意味をもつてゐないとせば)。セゴヰアに到着するや、彼は「小さき兄弟達」の模範に從ひ、都市の外れに、一つの僧院を創設した。そして其處から始終彼は降つて來て、人民に說敎した。彼の生活樣式の變化が甚だ顯著であつたので、彼の伴侶者達の幾人かゞ謀叛をし、この新しい途において彼に從ふことを、拒んだほどであつた。

一般人民の感情は往々にして、直觀力をもつてゐる。セゴヰアのこの洞窟の周圍に關はる一の傳說が生じて、聖ドメニコは其處で聖痕を受けたと云はれた。シエラ・ダ・グァデラマ (Sierra da Guadarrama) のこの巖窟内に實際起こつたことを、萬人の理解し得る範圍において、一の形象に翻案せんとする無意識的努力が、玆にあるのではないか。

かく聖ドメニコもまた福音的淸貧に到達したが、しかし彼がそれに達した道は、聖フランチェスコの辿つたよりそれは、確かに異なれるものであつた。後者は恰も翼によつてのごとく、それに上り、その中に、この人生を下劣なものたらしめる、すべての配慮からの窮極的解放を見出だした間に、聖ドメニコはそれをたゞ一の手段と觀じたのであつた。彼にとつてはそれは、敎會の防禦に任ぜられた軍勢の武庫における、增加せられたる一の武器に過ぎなかつた。勿論わたし達はこれを單に、卑劣な畫策であるとは考へてはならない。かく彼が模倣しかく遠くまで從ふことをしたフラン

チェスコに對する彼の嘆美は、眞摯であり、眞劍であつた。しかし天才は模寫せらるべきものでない。この聖き疾病（淸貧の貪望）は、彼のものではなかつた。彼は彼の子等に、健全にして强壯な血液を傳達した。そのために彼等は、激烈な熱病のごとき發作や、高き飛躍や、突然な歸還などについては、少しも關知するところがなかつた。これらはフランチェスコ派の歷史をして、世界が嘗て知れる最も颶風激動的社會の物語たらしめるものであつて、その中には赫々たる頁（ページ）が、瑣々たる怪奇な、時には實に粗野な頁をもつて混合してゐる。

一二一八年の僧會においてフランチェスコは、一群の不平家の囁（つぶや）きのほかに、悲哀の原因となつたものを認めたのであつた。その前年獨逸および匈牙利へ派遣した宣敎者達は、全然失望落膽して歸つて來た。彼等が受けた苦難の報告は、極めて大なる感銘をあたへて、爾後おほくの托鉢僧達は、かれらの祈禱に一條項を附加するに至つた、「主よ我等をロムバルディア人の異端、および獨逸人の獰猛より護りたまへ」と。

これ如何にしてウゴリニが、托鉢僧をこの上異端者として獵り立てらるゝことなからしめんがために、必要なる手段を採る責任のあることを、遂にフランチェスコに納得せしむるに至つた事情を說明するものである。その次ぎの僧會において宣敎者達は、彼等に敎會的旅行券として役立つ、法王の書翰をもつて武裝せらるべしといふことが決定された。その文書の翻譯がこゝにある。

神の僕中の僕なる監督オノリウス、大監督、監督、僧院長、補祭、大補祭、その他敎會の長老達に挨拶し、使徒的祝福を贈る。

わが愛する子聖フランチェスコ、および彼の生活の伴侶者達と「小さき兄弟達（フラティ・ミノリ）」の敎團とは、この世の虛榮を棄てゝ、羅馬敎會の准允に價ひした生活樣式を撰び、使徒達の模範に從つて到る處に神の言葉の種を播かんがために出で行かんとす。われこの使徒的書翰によりて汝等に祈り且つ勸む、この薦書の携帶者なる上記の團體の托鉢僧達を、善良なる加特力（カトリック）敎徒として受け容れんことを。また彼等を愛好し、神の榮光と、われに對する好意とのゆゑに、親切に待遇せんことを汝等に警告す。

わが法王在位期の第三年六月中日（イドウス）の第三日（一二一九年六月十一日）、リエーティにおいて。

この法王令が、フランチェスコの疑念を起こさないやうに、考慮されてあつたことは明白である。それが通常新敎團にあたへられた最初の書翰とは、いかに異なれるかを精確に理解せんがために、それを彼等と比較する必要がある。ドメニコ派を確立せしめたものは、他のものと同じく、一の確實な特典であつた。しかし茲には何等斯くのごとき種類のものがない。

一二一九年の聖靈降臨日（五月二十六日）に開かれた會合は、特に重要なものであつた。それはフランチェスコの靈感と、幻想とが自由に活躍した原始時代の、僧會の連續（シリーズ）を終結せしめたものである。それ以後のものは、代理者（ヰカーリオ）によつて司られて、もはや同一の活氣も、同一な快味も失つてしまつた。白晝の生々（なま〳〵）しい灼光が、曉の色と、その醒（さめ）めにおける、自然の云ひがたき生氣とを、迫ひ拂

つてしまつた。

一二一九年の夏は、オノリウス三世が東方において新努力をなし、十字軍の全勢力を埃及に向けたことによつて一時期を劃する。フランチェスコは彼が一二一二年に遂行し得なかつた企圖を、いま實現する時が到來したと考へた。甚だ奇妙なことには、二年前の佛蘭西行を妨げたウゴリエが、この度は全く彼の新遠征を遂行するまゝにさせたのであつた。數人の著者達はフランチェスコが、彼において眞の保護者を見出だし、竊かに教團の將來に關して安心したと考へた。まことに彼は斯く考へたかも知れないが、しかし彼の出發後直ちに突發した騷動の歴史、すなはち彼の不在の機會に乘じて、その教團を危殆に瀕せしめようとした干渉者達を、羅馬法王廳が歡待したといふ愕くべき物語は、いかに教會がフランチェスコのために困惑し、また何たる熱心をもつて彼女が、彼の事業を變化せしめようと欲してゐたかを、示すに充分であらう。これらの事件の詳細な記述については、わたし達は後ほど見るであらう。

ロマニアの一兄弟クリストフォロなるものが、この僧會においてグァスコニァ（Gnasoogna）の州長に任命された。かれは初代のフランチェスコ派の人々の風習に從つて、其處生活し、手づから働き、樹の枝と陶器師の土とで造られた狹隘な僧房のうちに住んでゐた。

エヂディオは數人の托鉢僧を伴ふて、チュニスへ向け出發したが、大なる落膽がそこに彼等を待つ

てゐた。この土地の基督教徒は、かれらの宣教的熱情に捲き込まれんことを恐れて、彼等を端艇に追ひ入れ、再び海を横切つて歸らしたのであつた。

よし一二一九年と云ふ日附が、これらの二つの傳道に對して、憶測以上の根據をあたへないにしても、西班牙およびモロッコへ派遣せられて赴いた托鉢僧達の運命は、同樣なものではなかつた。彼等の最後の說教とその死とに關して、目擊者が書いた記錄が、近頃發見せられた。[5] この文書はリスボンのマルコによつて傳へられた更に長い記錄の大體と一致してゐるので、一層貴重なものである。それは聖フランチェスコの生涯に對して、極めて些少な、間接的な關係しか有してゐないので、こゝにその概要を述べる必要がないと思ふが、しかしこれらの acta（牌傳）が、その歴史的價値以上に眞に著しい心理學的——殆んど病理學的ともいふべき——意義をもつてゐることを、わたし達は注意せねばならぬ。これらの數多き頁にあるに優つて善く、殉教に對する狂熱を書き表したものは他に決してない。その中にわたし達は托鉢僧達が、マホメット教徒をして彼等を追跡し、遂に彼等に天上の棕梠を獲得せしめるのを見る。ミラモリン（Miramolin）並びに彼の同僚宗教家達が、第一に示した耐忍は、これらの不信者等の文明と、優れた資質とに關する觀念をあたへ、就中大いに異なれる感情が、トロザ（Tolosa）平原の被征服者には、自然なものであつたことを示してゐる。

改心せしめようと欲した人々に對して、これらの宣教者達が語つた粗野な頓呼を、說教といふ名

をもつて呼ぶことは不可能である。その激發するや、殉教に對する渴望は、遂に狂的となつて自殺に導く。しかしこれ托鉢僧ベルナルド、ヒエトゥロ、アッヂユトゥ、アックルソ、およびオトーが、爾來彼等の周圍に注がれてあつた嘆美と崇拜とに對して、それを受くる權利をもたないといふことになるのであらうか、何人が敢て斯く云ふであらうぞ。敬虔は常に盲目ではないか。畦溝をして豐穰ならしめんがためには、血を要し涙を要するのである——聖アウグスティヌスが靈魂の血と呼んだ斯かる涙を。あゝ一身を犧牲に供するは大なる誤謬なるかな、蓋し一人の血が善く世界或ひは一國民すらを救ひ得ないからである。しかし一身を犧牲に供さないことは更に大なる誤謬なるかな。蓋しその時には他の人々を亡滅に赴かしめ、而してすべてのものゝうち、最先に自らを喪ふからである。

この故に自分は汝等モロッコの殉教者達に敬意を表する。なんぢらが汝等の狂亂を遺憾としないことを、自分は確信する。そして若しか樂園の林の中を逍遙する、或る義しい衒學者が、宜しく汝等が祖國にとゞまつて、有德な勞働者達の尊い家族を造つた方が好かつたと、汝等に論證するやうなことでもあれば、ミラモリンがその時、汝等の最善の友となつて、彼を論駁するの勞を採るであらうと自分は想像する。

汝等は狂氣してゐた。しかし自分は斯かる狂氣を羨望する。蓋し汝等はこの世界における本質的

なものといふのは、この理想かの理想に奉仕することではなくて、たゞその選擇した理想に、全靈魂を傾到して奉仕することであるのを、感知してゐたからである。

數箇月の後、彼等の赫々たる終焉の報知がアッシジに到着したとき、フランチェスコは彼の伴侶者達のあひだに、誇りの感情のあるのを認め、鋭い言葉をもつて彼等を叱責した。殉教者達の運命を甚く羨んでゐた彼は、神が彼をもそれに預かるに足るものとし給はなかつたがゆゑに、みづからの卑しさを感ずるのであつた。この物語が教團の創立者（フランチェスコ）に對する讃語と混交せられてあつたので、彼は以後それを讀むことを禁止してしまつた。

僧會後直ちに彼はみづかち、モロッコの兄弟達に委ねたものと同じ種類の傳道を思ひ立つた。然しそれを遂行するに當たつて、彼は全然異なれる方法を採つた。彼の宣教は一種の熱情に燃えて死を迎へ、他のことは一切忘れてしまふ盲目的熱誠ではなかつた。おそらく彼は既に善に對する執拗な努力、眞理に對する不斷の自己犧牲が、强者の殉教であることを感知してゐたであらう。

一年以上繼續したこの遠征は、傳記者達により數行しか記載されてない。[6] 幸ひにそれに關する他の數多の書籍をわたし達はもつてゐるが、しかし彼等の沈默は、原始フランチェスコ派の著者達の、眞摯を證明するに足るのである。もし彼等にして彼等の題目とせるその事業のことを、誇大しようと欲したとすれば、何處にこれに優つて好都合な機會、また一層强く人を驚愕せしむるに足る事項

があつたであらうか。フランチェスコは六月の中頃にボルティウンクラを去つて、アンコナに赴いた。其處から十字軍は聖ヨハネの日（六月二十四日）に埃及へ向け、出帆したのであつた。

多數の托鉢僧が彼に加はつた。——海路の旅には少からぬ不便があつた。すなはち彼等は船主、または同行者の厚意に依らねばならなかつたのである。

アンコナに到着して、彼とともに赴かんことを甚ど熱心に望んでゐた人々の多數を、置いて行かねばならぬことを識つたとき、フランチェスコの困惑はどんなであつたかを、わたし達は理解し得る。「妥協派」は茲に一の出來事を述べてゐる。それについては今少し夙い典據を欲しく思ふが、しかし確かにそれはフランチェスコに似つかはしいものである。彼はすべての友人達を港に導いて行つて、彼等に彼の困惑を説明した。彼は彼等に告げた「船中の人々はわたし達すべてを伴ふことを拒む。そして自分には汝等を撰擇する勇氣がない。これ自分が汝等を、一樣に愛してゐないと考へられるかも知れぬからである。ゆゑにわたし達をして神の御旨を知らしめよ」と。かくて彼は近くに遊んでゐた一人の子供を呼んだ。すると小さき者は、喜んで彼の上に置かれた「攝理」の働きを果たし、出帆すべき十一人の托鉢僧を指摘した。

以後かれらの行程は如何なるものであつたか、わたし達は知らない。たゞこの旅行中、一つの事件が、わたし達に傳へられてある。すなはちわが師が何ごとよりも厭ふてゐた罪惡——惡口を敢てした兄弟バルバロに、クブロ島において懲戒を加へたと云ふことである。彼は敬虔なる人々のあひだに盛んに行はれ、そして外見上いかにも平和な宗教上の家々をして、しばしば地獄とならしめたところの、言語の不謹愼といふことに、堪へ得ざるものであつた。この罪がこのときひとりの見識らぬ人、すなはちその地方の一勳爵士の前で發せられたので、彼には一層重大なものゝやうに思はれた。フランチェスコがこの犯罪者に、其處にあつた驢馬の糞尿の堆積を食へと命じたのを聞いて、勳爵士は愕いてしまつた。フランチェスコは附け加へた「わが兄弟に對して憎惡の毒液を注いだ口は、この拆泄物を食はねばならぬ」と。斯くのごとき憤怒が、不幸な罪人を服從せしめたと同時に、勳爵士を驚嘆に溢れしめたのであつた。[7]

ワッディンク（Wadding）が想像したやうに、宣教者達が、聖ジュアン・ダクル（St. Jean d' Acre）に下船したことは眞實であるらしくある。彼等は其處に七月の半前後に到着した。[8] 疑ひもなく都市の附近に、一、二年間エリアが定住してゐた。其處でフランチェスコは、彼の伴侶者達の中の幾人かに訣別し、彼等を遣はして四方に傳道せしめた。それより數日後、彼みづから埃及へ向け出發した。埃及にては十字軍の全努力が、ダミエッタ（Damietta）に集注せられてあつた。

初發からして彼は、基督徒教軍の道德狀態について、心を傷めしめられたのであつた。無數の主教と法王の使節とがゐたに關らず、訓練の缺乏せるために、それは紊亂を極めてゐた。このことに彼

は非常に心打たれて、戰爭の噂ある毎に、彼はそれに反對すべきが彼の義務であるやうに感じ、甚督敎徒は誤りなく敗北するであらうと豫言してゐた。しかし何人も彼に注意するものなく、かくて八月二十九日に十字軍は、サラセン人に襲擊せられて、怕ろしいほど逐ひ倦くられた。

かれの豫言は彼に驚愕すべき成功を齎らした。他の處よりもこの地面が、新しい種を受けるために善く準備せられてあつたことを認めねばならぬ。確かに其處に潑溂たる敬虔の念があつたといふのではない。この歐羅巴のすべての隅々から集まつて來た群衆のうちには、困める者、先見者、識者、正義と眞理とに渴望する人々が、無賴漢、冒險家、その他黃金と掠奪とに貪婪なもの等に窘められてゐた。彼等は善にも强ければ惡にも强く、向くまゝの衝動に玩弄せられ、家族、財產、また常に人の意志に絡み付いてゐて、人間の生活狀態に、根本的な變化を齎らすことが稀であると云つていい、その習慣からも弛められてあつた。彼等のうちにあつて眞摯であり、また氣高い目的を抱いて其處に來た人々は、謂はゞ「小さき兄弟達」の平和の軍勢に入るべく豫定されてあつたのである。フランチェスコはこの傳道中に、後日北歐諸國における彼の事業の成功を援助するに至つた同勞者を獲得したのであつた。

ヂャック・ド・ヴィトゥリ（Jacques de Vitry）は、數日後友人達へ書き送つた書翰の中に、彼がフランチェスコから受けた印象をかく述べてゐる。

「聖ミカエルの僧院長レイニエ（Reynier）師が、「小さき兄弟達」の敎團に加入したことを汝等に通告する。これは原始敎會を模倣し、何ごとにおいても使徒達に從ふがゆゑに、到る處にあつて急激に增加しつゝある一敎團である。これらの兄弟達の長は、兄弟フランチェスコと名づけられる。彼は極めて溫厚で何人にも尊敬せられてある。わたし達の軍中に來たり、信仰に對する彼の熱誠により、わたし達の敵軍にさへ赴くことを、彼は恐れなかつた。連日彼はサラセン人に神の言葉を宣べ傳へたが、餘り成功しなかつた。そのとき埃及王スルタンは、神が或る奇蹟によつて最眞の宗敎を、彼に啓示せんことを、ひそかにフランチェスコに願つた。英吉利人であつて私達の僧なるコリン（Colin）が、この敎團に加入した。それと同時に、わたし達の伴侶者の二人、ミシエル（Michael）および自分が最に「サントゥ・シャペル」（Sainte Chapelle）の長としたドム・マッティウ（Dom Matthieu）も加入した。カントル（Cantor）とアンリ（Henri）も同樣に加はつた。その他名を忘れたが、まだあつた」。

上記の著者が。Occident（西方）に關する彼の偉大なる著述のうちに、「小さき兄弟達」に關して長い熱心な一章を割いてゐるが、餘りに冗漫なので玆に記載することができない。それはわが敎團に關はる生々した精確な繪畫である。その中にスルタンの前における、フランチェスコの說敎が、ふたたび述べられてある。それは托鉢僧達がまだ修道院をも、會堂をも有せず、また僧會が年に一回乃至二回開かれてあつた時代に、書かれたものであつた。これその年代が一二二三年より以前、恐らく一二二一年より以前であつたことを示す。斯くして玆にわたし達は、チェラノのトゥマゾおよび「三伴侶者」の記述の確實であるのを見、またこのうちに、その完全なる確證を發見するのである。

フランチェスコとスルタンとの會見に關しては、ジャック・ド・ヴトゥリとティルのキリアムとに從ふことが安全である。後者は比較的遲き日附（一二七五年乃至一二九五年）において書かれてはゐるが、眞に歴史的方法に從つて、信憑すべき文書に彼の著述の基礎を置いた。彼もジャック・ド・ヴトゥリもともに、かの基督教の優越を確立せんがために、フランチェスコが火を通過することを申し出で、マホメットの祭司達に斯かることができるかと云つたことを、知つてゐないのを私達は見る。

かく異能に訴へんとすることが、フランチェスコの特性に、いかに適しくないものであるかを、私達は知る。ボナヱントゥラが傳へるこの物語は、恐らく誤謬から生れたものであらう。それは兎に角として、聖フランチェスコと彼の伴侶者達とは、極めて鄭重な待遇を受けたのであつて、この一事は、當時敵愾心がその絶頂に達してゐた際であつたので、一際顯著なものとなるのである。

十字軍の陣營に歸つて彼等は、ダミエッタの占領まで（一二一九年の十一月五日）其處に止まつてゐた。この度は基督教徒が勝利を得たのであつたが、しかし恐らくわが「福音の人」の心情は、八月二十九日の敗北よりもこの勝利において、一層おほく傷つけられてあつたであらう。戰捷者達が屍骸のうづ高く堆積せらるゝのを見たこの町の狀態、分捕品の分配に關する喧嘩、疫病に屈服せずに殘つた憐むべき人間どもの賣買、すべてこれらの恐怖、殘虐、貪婪の光景は、彼をして深い深い畏懼に陷らしめたのである。「人なる野獸」が放たれた。わが使徒の聲も、この野蠻な喧噪の眞中に

あつては、彼等の耳に通らざること、怒れる大洋のうへの、救助船に異ならなかつたのである。

彼はシリアと聖地とに向かつて出立した。思想において彼に伴なひ、ユダヤ、ガリラヤ、ベツレヘムを經廻り、ナザレに、ゲツセマネに到るこの巡禮旅行を追ふは、如何に愉快なることであるかよ。マリアの聖子が生れた厩、彼が働いた工場、彼が苦き杯を受けた橄欖樹、これらは彼に何を語つたであらうか。あゝ、忽然として文書がわたし達に告げて呉れない。包圍の後直ちにダミエッタを去つて（一二一九年の九月五日）、彼は容易に降誕節までにベツレヘムに行つたであらう。しかし私達は彼の滯在が、豫期せられてあつたよりも、長びいたことのほかは、何ごとも絶對に知らないのである。

一二二〇年（五月十五日の聖靈降臨日）の僧大會のため、ボルティウンクラにゐた兄弟達の幾人かと、シリアに行く充分なときをもつてをり、そして尙ほ其處にフランチェスコのゐたのを發見した。彼等は六月の終はりの餘程まへに、到着したとは云ひ得ない。その八箇月間に彼は何を做してゐたのか。何ゆゑに僧會を司るために、彼は故國に赴かなかつたのか。彼は病氣であつたのか。或ひは傳道のために遲れてしまつたのか。わたし達の有つてゐる材料は、憶測を敢てするさへ、餘りに少ないのである。

アンヂェロ・クラレノ（Angele Clareno）は埃及のスルタンが彼の說教に感動して、彼および彼の

すべての托鉢僧達に、何等の税を拂ふことなしに、自由に聖墓に接近し得る命令を發したことを述べてゐる。

ピザのバルトロムメオは、フランチェスコがアンティオケとその周圍とに傳道しに行つたとき、その都市から八哩なる、「黒き山」の僧院のベネデット派が、一團となつて彼の教團に加はり、彼等の全財産を擧げて、この「教父」に献げたと偶然云つてゐる。

これらの記事は確かに薄弱で孤立的であつて、殊に第二のものゝごときは、受け容るゝに躊躇せねばならない。これに反してフランチェスコの不在中、伊太利亞において做されたことについては、詳しい報告をわたし達はもつてゐる。近頃發見せられたヂオルダノの年代記は、フランチェスコがボルティウンクラにおける自分の代理者（ヰカーリオ）として任命したところの人によつて企てられたと云ふ、彼に對する隱謀の件について、わたし達が知らんことを願ふすべての光明を、あたへるものである。そしてこれには、よし羅馬および保護者であつた僧正（カルディナーレ）との密約がなかつたとしても、少くとも彼等は反對しなかつたことが分かる。これらの出來事は確實にアンヂェロ・クラレノによつて記述されてはゐるが、しかし彼の著述全體を通じて呼吸する露骨な感情と、精確の缺乏とが、注意深き批評家をしてそれに對し、疑惑に置かしめるに充分である。聖フランチェスコの未だ生きてゐたときに、彼の任命した代理者達が、彼の不在に乘じて彼の事業を轉覆せんとしたとは、どうして想像し得られや

う。このときリエティに滯在してゐた法王や、それよりも尙ほ近くにゐたウゴリニが、これらの婦勳家を鎭壓しなかつたといふことは、如何して有り得ようか。

しかしすべての事實が、辯論的激情的ではなく、簡明、精確、直截で、日附のある記錄により、また日に日に出現する註解によつて、すべての事實が新しい光明に置かれるがゆゑに、わたし達は是非とも證據の前には屈せねばならぬ。

斯くいふはウゴリニと法王とを、嚴（かきびす）しく批難するといふことであらうか。自分はさうとは考へない。或るほど彼等は彼等の名譽にならぬ役割を演じはしたが、その意向は明白に優れたものであつた。目的は手段を義しくするといふ有名な格言が、自分自身の行爲を判ずる場合には不正であるとしても、他人の行爲を批判するときには、第一の義務となるべきである。玆にそれらの事實を述べよう——

フランチェスコがシリアへ向け出發した約一箇月後の、七月二十五日に、ペルヂアにゐたウゴリニはMonticelli（フィレンツェ）、シエナ（Siena）、ペルヂヤ（Perugia）およびルッカ（Lucca）のキアーラ派に、彼の友人（フランチェスコ）が極力托鉢僧のために拒んだところの、ベネデット派の「規範」を課したのであつた。

丁度そのとき、聖ドメニコがセゴビアの洞窟の隧道を了（を）へ、新しい熱心に充ちて西班牙から歸

つて來たり、彼の教團に清貧の規範を採用しようと、斷然決心したのであつたが、この目的に對して彼は力强い奬勵を受け、愛顧に壓倒せられんばかりであつた。オノリウス三世は彼のうちに、當時に對する攝理の人、すなはち修道教團の改革者を發見した。彼のドメニコに對して示した好意は一方ならぬものであつて、一例を擧ぐれば、他の諸教團に屬する修道僧達の一群を彼に交付し、彼等をして傳道旅行中、ドメニコの補助者として働くように、命ずることをさへした。この傳道旅行は彼の做すべき使命であると、オノリウスの信じてゐたものであつて、彼等をして彼の指揮のもとに、平民傳道の徒弟時代として、役へさせようと考へたのである。

すべてこれらの事柄の鼓吹者が、ウゴリニであつたといふことは、こゝに法王令が證明してゐる。當時彼の主要な目的が、この新しい二教團の指導に存してゐたことは、極めて明白であつて、これを果たさんがために定住地を撰び、絶えず彼はペルヂア——すなはちボルティウンクラから三リーグ以内のところ——か或ひはドメニコ派の堡塞であつたボロニアにゐたのであつた。

フランチェスコによつて設定された兄弟團が、眞に彼の身體の果であり、彼の肉の肉であつたのと恰度對應して、この傳道托鉢僧の教團は、法王から出て來たものであつて、聖ドメニコは只その外面上の父に過ぎなかつたのである。この事情は同時代の年代記者中最上の權威たる、ウルスペルグ(Urspeng)のブルカルド(Burchard. 一二二六年死)の一言によつて表されてゐる。彼はいふ「法王は

托鉢僧の教團を制定し(instituit)且つ認可せり」と。[9]

東方への旅行にフランチェスコは、わたし達が未だ出遇はなかつたピエトロ・ディ・カタナ(Pietro di Catana)、或ひはデイ・カッタニ(dei Cattani)と稱する一人の托鉢僧を、特別な伴侶者として連て行つた。彼はカタナ(Catana)の町の生れであつたのか、それに對する何等精確な記事がない。彼は寧ろ貴族カッタニ家(dei Cattani)に屬したものであつたやうに思はれる。フランチェスコが既に識りあつてゐたもので、彼にヴェルナをあたへたところの、カゼンティノ(Casentino)におけるキウジ(Chiusi)の伯爵オルランド(Orlando)は、この一族に屬するものであつた。それは兎に角わたし達は彼を、クキンタヴァロ(Quintavallo)のベルナルド(Bernardo)と同時に、一二〇九年に衣鉢を受けて、その後間もなく死んだ兄弟ピエトロ(Pietro)と混同してはならぬ。これら二人を一人物にするに至つた傳說は、單に名の同一であつたためのみでなく、一二二〇年より一二二一年に亙つて、教團指導に主要な役割を演ずるようになつた彼の、權勢を增大ならしめんとする、極めて自然な願望によつて起こつたのである。

東方に向け出發するに當たりフランチェスコは、彼の代理者として二人の兄弟達、ナルニ(Nerni)のマッテオ(Matteo)とナポリのグレゴリオ(Gregorio)とを殘して行つた。前者は特にボルティウンクラにとゞまつて、志願者の入團を委任されてあつた。他方ナポリのグレゴリオは、伊太利亞を

遍歴して、兄弟達を慰問すべきものであつた。

この二人の代理者は急に、萬事を轉覆し始めた。自由を恣にし得るにも關らず、みづから進んで遵守せんことを誓つた「規範」に對する、最初の熱誠の感化を、依然として受けてゐた人々が、いかにして斯かる變改を、夢にも考へることができたのか、もし高位にある人々に煽動せられ、且つ後援せられなかつたとすれば、到底説明し得べからざる事柄である。清貧(ポエルタ)の誓約を弛緩し、戒律を坩加すること、これ彼等の努力が傾注された二點であつた。

外面上においてはこれは、些々たる事柄であつたが、實質上においては重大事であつた。蓋しそれは新精神に對する舊精神の、最初の運動であつたからである。それは聖フランチェスコのごとく宗教の中に、かのあらゆる事物においてわたし達の束縛を解き、おの〳〵の靈魂を導いて、野の花の稱(たた)へまつる神の、神秘な力に服從せしめ、諸の星の交響樂(シムフォニーア)が讃美し、空の鳥が祀禰し、そしてナザレのイエスが、「アッバ」(Abba) 換言すれば「父」と呼びたまふたところの、自由の勝利を見るかはりに、無意識ではあるがそれを、自分は敢ていふ、たゞ儀式と戒律との事柄とする人々の努力であつたのである。

最初の「規範」は斷食のことについては、極端に單純であつた。托鉢僧達は水曜日と金曜日とに、食を斷つべきであつた。時には月曜日と土曜日とを加へることもあつたが、それはフランチェスコ

の特別な許可を要したのであつた。代理者達とその歸依者達とが、この規範を驚くべきほどに複雜なものにした。フランチェスコの留守中に開かれた僧會において(一二二〇年五月十七日)、かれらは第一に祝祭のときに、托鉢僧達の肉を備ふべからざること、しかし圖らずも肉が彼等に供せらるゝ場合には、食しても差し支へなきこと。第二に、すべてのものが水曜日と金曜日とのごとく、月曜日にも斷食すべきこと。第三に、偶然教團の歸依者が持つて來たものでない限り、月曜日と土曜日とには、牛乳で造つたものを斷つべきことを決議した。

斯かることを始めたのは、古代の教團を模倣し、あはよくば其等に取つて變はらんとする、驕げな希望をそれとなく抱いてゐる、一の努力であつたことを證明してゐる。兄弟ヂオルダノは一二二〇年の僧會の、たゞこの決議だけしかを私達に傳へてゐないが、しかし彼の用ゐた口吻は決してたゞこれのみでなかつたこと、並びにシトオ(Citeaux)とモンテ・カッシノ(Monte Cassino)の僧會におけるがごとく、不平家達の確乎たる憲法を制定せんことを、望んでゐたのを充分證明してゐる。

「規範」のこれらの變更は、然しながら、僧會の一部分の義憤を惹き起こさずには濟まなかつた。一平信徒の兄弟が、彼等の急使となつて東方に向け出立し、フランチェスコに猶豫せず歸還して、逼迫せる傾勢を處理するやうに懇請した。

其處にまた擾亂の他の原因があつた。キアーラ派の奉仕者の一人なる兄弟フィリッポは、急いでウゴリニのもとに赴き、既に熟議されてあつた特典を、獲得しようと欲した。

ヂオヴンニ・ディ・コンペッロ（Giovanni di Conpello）といふ一人の兄弟は、男女の癩病人の多數を集めて「規範」を認め、かれらを一の新しい教團に組織しようと企てた。後彼は認可を得んがために、これら不幸者の一行列を率ゐて、至高の法王の前にみづからを現した。

兄弟ヂオルダノは述べてゐないが、他のおほくの悲しむべき徴候が既に姿を顯してゐた。フランチェスコが死んだといふ報知すら流布されて、ために全教團は擾亂し、分離し、極めて危險な狀態に陷つた。フランチェスコが感じてゐた暗黑な想像は、現實によつて追ひ越されてあつた。悲しき音を齎らした使者は、シリアの多分サン・ジュアン・ダクルにおいて彼に遇つたらしくある。彼は直ちにエリア、ピエトゥロ・ディ・カタナ、スペアのチュザレ、その他の數人を伴ふて乘船し、エネッィア行の船にて伊太利亞に歸つた。彼がエネッィアへ七月の終はり頃には、確かに到着したであらう。

1　羅馬が聖列に加入するまで、ドメニコが長く忘却されてゐたといふ一の證據を與へるのは、ジャック・ドゥ・ヴィトゥリ（Jacque de Vitry）である。彼は彼の Historia Qeeidentalis（西洋歴史）の全一章を、説教托鉢僧達のために献げてゐながら、その創設者の名をさへ擧げてゐない。更にこの一事を顯著ならしめてゐるのは、數頁進んで「小さき兄弟達」の章に至れば、殆

んどその全部を聖フランチェスコの人格で、充たしてゐることである。

2　一二二六年に死んだフランチェスコは、一二二八年に聖列に加入せられ、一二三一年に死んだパドゥアのアントニオは一二三三年に、一二三一年に死んだトゥリンヂア（Thuringia のエリザベッタは一二三五年に、一二二一年に死んだドメニコは一二三四年に、おの〳〵聖列に加入せられた。

3　聖ドメニコの歴史家達は、この前後の事情を喜んで受け容れなかつたが、しかし公文書から來る爭ふべからざる論據は、ドメニコが一二一八年羅馬において、彼の教團の財産を確定する特典を獲得し、一二二〇年においては、彼の托鉢僧達をして清貧を誓約せしむるに至つたことを示してゐる。

4　彼は一二七二年の十月三十一日に、カオル（Cahors）において死んだ。

5　コットニアナ（Cottoniana）の寫本から寫して、M. Müller が出版した（Anfänge P. 207）。

6　「小さき花」第二十四章。

7　これは或ひは歸路に起こつた事件であるかも知れぬ。

8　當時この航海は二十日から三十日の日數を要した。

9　この句はオノリウス三世の教會政策を、數行のうちに概括するがゆゑに、極めて大切なものである。

第十四章　教團の危機

一二二〇年の秋

ゼネッィアに到着するやフランチェスコは、起こりし事件について一層精確に、親しく知ることができて、ミカエル節のため、ポルティウンクラに、僧大會を召集した（一二二〇年九月二十九日）。彼の第一の配慮は、疑ひもなく、聖ダミアノにおける彼の「姉妹なる友」（キアーラ）を確めることであつた。わたし達のために保存せられた一通の書翰の短い斷片は、彼の心を充たしてゐた悲しい憂慮の狀を示してゐる。

「自分、すなはち小さき兄弟フランチェスコは、わたし達のいと高き主なるイエス・クリスト、およびその聖母の生涯と清貧とに從ひ、終はりまでそれを耐ばんことを望む。そしてこの最も聖き生涯と清貧とを、常に耐ばんことを、汝等すべてに奬勵する。而して誰いかなる人の勸告、または教訓があるとも、必ずそれより離れざるやう大いに愼しめよ」。[1]

彼の歸還の報知が傳へられたとき、喜悅の長い歡呼が、全伊太利亞の上下に響いた。迫害が多くの州（プロヴィンチア）において始まつてゐたので、あまたの熱烈なる兄弟達は、既に絶望しかゝつてゐたのであつ

た。そこで彼等の心靈上の父が生きて歸り、彼等を訪れんために再び來たときに、彼等の喜悅は無限であつた。ゼネッィアからフランチェスコはボロニアに赴いた。この旅行は更に一たび彼の鋭敏で慧い親切を示す事件で著名になつた。情感と勞苦とで疲れ果てたので、彼は一日徒歩での旅行は、廢めねばならなくなつた。一疋の驢馬に誇がり、アッシジの兄弟レオナルドを從へて、彼の途を辿つてゐた。そのとき一瞥して彼は、彼の伴侶者の心の中に起こりつゝあつたことを看破した。「自分の親戚達は」と、この托鉢僧は考へつゝあつた、「ベルナルドネなどゝ交際するどころではなく、遙かに高貴な人々であるのに、こゝに自分は彼の息子に、徒歩で從はねばならぬのである」。

フランチェスコが急いで獸から下り、「こゝに汝の座を占めよ。高貴で權力ある血統の汝が、徒歩で自分に追いて來るのは極めて不似合である」といふのを聞いたときに、いかに彼が愕いたかを、わたし達は判ずることができる。工合の惡いレオナルドは甚しく困惑して、身をフランチェスコの足もとに投げ、宥恕を乞ふのであつた。

ボロニアに到着するかしないに、フランチェスコは背信者になつた人々を、處置せねばならなかつた。この教團が直接にもせよ間接にもせよ、何物をも所有しないといふ目的のうへに立つてゐたことが記憶されねばならぬ。托鉢僧達にあたへられた修道院は、彼等の財産にはならなかつた。所有者がそれを取り返さんことを欲するか、または他の何人かゞそれを所有せんことを願ふならば、直

ちに彼等は些の抵抗なしに譲り渡してしまつた。しかしボロニアに近寄るに從つて彼は、一軒の家が建築されて既に「兄弟達の家」と呼ばれてあるのを知つた。彼は直ちにそれを明け渡すべきことを命じて、其處にゐた病人すらをも假借しなかつた。そこで兄弟達は丁度そのとき「サンタ・マリア・ディ・レヱノ」(Santa Maria di Rheno) の献堂式のために、その都市に來てゐたウゴリニの處へ赴いた。彼はフランチェスコに細々とこの家屋の、教團に屬してゐないことを説明した。彼は彼みづから公(おほやけ)の條令によつて、その所有者たることを宣言した。斯くして彼は漸くフランチェスコを説得することに成功した。

ボロニアの信心家達はフランチェスコに對して、熱烈な歡迎の準備をしてゐたので、その反響は今日までも傳はつてゐる——

「スパラト市の殿會堂の大祭(アーチディアーコノ)なる私、すなはちスパラトのトゥマゾ、ボロニアにあつて學びつゝあつたとき、一二二〇年の聖母昇天節に、フランチェスコが『小宮殿』の柱廊において、殆んど全市の人々の前に、説教してゐたのを自分は見た。彼の談話の題目は次ぎのごときものであつた——天使、人類、惡鬼。彼はすべてこれらの主題について極めて賢こく、また雄辯に語つたので、其處にゐた多くの學識ある人々が、かくも無學な人の言葉に對して、驚嘆に充たされるのであつた。しかも彼には説教者風のところはなく、その態度は寧ろ會話風であつた。彼の談話の實質は、特に敵意の廢棄と、平和なる同盟をつくる必要とに關るものであつた。彼の着物は貧しく、彼の風彩は決して立派ではなく、彼の顔は少しも美ではなかつた。しかし神は彼の言葉

に、極めて大なる効果をあたへたまふたので、その憤怒が血を流すに至らずしては止むべくもなかつた貴族達を、平和と一致とに立ち歸らした。彼に對して抱かれた敬崇の精神は、非常に大なるものであつて、男女の群が彼の後に從ひ、うまく彼の衣の裾に觸れることをもつて、人は自ら幸福なりと感じた」。

十三世紀を通じてボロニアの大學のうへに、赫々たる光を注いだ有名なる法學者達の一連の首領で、著名な註解者であつたアックルソ (Accurso) が、「小さき兄弟達」をこの都市に近いリッカルディナ (Ricardina) における彼の別莊に歡迎したのはこの頃であつたか、わたし達は知らないのである。

他の一人の教授ニコラス・デイ・ペポリ (Nicolas dei Pepoli) が、また教團に加入したやうに見える。從つて學生達も逡巡することなく、幾千かのものが、その衣鉢を受けんことを乞ふた。しかもすべてこれらのことが、一の危險を醸すことゝなつたのである。伊太利亞における法律學に聖献されし祭壇であつたこの都市は、巴里におけると同じ感化を教團の發展のうへにあたへることゝなつた。「小さき兄弟達」は、包圍する空氣から逃れ得ざるごとく、その感化から免るゝ譯にはゆかなかつた。

この度は極く暫くしかこゝに、フランチェスコは滯在しなかつた。

彼の傳記者達は何とも傳へてゐないが。それにも關らず全く眞實らしくある一つの舊い傳説は、ウ

ゴリニが彼を伴れて行つて、カマルドリの隠退處に、一箇月を過ごさせたことを語る。これは曩に聖ロムアル（St. Romuald）が住んでゐたもので、その巖が巨人のごとく聳え、全國を瞰下するエルナから、徒歩數時間の以内にある、歐羅巴中最も莊嚴なるものゝ一つなる、カゼンティノの森林の中にある。

わたし達はいかにフランチェスコが休息を要してゐたかを知る。それと同時に疑ひもなく彼は、また彼をして歸鄉せしむるに至つた暗憺たる憶測の眞中にあつて、注意深く前もつて、彼の行動の筋途を決定するために、瞑想の時間を切望してゐた。極めて必要であつた休安を、彼にあたへるといふことは、ウゴリニにとつて、第二の目的に過ぎなかつた。英斷を爲すべきときが到來したやうに彼に見えた。フランチェスコの不服に對する彼の應答を、わたし達は容易に想像することができる。過去の敎訓、および單に聖徒であつたばかりでなく、同時に巧妙なる人心統一者であつたところの、諸敎團の創設者の經驗を利用するやうに、彼は手嚴しく勸告しなかつたであらうか。ウゴリニ自身が彼の最善の友であり、彼の生れながらの擁護者でなかつたか。しかもフランチェスコは彼の權勢を度外視せんとしてゐるではないか。そしてこの權勢は托鉢僧達に對する彼の愛と、敎會における彼の地位と、而して彼の偉大なる時代とが、正當にそれを揮ふ責任を、彼にあたへるものではないか。然り、彼はフランチェスコをして彼の弟子達を、危險であると同時に、事實何の功果もなかつた傳道

に派遣し、彼等をあらゆる災難に、何ゆゑに徒らに暴露させて置かねばならなかつたのであるか。一體それは何のためであつたのか。「小さき兄弟達」が極小な特典すらを享受することを肯んじないと云ふ、些々たる名譽心のためではないか。しかも異端者が爲したと同樣に、かれらは敎會を攪亂した。大なる團結が存立せんためには、整然として精密な規則を有せざるべからざることを幾度、かれは想起せしめられたことであらう。しかしそれは皆徒勞であつた。勿論フランチェスコの謙讓は、何人にも疑はれなかつたが、しかし何ゆゑにそれを、單に衣服と生活の樣式とにでなく、また彼の全行爲に示さないのであるのか。彼は彼みづからの靈感を擁護することにおいて、神に從ふものなりと考へたが、しかし敎會は神の名において、語つてゐるのではないか。その代表者達の言葉は、イエスの言葉を地上に、永遠に不朽ならしめたものではないか。彼は福音の人、使徒のごとき人たらんことを願望したが、しかし斯くする最善の道は、羅馬法王すなはちペテロの後繼者に從ふことではないか。極端な許容をもつて彼等は、彼をしてその道を辿らしめた。そしてその結果は最も悲しむべきものであることを知るに至つた。然しながら形勢は絶望すべきものではなかつた。其處にはまだ回復の一縷の望があつた。すなはち彼が身を法王の脚下に投じて、その祝福と啓發と勸告とを懇願する、たゞこの一事である。

この主敎の心の中にある、愛と嘆美との表白を交へた、斯くのごとき非難は、フランチェスコの有

するやうな感じ易い心情を、深く困惑せしめずには置かなかつた。彼の良心は彼自身の正しいことを證明したが、しかし高貴なる心の慎ましさにより、彼は多くの過誤をしたのかも知れぬと考へたのである。

ある方面においては、殆んど互ひに知り合つてゐなかつたところの、これら兩人の友情の秘密如何を訊ねるのは、恐らくこゝが適當な場處であらう。ウゴリニはフランチェスコ派の理想を危うせんとする一群の、常に眞の權化となつてゐながら、如何にして友情が一の陰影なしに、遠くフランチェスコの死そのときに至るまで、繼續することができたのか。この問題に對しては、如何なる答案も不可能である。同じ問題が兄弟エリアに關しても示されて、わたし達はおなじく滿足なる解答を發見し得ない。愛の心情の人々は、完全に明晰な知性を殆んど有つてゐない。彼等はその心情において女性的な弱々しさや、奇怪な夢想や、被造物と事物とに對する殆んど病的な憐憫や、彼等みづからの幸福であると同時に苛責である苦痛に對する、神秘的な渇望の些少だに感ずることのないやうな彼等自身よりは非常に異なつた人々に、しばしば蠱惑されるのである。

カマルドリの滯在は、九月の半ばまで延引されて、結局僧正の滿足するところとなつた。フランチェスコはウゴリニを教團指導の任を帶びた公然の保護者として、彼にあたへられたいといふ要求を携へて當時オリヴェト（Orivieto）にゐた法王のもとに行かうと決心した。

嘗て一たひ彼が見た夢が、彼の記憶に呼び返へされた。努力する甲斐もなく、その翼をもつて雛全體を蔽ひ得ざる、一羽の黑い牝鷄を彼は見たことがあつた。この憐なる牝鷄はかれ自身であり、雛は托鉢僧達であつた。この夢はその翼の下に彼等が入れられ、また肉食鳥から彼等を防禦し得る一人の母を、彼等のために求めよと彼に命ずる攝理の指示であつた。少くとも彼はかく考へた。

彼は途中アッシジに立寄らずに、オリヴェトに赴いた、これもし其處に行かんか、攪亂の教唆者に對して何とか、處置しなければならなかつたからである。彼は今や何ごとでも法王に、直接交渉せんことを決心した。

彼の深奥な謙讓が、ウゴリニが彼の心の中に醒めさせた罪過の感情とともに、彼の法王に對する態度を、充分説明し盡すものであるか。或ひは僻職の漠然たる考へを彼がもつてゐたと、わたし達は想像すべきであらうか。良心がすでに譴責を囁き、そして彼の周圍に織りなされてあつたすべての僻説の、如何に詰まらぬものであつたかを、彼に示してゐなかつたとは誰が知つてゐよう。

「かくも偉大なる王侯の室に敢て自ら出づることをせず、彼は戸の前の外に立つて、法王の出で來たるまで、忍耐深く待つてゐた。彼が現れたときに、聖フランチェスコは敬禮をしていつた、父なる法王よ、『神汝に平安を與へたまはんことを』と。『神汝を祝福したまはんことを、わが子よ。』と彼は答へた。『わが主よ』とそのとき聖フランチェスコは彼にいつた、『汝は偉大にしてしば〳〵偉大なる事業に專念になる。憐なる托鉢僧達はなすべかりしほど度々は、來たつて汝と語ることができない。汝は自分に

多くの法王逮を與へた。願くは必要な場合に自分が相談し、汝の代理者として傾聽し、自分のこと及び教團の事項を協議し得る、たゞ一人の法王をあたへ給へ』。『自分が誰を汝にあたへることを欲するか』、『オスティアの監督を』。かくて法王は彼を彼に與へた」。

ウゴリニとの協議は今ふたたび始まつた。彼は直ちに若干の修正をフランチェスコにあたへた。キアーラ派に許されてあつた特典（プラヰレヅガヤ）は取消された。ヂオヴァンニ・ディ・コンペッロ（Giovanni di Compello）は法王廳から、何の援助をも望むべからずと通告され、そしてフランチェスコみづからが彼の教團の「規範」を作成する、終極の許可があたへられたのである。勿論彼はこの問題について、人に相談することを肯んじなかつたが、其處に法王廳の逡巡し得ざるたゞ一つの點があつて、それを直ちに實行することを迫つたのである――すなはち志願者に對する、一年新參期の義務これであつた。

同時に單にこの條例を發行するためのみでなく、特に教會とフランチェスコ派とのあひだの關係の、新紀元開始を嚴肅に際立たしめるために、法王令が發布されてあつた。かくて「ウムブリアの懺悔者達」の兄弟團は、嚴密な意味における教團となつたのである。

監督にして神の僕の僕なるオノリウス、兄弟フランチェスコおよび「小さき兄弟達」の僧院長、また監視者に、平安を問ひ、使徒的祝福を祈る。

殆んどすべての宗教的教團において、規範に從ふ生涯を遵守せんと志す人々をして、一定の期間それを試ましめ、斯くて無分別な行程に入り、また入らんと自負することなきやう、そのあひだ彼等を吟味することは賢明なる定といふべし。これらの理由に基づき、一年間の新參期以後にあらざれば、何人にも入團を許可せざるやう、この書翰によつてわれ汝に命令す。入團誓約の後は、如何なる兄弟も教團を去り、而して何人たりとも、それより出で去りし者を、復還せしむることを禁止す。また汝等の衣を纏へる者等の、此處彼處に許可なしに遍歴することを禁止す。これ汝等の清貧（ポヱルダ）の純潔の、汚されんことを恐るゝがゆゑなり。若しこれを犯す托鉢僧逮あらば、汝彼等にその改悔するまで、教會的懲責を加へざるべからず。

かゝる法王令をして、特典（プラヰレヅガヤ）の光を帶びるやうに思はしめやうとするには、確かに思ひ切つた婉言令辭を用ゐねばならぬ。これは事實において「小さき兄弟達」のうへに、法王の強い手を加へるものであつた。

このとき以來當然フランチェスコにとり、依然として團長たることが不可能となつた。彼はみづからそれを感じた。心破れ、氣痛んだ彼は、それにも關らず、欣然として彼の愛の精力のうちに、今日まで規範或ひは憲法の代りとなつてゐた言葉や閃光を見出したであらう。これらは彼の初代の伴侶者達に、彼等の爲すべきことに對する直覺と、それを遂行すべき力とをあたへたものであつた。しかし數年前の狀態よりは、甚だ異なれるものとなつたのを、突然彼が認めたこの一族の頭として一人の統治者が必要になつた。そして彼は悲しくも彼自身が、何と考へてもその人でないことを承

認した。

あゝ、彼みづからの良心のうちに、彼は古い理想が眞實なもの、正しきものであることを、善く識つてゐた。しかし斯かる思想を、傲慢の誘惑として彼は斥けた。最近の出來事は彼の道義的人格を、幾何ほどか弱めずしては起こらなかつた。不斷に服從、忍辱、謙讓を說くかはりに、或る朦朧が來たつて、この灼く靈魂に蔽ひ被さつた。靈魂はもはや往きにし日の確實さをもつて、それを訪れなかつた。豫言者は躊躇き始めた、殆んど彼自身とその使命とを疑ふまで。もしやおのが事業の始めにおいて、ある虛しい自己滿足がなかつたかと、彼は氣遣はしげに反省した。彼は開かれんとしてゐる僧會、それにおいて爲さるゝ攻擊と批評とのことを、前もつてみづから想像し、そして若し喜悅をもつてそれに耐へ得なかつたならば、自分が眞の「小さき兄弟」でないと云ふことを、みづからに確信せしめようと努めた。高貴なる諸德は遠慮勝ちなものである。就中完全な謙讓は特に著しいのである。且つ卓越せる人物は、自己肯定を避けんとすることにおいて、たま〳〵彼自身の確信を仄めかすのである。かくて彼は敎團の指導をピエトゥロ・ディ・カタナ（Pietro di Catana）の手に置かうと決心した。この決定のうちには、何等自發的なところのないことが明瞭である。この兄弟が法律學者であり、また貴族の出であつたといふ事實が、フランチェスコ派の團體の變遷を明確に論證してゐる。

一二二〇年九月二十九日の僧會に、ウゴリニが臨席してゐたか否やは、知られてゐないが、たとひ彼が親しく出席しなかつたとしても、確かに議事に注意すべき命を受けた主敎を、代理者として送つたに相違ない。一週前に發布された法王令は、托鉢僧達に交付されてあつた。フランチェスコもまた彼等に、かれが新規範を作成せんとしてゐたことを通告した。この事項に關しては、敎職のみが發言權を有してゐたやうに見える諸會議が開かれた。これらの會議において、新しい「規範」の主要な點々の原則のみが制定され、それに適當な形態をあたへることが、フランチェスコに委ねられてあつた。舊い「規範」の主要な辭句の一つ、すなはち「汝とともに何ものをも携ふる勿れ」[2]といふ言葉をもつて始まる、彼の三つの根本的な戒律の一つを、省かうと決心したことに優つて善く何ものも彼の陷つた頽廢狀態を示すものがないのである。

暫く前までフランチェスコが、彼の召命の否定であり、イエスが彼に傳へられた使命を卒直に受けるのを、拒否することであると觀じてゐたこの讓步を、フランチェスコに爲さしめるために、如何なる活動が試みられたのであつたか、それは歷史の秘密であるが、しかしこの時彼の生涯のうちに、かの最强者の能力をさへ壓服して、たゞ云ひ表はし得ざる苦痛を、傷づけられし心情に殘すところの、一の精神的動搖があつたのであると、わたし達は想像し得るのである、

この苦痛の幾分が、傳記者がわたし達に殘した彼の辭任の、感動すべき記述のうちに傳へられて

ゐる。

「このとき以後」と、彼は托鉢僧達にいつた、「自分は汝等に對しては死んだも同然である。しかし玆に兄弟ピエトゥロ・ディカタナがゐる。彼に汝等と自分とが服從するのである」。そこでフランチェスコは彼の前に身を平伏させて、服從と忍從とを彼に誓約した。托鉢僧達は斯くて或る意味における、孤兒とみづからがなつたのを見たとき、彼等は落涙と哀哭とを禁じ得なかつたのである。しかしフランチェスコは立ちあがつて彼の手を拱き、眼を天に擧げて、「主よ」といつた、「われに委ね給ひしこの家族をわれ汝に返さんとす。さらば最も愛しみ深きイエスよ、汝の知りたまふがごとく、もはや彼等を護りゆく力も、資格もわれになきなり。この故にわれ彼等を教職者達に委ぬ。もし彼等の怠慢或ひは惡しき模範のため、兄弟の一人だに迷ひ去ることもあらば、審判の日において彼等を、汝のまへに責任あらしめたまへ」。

ピエトゥロ・ディ・カタナの在職は極めて短日月であつた。彼は一二二一年の三月十日に死んだのである。[3]

この數箇月の期間に關する記錄は實に饒多である。これは極めて自然なことである。すなはちフランチェスコは彼に委ねられた仕事を完成せんがために、ボルティウンクラに滯在し、其處に彼を取り繞つて生活してゐた兄弟達が、その目擊したすべての出來事を、後に想ひ起こしたのである。記錄の或るものは、彼の靈魂をその鬪場とする戰爭を啓示する。みづから服從的態度を示さんことを願望しながら、同時に彼はかれの鐵鎖を振るひ落として、昔の日に翔り去り、たゞ神においての

み生活し、呼吸しようとする自己を、見ずにはゐられなかつた。次ぎの飾なき記述は宜しく知つて貰くべきもののやうに自分は考へる。

ある日、困難なしにではなかつたが、詩篇を朗讀し得る一人の新參者が、團長から――すなはち聖フランチェスコの代理者(ヰカーリオ)から、その一つを所有する許可を得た。しかし兄弟達が智識や書籍に對して貪望することを、フランチェスコが欲しなかつたことを知つてゐたので、彼の承諾なしに詩篇を手にするのを好まなかつた。そこで聖フランチェスコが彼のゐた修道院に來たときに、「父よ」と彼は云つた、「詩篇を手にすることは大いなる慰藉である。さて團長はそれをもつことを自分に許したが、汝に知らさずにそれを手にすることを自分は欲しない」。聖フランチェスコは火のやうになつて答へた、「戰場において戰ひ、努力し、艱苦し、死なさへ賭して、莫々たる勝利を獲得した皇帝カルロ、ロランド、オリヰエロ、およびその他すべての勇士、勇敢なる英雄、雄々しい戰士達を見よ。聖き殉教者達、彼等もまた擇ばれて基督の信仰のために、戰場の眞中(たゞなか)に死んだ。しかし今や單に彼等の偉業を叙述して、名譽と、光榮とにあづからんと憧れる多くの人々が其處にある。然りわたし達のうちにも亦、聖徒達の事業を述べ傳へて恰も彼等自身がそれらのことを爲したかのやうに、光榮と名譽とを豫期してゐる多くのものがゐる」と。

……數日の後聖フランチェスコが火の前に坐してゐると、新參者が彼に近寄つて、更に例の詩篇のことを語らうとした。

「汝が詩篇を手にするならば」と、フランチェスコが云つた、「汝はやがて日讀祈禱書(ブレヰアーリオ)を欲するであらう。日讀祈禱書を手にするならば、汝はやがて偉大なる主教のごとく、講壇のうへに坐して、汝の伴侶者を差し招き、『わが日讀祈禱者を持ち來たれ』と命ずるであらう」。

聖フランチェスコは非常に意氣込んで斯く語り、かくて灰をつかんでそれを、新參者の頭上に撒り散らし、「日讀祈禱書はこれだ、日讀祈禱書はこれだ」と繰り返した。

數日の後聖フランチェスコはボルティウンクラにあつて、彼の僧房から程遠からぬ道路を、行きつ戻りつ歩んでゐたときに、盛の兄弟が再び例の詩篇について、彼に語らうとして來た。フランチェスコは彼に云つた「大いに宜し、遣るべし、汝の團長の告ぐるやうに、汝はたゞすれば宜いのである」と。この言葉を聞いて新參者は立ち去つたが、フランチェスコは自分の云つたことを反省しはじめて、突然その托鉢僧を呼び掛けて云つた「待て、待て」と。彼に追ひ付いたときにフランチェスコは云つた「少しく途を數歩後戻りせよ。自分は汝に願ふ。詩篇のことについて、汝の團長のいふがまゝにせよと、汝に語つたとき、自分は何處にゐたか」と。かくて托鉢僧が指差した地點に跪坐き、托鉢僧の脚下に平伏して彼は叫んだ「許せ、わが兄弟よ、許せ」「小さき兄弟」たるものは、その衣のほかに何ものをもつべきでないのである」と。

この長い物語の貴重であるのは、單に神と彼の良心のみを仰いだ切代のフランチェスコと、羅馬教會によつて裁可された一教團の、服從的な修道僧となれる、一二二〇年のフランチェスコとのあひだの對照を、その微細な點まで表してゐるといふばかりでなく、同時にそれが彼の性行を、飾なき現實のまゝに示してゐる、珍らしい記事であるからである。武士物語を引照することゝ、民衆に對する彼の成功の一部分をなした自由な擧動とが、信ずべからざる迅速さをもつて、傳説から除去されてしまつたのである。彼の心靈上の子等は、恐らく、彼等の父の斯かる擧動を、恥辱とはしなかつたであらう。しかし彼等は彼の他の特徴を描き出すことに、強く傾いてゐたので、彼の詩人たり troubadour（南歐詩人）たり、joculator Domini（主の行吟伶人）たりしことを、やゝ忘れ過ぎたのであらう。

チェラノのトゥマゾよりも一世紀以上おそくて、この種類の出來事の若干を記す斷片の數々は、たゞその理由で信據すべきものたる印銘を帶びてゐる。

教團指導の如何なる部分を、尚ほフランチェスコが採つてゐたかについては、精確な斷定を下すことが却々困難である。ピエトゥロ・ディ・カタナ、次いで兄弟エリアが、時として團長と呼ばれ、時として代理者（ヰカーリオ）と呼ばれてゐる。この二語は前の叙述におけるがごとく、連續して現れて來る。この二語の混亂は、同じく事實の混亂に一致するといふことが、如何にも事實らしくある。恐らくそれは故意でさへあるかも知れぬ。一二二〇年九月の僧會以後の教團は、托鉢僧達並びに法王が代理者（ヰカーリオ）といふ稱號をあたへてゐたに過ぎなかつたが、フランチェスコみづからは團長と呼んでゐたその者の手に移つてしまたのであつた。

「小さき兄弟達」の人氣のために、フランチェスコが外觀上の權威を保有してゐることが、肝要であつた。しかし支配の實權は、彼の手から滑り落ちてゐた。

一二〇九年まで彼の胎内に宿つて居り、そして後苦惱のうちに生み出した理想は、今や逃げ去らうとして、恰度わたし達の腰より出でんとする子等が、その生命である故をもつて、厭應なしに胎内より離れ去らうとし、しかも私達の生機を毀損せずにではないのに似てゐるのである。Mater dolorosa!（慘ましき母よ）。あゝ、疑ひもなく彼等は再び歸り來たり、父の爐邊にあつて私達とともに、

殊勝氣に座するであらう。恐らく精神上の患みのときに、彼等は昔のごとく母の腕のうちに、隱家を探らねばならぬのを、感ずることさへあるであらう。しかし彼等の熱病のやうな、性急なこれらの疾驅する歸還は、實は憐むべき兩親の傷を、ふたたび口開けるに過ぎないのであつて、やがて親達はいかに子供達が、ふたたび急いで離れ去らうとするに至るかを見るのである。——名は彼等のものであるが、實は夙に彼等のものでないのである。

1 この如何にも短い斷片は、ダミアノ派の「規範」（一二五三年の八月九日）の第四項に發見せられる。
2 ルカ傳第九章第一節より六節まで。
3 Santa Maria degli Angeli に今なほ存する彼の墳墓の碑文に、この日附が記されてある。

第十五章　一二二一年の「規範」

一二二〇年から一二二一年に跨がる冬は、フランチェスコにより、主として彼の思想を書き下すことに費されてあつた。今までの彼は餘りに多く活動の人であつたので、謂ゆる「活ける言葉」のほか彼は、何ものにも思ひを注ぐことができなかつた。然るにこのとき以後、彼の消盡されし勢力は彼を驅つて、もろ〳〵の靈魂に對する彼の熱愛を、傳道旅行以外の或る方法によつて滿たさしめることゝなつた。一方において一二二〇年九月二十九日の僧會が、他方においては法王令 Cum secundum が、前もつて若干の要點を決定したのを私達は見た。殘りの部分に對しては、完全な自由が彼にあたへられてあつたが、しかしそれは實際彼の思想の、終極的不變的叙述を爲すことではなくて、たゞそれを吐露することに過ぎなかつた。立法的權能は、教職達の手に移つてしまつてゐたのであつた。

かくて私達が一二二一年の「規範」と稱するものは、議會において代議的政府に委ねらるゝやうに、提出せられたる法律といふに過ぎないのである。當局者の首班は、それを全然改訂し變更し、かゝる文書の冒頭におけるフランチェスコの名も、殆んど信用するに足るものでなく、そして全く

間接的に彼の個人的意見を含有するに過ぎないものとして、それを他日世界にあたへるであらう。

フランチェスコに優つて「規範」作成に、不適當な人は決してなかつた。實際一二一〇年のものと一二二三年の十一月二十九日に法王によつて、嚴しく裁可されたものとの間にに、名を除いて殆んど共通的なところがなかつた。前者にあつてはすべてが、活々として自由で自然のまゝである。それは出發の門出であり靈感である。それは二句のうちに概括せられる。すなはち「來たりて我に從へ」との、人に對するイエスの言命と、「すべてのものを棄てゝ彼に從へり」といふ人の實行と。神來の愛の召命に答へんとして、人はみづからを心からの犧牲とする。そしてこれは全く自然な、一種の本能によるのである。神秘のこの高處にあつては、如何なる規則も啻に無用であるばかりでなく、それは方に冒瀆といふべきである。少くともそれは疑惑の徵候と稱すべきであらう。地上の愛において人々が互に眞に愛するときには、何ごとも要求せられず、何ごとも約束せられない。

これと丁度反對に、一二二三年の「規範」は、一の相互的契約である。神の方にあつては召命が命令となり、人の方にあつては愛の自由な衝動が、依りてもつて永生命が儲けられる、服從の一行動となつてしまつた。

その根抵において、すべてが律法と愛との背反律である。律法の支配の下にあつて私達は、面倒な仕事に束縛せられるが、しかし百倍の報酬を得、またその賃金に對しては、論爭すべからざる權

利をもつてゐるところの、神の傭兵である。

愛の規範の下にあつて、わたし達は神の子達であり、彼の同勞者である。わたし達は身を彼に捧ぐるに、取引や報酬をもつてしない。わたし達はイエスに從ふが、これは幸福であるからでなく、然せざるを得ないからである。彼われを愛し、われ等また彼を愛することを感ずるからである。衷なる焰が不可抗的に、わたし達を彼の方に惹き寄せる——Et Spiritus et Sponsa dicunt: Veni.（聖靈と「新婦」とは宣たまふ、來たれと）。

これら二「規範」の間の對律について、少しく論ずることが必要である。一二一〇年のものの眞にフランチェスコ派的である。一二二三年のものは、間接に教會の仕事であつて、わが新みが、運動を自己に同化せしめんと努め、一觸してそれをその元來の目的から、全然變轉し回轉せしめたものである。

一二二一年のものは、中間の段階を劃する。それは二原則の、或ひは寧ろ二精神の折衝であつた。彼等は接近し彼等は接觸した、しかし彼等は相互に融和しなかつた。此處彼處に混合はある、しかし何處にも結合がない。わたし達は困難なしに、種々異なれる要素を區分することができる。これらの狀態はフランチェスコの靈魂裡に起こりつゝあつたもの、および教團の急激な發展の精密な反映である。

おのが仕事を扶けしめんとフランチェスコは、兄弟なるスペヤのチェザレを側に置いた。かれは聖句に對するその深奥な知識のために、特にフランチェスコには有用であつたのであらう。

一二二一年のこの「規範」を一瞥して、第一にわたし達を感ぜさすのは、その法外に長いことである。一二二三年のものは三頁を越さないのに、それはフォリヲの十頁ほどを塞いでゐる。それより法王から發した文句と、前の僧會において制定されたものとを除き去るならば、汝等はその一行すらも省略し得ないことを見るであらう。殘る部分はもはや「規範」ではなくて、熱情に燃える訴への連續である。その中にわが「父」の心情が、命令としてではなく、愛の本能を彼の子達に確知せしめ、感觸せしめ、覺醒せしめんがために語つてゐるのである。

それは全く渾沌で矛盾さへある、秩序なく、歡喜と苦々しい歎泣と、希望と遺恨との爆發の混合である。それらの句のうちにあつて靈魂の熱情は、能ふかぎりの調に奏で出で、最も柔しい旋律より最も雄々しい旋律に至るまで、クラリオンの吹奏のごとく、歡ばしくまた感的なものより、墓の彼方よりの聲のごとく搖めき、塞がるものに至るまで、全音階を馳走するのである。

「神のうちなる聖き愛によりて、われすべての托鉢僧、教職、および他の人々のあらゆる障碍、すべての配慮、あらゆる心痛を投げ棄て、かくて彼等潔き心情と眞摯なる志とをもつて、全く身を献げて主なる神に仕へ、かれを愛し崇むるに到らんことを願ふ。これ

ずべてのことに優りて神の求めたまふことなり。願くは我等のうちに、至高き主にして、父、子、聖靈なる神のために、常に神殿と家とを備へせよ。彼云ひたまふ『なんぢら來たらんとするすべてのことを免れ、人の子の臺前に正しく立ち得るものたらんがために、恒に目を醒し且つ祈れ』と。

我等をしての彼の正しき道と、生命と、眞理と、聖き福音とを守らしめよ、彼われ等にその名を啓示せんとて、我等のために父のもとを去ることを敢てして曰ひたまへり『父よなんぢ我に賜ひし人々にわれ汝の名を顯はし、また汝が我に賜ひし言葉をわれまた彼等にあたへたり。彼等これを受けまたわが汝より出でしことを知り、且つ汝の我を遣はしたまへることを信じたり。我かれらの爲に祈る。わが祈るは世のためにあらず、汝のわれに賜ひし者のために祈るなり、願くは我等の一つなるがごとく、彼等をも一つならしめ給へ。われ尙ほ世にありてこの事を語れるは、喜びを彼等に充たしめんがためなり。われ汝の言葉を彼等に授けたり、世は彼等を惡む、そは彼等ば世のものにあらざればなり。われ汝に彼等を世より取りたまへとは祈らず、ただ彼等を守りて惡に陷らすなかれと祈る。眞理をもて彼等を潔めたまへ、汝の言葉は眞理なり。すなはち我を世に遣しゝごとく、我もかれらを世に遣はせり。われ彼等のために自己を潔む、これ眞理によりて彼等の潔められん爲なり。我たゞ彼等のためにのみ祈らず。彼等の言葉によりて我を信ずる者のためにも祈るなり。これすべての者をして一つにし、且つ世をして汝のわれを遣はしゝことを信ぜしめ、また汝われを愛するごとく、彼等をも愛することを知らしめんためなり。われ汝の名を彼等に示せり、そは汝の我を愛するの愛かれらにあり、また我かれらに居らんためなり』。

祈禱

「全能にしていと高き君なる神、聖き父、正しき主、天と地との王よ、汝の聖き御旨により、また汝の獨子と聖靈とによりて、すべての靈なるもの形あるものを創造し且つ汝の姿と像とに似せてわれらを造りたまへるがために、なんぢ自身のゆゑに、われら惡謝を捧ぐ、汝われらをその樂園に置きたまひしかど、我等はおのれの罪のためにこれを失へり。汝の子により、汝のものにし

て、また我等のためにあたへたまひし愛によりて、われらを創造し給ひし後、なんぢ彼を榮光ある祝福されし永久の「處女」なるマリアの、眞の神なる人として生れ出でしめ、彼の十字架と血と死とによりて、汝われら憐むべき俘虜を贖はんとしたまひしがゆゑに、われら汝に感謝を捧ぐ。改い悔めずまた汝を識らざるそれらの呪はれし人々に、永遠の火を送くらんがために、その榮光の威嚴のうちに、なんぢの子歸りたまふがゆゑに、われら汝に感謝を捧ぐ。そのとき改い悔めて汝を識り崇め仕へしものに、「わが父の祝福されし人々よ、なんぢ等來たりて世の基礎を設かざりし前に、汝等のために備へられし王國を繼げよ」と云ひたまはん。耶にして罪ふかきわれらは、汝を呼ぶに足らざるがゆゑに、謙卑りてわれらの主イエス・クリストに願ふなり。彼はなんぢのいたく愛し、いと喜びたまふ子なれば、彼はすべてのことに對する感謝を汝に捧げ得るなり。われらはまた慰むるもの即ち聖靈に祈る。汝および彼等の御旨に適はんことを。これがために我等なんぢとともにありて、全能なる彼に懇願し奉る、なんぢ彼によりてわれらの爲に、かく偉いなることをなし給へり。ハレルヤ(Allelnia).

また我等は、榮光の母にして永久に處女なる、祝福されしマリア、聖ミカエル、ガブリエル、ラファエル、および祝福され聖靈のすべての合唱隊、セラフキム、ケルビム、位、支配、諸の政治と權威、能力と天使、首天使、洗禮者ヨハネ、福音者ヨハネ、ペテロ、パウロ、および聖き族長、豫言者、聖き無罪者、使徒、傳道者、弟子達、懺悔僧、童貞、受福者、エリヤとエノク、その他すべて在りしもの、あるべきもの、今あるものに祈る、聖旨に適はゞ、これらのことの爲に、なんぢ君にして眞、愛にして活ける神、および我等のいと聖き主イエス・クリストなる、汝の子、また助主なる聖靈に、永久に感謝を捧げんこと。アーメン。ハレルヤ(Allelnia).

我等はまた公同的にして使徒的教會の裡にありて、主なる神に仕へんと願ふすべての人々、すべての司祭、補祭、副補祭、侍僧、呪念者、讀經者、門守、すべての僧、凡ての修道僧と尼僧、すべての小兒等と小さきもの等、貧者と追放者、王と方伯、働き人と勞働者、僕と主人、處女、節然家と既婚者、平信徒、男子と女子、凡ての小兒、幼き者、若き者と老人、病者と健康者、微弱者と大いなる者、あらゆる種族と、國語と、國の人民、全世界到る處における、今あり後あらんすべての人々に懇願するなり。「小さき兄弟達」に

して益なき僕なる我等すべてのものが皆もろともに一致して、それを他にしては何人も救はるゝことなき、眞の信仰と改悔とに酬へ得んことを、彼等に祈り求むるなり。

われらすべてなしてその全き心情と全き思ひ、全心全力、すべての勇氣、すべての努力、全き愛、すべての裏なる力、願望、意志を擧げて、主なる神を愛せしめよ。彼われらにその全身、全靈、全生命をあたへたまひ、いま尙ほそれらを、日々われらの各にあたへたまふ。彼はわれら、邪にして價値なく、墮落して忌まはしく、恩を忘れ、無知にして惡しきわれらに向かひ、慈悲深く在しまた在せり。われら他に何ものをも願はず、われら他に何ことをも欲せず。贖主にして救主なる唯ひとりの眞の神のほか、何ものも我等を喜ばし、或ひはわれらの心を慰くことなからしめよ。彼は全き善、眞なる至上の善にして、慈悲、誠實、憐憫、恩惠、仁愛、柔和に充てる唯ひとりのものなり、聖く、正しく、眞實にして直なる唯ひとりものなり、寛仁と無垢と、純潔とを備へたまふ唯ひとりのものなり。天上にありて喜びつゝあるすべての改悔者、すべての聖徒等のすべての赦罪と凡ての恩惠と、すべての榮光とは、彼のものなり、彼によるもの、彼のうちにあるものなり。

かくて再び何ものをしてわれらを妨げ、何ものをして分離、何ものをしてその生存せんかぎり、何時何處にありても謙卑りて信ぜしめよ。われらの心情の中にいと高き君なる永遠の神、三位にして一體なる父、子、聖靈、彼を信じ彼を望むもの、また彼を愛するすべての人々の創造者を、愛し、崇め、仕へ、褒め、稱へ、尊び、仰ぎ、大いにし、感謝せよ。彼は始めなく終りなく、變らず、見えず、臨らひ、考量し、辨別すべからざる、祝福され、讃め稱へられ、榮光ある、仰がれ、儼かなる、いと高き、仁愛にして、いつくしみ深く、大いに喜び、且つ永久に亘り、すべてのものに優りて、常に願ふべきものにましませり。アーメン」。

これら飾なき反復は、心情の眞の深處に甘美に忍び入る一の神秘的な蠱惑をもつてはゐないか。言葉はたゞその粗笨な媒介物に過ぎないところの、一種の聖禮典がその中にないであらうか。小兒

がその母の胸に身を投ずるがごとく、フランチェスコは避難處を神のうちに採つた。そして脆弱と喜悅との感情に堪へずして、おのが知れるかぎりの言葉を吃り出でゝ、愛と信仰とに充てる永遠の「われは汝のものなり」を、たゞ繰り返してゐるのである。

この中にわたし達はたゞ引用によつてゞはなく、更に思想そのものゝ靈感よりして、わたし達に基督の祭司的祈禱と稱するものを、想起せしめる或るものがある。清貧の使徒はこゝに、彼の愛の眞の力によつて、あだかも天と地との間に懸かつてゐるやうに見える。その愛たるや、靈の裏なる抵抗すべからざる塗膏によつて、この新禮拜の祭司を聖別したものであつた。彼は過去の祭司のごとくに、犧牲を献げはしなかつた。彼はかれ自身を犧牲とし、彼の肉體のうちに人類の災禍を負ふのである。

これらの言葉は、神秘的見地よりしては、一際美はしいものであるが、「規範」として期待されしものに對しては、反比例に不適當なものである。これらは一の規範としての正確も、簡明も缺き、また命令的形式をも有してゐない。羅馬教會がフランチェスコ派運動を指導すべく、斷乎たる干渉をしたことを考へるならば、この規範が被るやうになつた變遷は、まさしく致命的なものであつたので、遂に一二二三年の法典となつたのである。

現今わたし達が有する形そのまゝの、この「規範」の粗笨な草案が、一二二一年の聖靈降臨節の

僧會において、配付せられたそのもので有つたらしい。異なれる本文のうちに見出だされるところの、時としては重大な不同は、地方の教職によつて提議された改訂の輪廓に他ならぬのである。一たびこの文書が、一片の粗笨な草案に過ぎないと考へる觀念が容されんか、わたし達はそれに急激な豫備的修正、すなはち教會當局者達がわが教團に對して採らんとする彼等の企圖に、著しく矛盾するがごときものをすべて抹殺した一種の芟除を既に受けたことを氣付かしめる。

これらの短縮を施したものが、誰であつたかと訊ねんか、一の名が直ちに私達の唇に上る――ウゴリニ。彼はその平衡を失した誇大と、その統一と、精確とを缺いでゐることを批評した。後日フランチェスコが夢のうちに、餓死せんとする托鉢僧達の一群を見、そしておのれの四邊には、麵麭の無數の塊が横たはつてゐたが、しかし周圍のもの等にあたへようとするとき、それらは指の間から消え失せてしまつたので、彼等の要求を充たし得なかつたといふことが叙述されてゐる。かくて天よりの一つの聲が云つた、「フランチェスコよ、これらの塊を聖餅とし、それをもつて此等の饑死せんとする人々を養へ」と。

これがこのときフランチェスコと、この僧正とのあひだに起こつた評議の、繪畫的反響であると想像するのに、ほとんど危險はあるまい。後者は彼に斯くのごとき比喩を用ゐて彼の企圖の缺點を暗示したのであらう。疑ひもなくこのすべてのことは、一二二一年の始め、フランチェスコの羅馬滯

在中に起こつたのである。

其處に到る前にわたし達は、その靈感とその文體とにおいてさへも、一二二一年の「規範」が、聖フランチェスコの他の著書、すなはち訓誡（Admonitionis）といふ名稱によつて知らるゝものに對して有する類似に、一瞥を投げねばならぬ。これは宗教的生活に關する一聯の靈的勸告である。これは私達が丁度いま調査した著作に、內容および形式において、密接に一致してゐる。その語調が全然同一であるので、恐らく規範としては餘りに冗長なものであるとして、この規範の原案からして分離せしめられた、その部分であらうと何人も考へたくなるくらゐである。

この假定が何れであるにもせよ、「訓誡」のうちに私達は、この不安な憂患のときにおいて、フランチェスコの靈魂を襲ふた、すべての心痛を見出すのである。これらの勸告の或るものは、私日記の一片のやうに響く。完全な謙讓な單純さをもつてみづから屈從し、みづからを拒否する理由を探求しながら、しかもそれらを全く發見し得ざる彼をわたし達は見る。彼は他の人々が彼にあたへた忠告を、心の中に反復した。ウゴリニと教會とが模範として彼に示したところの、その理想的修道僧を理解し、嘆美せんとの努力を、わたし達は感得する——

主は福音書のうちに云はれた、「その所有を悉く棄つるものに非ざれば、わが弟子たることを得ず、且つその生命を得るものは、それを失ふべし」と。一身を長上のものゝ手に全く委れて、彼に服從するは、これ即ち所有を棄て、生命を失ふことである……

そして身下のものであつて、長上のものゝ彼に命ずることよりも、彼の靈魂にとりて、一層有益であるものを認める場合には、彼をして彼の意志を獻物として神に捧げしめよ。

これを讀んで人はフランチェスコが、教會的權威に服從することをもつて、宗教の眞髓となす人々の階級に加はらんとしてゐたと考へるかも知れぬ。しかし然うではなかつた。こゝにおいてさへも、彼の感情は全く抹殺されず、實際怯懦ではあつたが、しかし彼の最も深い思想を啓示する挿句や說明を、彼の言葉のうちに混入してゐる。常に個人的良心を、最後の審判者の王座に坐せしめて。

すべてこれらのことは、彼の傷つけられし靈魂が、受働的服從を喘ぎ求めた時のあるを、想像すべきことを充分明白に示し、その表白である perinde ac cadaver（屍體のごとく）は、「イエス會」よりも、餘程以前に溯るやうである。これは靈魂が沈默した困憊の時期であつた。

一日その伴侶者達とともに坐してゐたとき、彼は呻吟し始めて云つた、「おのが長上のものに完全に服從する修道僧は、地上に殆んどない」と。彼の伴侶者達は非常に愕いて云つた、「父よ、完全な至上の服從とは、如何なるものであるか、私達に說明せよ」と。すると服從心に富める自分を、屍體に比して彼は答へた、「屍體を採り汝等の好む處に置け、それは、何の抵抗もしないであらう。如何なるところに置かれても、それは囁くことをしない。其處からそれを汝等が運び去るとも、それは反對しない。講壇のうへに置かんか、それは仰ぐことをせずに俯首くのである。紫衣を纏はしめんか、それは一倍皆白になるのであらう」と。

「屍體のごとき」服從に對するこの渴望は、彼の靈魂を荒廢せしめた暴虐を、たま〳〵證明してゐるといふべきである。それは精神的領域において、大なる肉體的苦惱の絕滅に對する叫喚に相當する。

最も悲しむべきは、彼が絕對に單獨であつたことである。他のすべてのところにおいてはフランチェスコ派の人々は、活潑に發動的に、嬉々として彼に服從した。

彼は良心に指揮さるゝ、反抗の神聖を持しつゝ、この杯をその滓渣までも飲み干した。彼の生涯の晩年の或る日、獨逸の一托鉢僧が彼に遇ひに來て、彼と純なる服從について長く論じた後——

彼はフランチェスコに乞ふた、「自分が汝に乞ひたき一事がある。それは若し兄弟達が、萬一「規範」に從つて生活しないやうな場合に、汝は自分を彼等より分離せしめ、單獨に或ひは他の數人とともに、それを完全に遵守するを許さるゝかと云ふことである」と。これらの言葉を聞いてフランチェスコは、大なる喜悅を感じた。「基督並びに自分が、いま汝が乞ひつゝあることを是認するを知れ」と彼は云つた。そして彼の上に手を接いて附け加へた、「汝はメルキゼデクの位班に屬する、永遠の祭司である」と。

おのが弟子達の心靈的獨立を擁護せんとする彼の苦慮の、更に一層人の心を峻る實證をわたし達はもつてゐる。それは兄弟レオへの書翰である。[1] レオは敎團に勢力を得つゝある、新しい精神に對して大いに愕き、それに對する彼の意見を師に開陳し、そして疑ひもなく獨逸の曩の托鉢僧と、殆

んど同一な許可を彼に乞ふたであらう。viva voce（活ける聲）で應答した一會見の後、フランチェスコは彼が、pecorella di Dio すなはち神の小さき羊と異名したレオの心に、一點の疑惑または躊躇を殘さざらしめんとて、再び彼に書き送つた——

兄弟レオよ、汝の兄弟フランチェスコは、汝に平安と健康とを祈る。

わが子よ、自分は母がその子に對するがごとくに「然り」と答へる。この言葉はわたし達が散歩せるあひだに云つたこと、並びに自分のすべての勸告を總括する。汝もし勸告を受けんために、自分の處に來る必要があれば、然せんことが自分の願ひである。汝が神を悅ばし得ると信ずることがあれば、何ごとでもあれ、それに從ひ、且つ淸貧のうちに生活せよ。かく爲せ(faites le)。[2] 然らば神は汝を覩福し、自分はそれを是認する。且つまた汝が自分に遇ひに來ることが、汝の靈魂、或ひは汝の慰藉に對して必要であるならば、また汝がそれを願望するならば、わがレオよ、來たれ。基督にある汝のもの。

さて私達は茲に數頁前の屍體から確かに大分離れてしまつてゐる。

他の訓誡を研究するは、餘計なことであらう。大概それらは皆、境遇によつて受けた靈感の反映である。謙讓に關する勸告はしばしば繰り返されてあつて、これは作者の個人的配慮と、兄弟達に彼等の職務の眞髓を反省せしめる必要との、兩方面を說明するものである。

ウゴリニにその計劃を披瀝せんがために、聖フランチェスコは一二二一年の初め數箇月のうちに羅馬へ赴いたが、この滯在はウゴリニの、彼および聖ドメニコを結合せしめんとする、新努力で著

名となつた。

僧正(カルディナレ)はこのとき彼の成功の最高點にあつた。萬事が彼の意のまゝに行はれた。彼の聲はたゞ教會の事件のみならず、同時に帝國の事件においても、全然有力であつた。おのが前途を模索し、また心の中に宗教的改革の芽ぐむ夢と、そして眞理の奉仕とのために一身の力を傾倒せんとの願望を抱いてゐたフェデリコ二世は、彼を友として待遇し、無限の嘆美をもつて、彼のことを語つてゐた。

基督教の慘狀に對する應急策を考慮してこの僧正(カルディナレ)は、謂はゞ教會的權力を世襲にしてゐたところの、かの地方的豪族によつて常に補充せられてあつた封建的監督職を交迭せしめ、これらの二教團から選出した監督達をもつて、それに代へることが、最も有効なものゝ一つであると、遂に考へるやうになつた。ウゴリニの眼には斯かる世襲的監督達は、一般に善き主教としての二大重要資格を缺いでゐるものであつた――宗教的熱誠と、教會に對する熱心と。

彼は說教々團と「小さき兄弟(フラティ・ミノリ)達」とが、他の教團に缺如せる諸德を、單に所有してゐるといふばかりでなく、法王の掌中において彼等が、汎く教會の利益のために全然献げられた高き中心ある段階政治(デュラルキーア)となり、眞(しん)の加特力(カットリーコ)的になるであらうと信じた。監督を選出する僧會の方から、並びに高級俗僧達の方から、起こるかも知れぬ苦情は、その清貧生活が原始教會時代を回想せしめるところの、これらの牧者達に對する人民の熱誠のために、追ひ卷くることができるであらう。

フランチェスコおよびドメニコと彼の會見が終はらんとするに際し、これらの思想の若干を彼等に傳へ、托鉢僧達を主教に昇進せしめることについて、彼等の意見を乞ふた。何人が最初に答ふべきかに關して、この二聖徒間に一の敬虔なる爭ひがあつた。結局ドメニコは伴侶者達をして、彼等のあるがまゝにして置かれんことを望む旨を、簡單に云つた。自分の順になつたのでフランチェスコは彼の團體の名そのものが、斯かることを不可能ならしめることを示した。「すでにわが托鉢僧達が Minores（小なるもの）と呼びなされてゐる以上」と彼はいつた、「彼等が Majores（大なるもの）となるのは不穩當である。汝もし彼等が神の教會にあつて、果(み)を結ばんことを願はゞ、彼等を放任して、神が彼等を召したまふた、その位置に止(とど)め置け。父よ、彼等の清貧をして傲慢の動機たらしめるごとき行動や、或ひは彼等を主教に昇任せしめて、他人に對し驕傲ならしめることを、汝が做さゞらんことを祈る」。

法王達によつて踏襲せられた教會政策は、この二人の創設者の勸告を、つひに全然無益に終はらしめた。

フランチェスコとドメニコとは別れて永久に再び相會しなかつた。說教托鉢僧團の長は間もなくボロニァへ向け出發して、其處で彼は引き續く八月六日に死んだのである。フランチェスコはピエトゥロ、デ、カタナが死んだばかりの、ポルティウンクラに歸つた（一二二一年三月十日）。ピエトゥロ

の後を襲ふて兄弟エリアが、教團長として置かれた。ウゴリニは疑ひもなく、この選定にあづからなかつたことはなかつた。

法王代理の職務に妨げられて、彼は聖靈降臨日の僧會に出席し得なかつた（一二二一年五月三十日）。そこで彼は僧正（カルディナレ）レイネリオ（Reynerio）を代表者として派遣した。レイネリオは數人の監督と、各種の教團の修道僧達とに隨行せられて來た。[3] 約三千の托鉢僧達が其處に集合したが、しかし附近の人民の熱情は極めて大なるもので、彼等が寄贈した食糧を食らひ盡すために、七日の會期後更に二日間滯留するの、餘儀なきに至つたと云はれる。會議は兄弟エリアによつて司られ、フランチェスコは彼の足もとに坐して、何ごとか兄弟達の前に述べんとする場合には、彼の衣を引張るのであつた。

これに出席した兄弟ヂオルダニ・デ・ヂアノ（Gioradani di Giano）は、その一伍一什と、托鉢僧達の一群の獨逸出立のことゝを、わたし達に書き貽してゐる。彼等はスペアのチェザレ指導のもとに置かれたが、その宣教はすべての期待以上に成功した。十八箇月の後、ふたたび聖フランチェスコを見んとの願望に燃やし盡されて、伊太利亞に歸つて來たときには、ヴルツブルグ、マインツ、ウォルムス、スパイエル、ストゥラスブルグ、ケルン、ザルツブルグ、およびラティスボンの町々がフランチェスコ派の中心地となつてゐて、これら町々から新しい想念が、全南獨逸へと射光しつゝあつた

のである。

Tertiaries すなはち第三（教）團、古い文書には一般に「懺悔の兄弟團」と呼ばれたものゝ建設は、通常一二二一年に起こつたとせられてある。しかしこの日附の餘りに遲くあること、否寧ろ日附を定めることの不可能であることを、わたし達はすでに見たのである。蓋し後に全く好加減に第（三）教團と呼ばるゝに至つたものは、明白に第一の教團と同時に、起こつたものであつたのである。

フランチェスコと彼の伴侶者達とは、當時の使徒たらんことを願望した。しかしイエスの使徒とおなじく、彼等は、すべての人々を彼等の團體に入れんことを願ふた。この團體には素より幾干かの制限があり、また福音書の言葉に從つて、人類の酵母（はんだね）であらんことを欲した。從つて彼等の生涯は文字通りに使徒的生涯であつたが、しかし彼等が宣傳した理想は、イエスが傳へられたごとき福音的生涯であつた。

聖フランチェスコはイエスが爲したまふた以上に、家族或ひは財產を排斥したのではなかつた。彼はこれらのものゝうちに使徒が、そしてたゞ使徒のみが、解放せらるゝを要する絆のあるのを見た。たとひ間もなく病的精神を有する人々が、彼の思想を解釋して兩性の結合を罪惡とし、また人間の肉體的活動に關はるすべてのことを墮落であるとしたとても、たとひ常規を逸した人々が、あらゆ

る義務を免れんがために、その權威として彼の名を借りたとしても、たとひ結婚せる人々が、みづからを責めて、童貞の冷酷な殉教に身を投じたとしても、彼は確かに責を負ふべきものでない。これらの不自然な禁慾主義の痕跡は、清淨派の二元思想から來たものであつて、自然とその悪饒を歌つた、わが靈感に充てる詩人からではない。彼は鳩のために巣を造り、彼等を招いて神の加護のもとに繁殖させた。また彼は神聖なる義務として彼の托鉢僧に、手仕事を課したのであつた。

「懺悔の兄弟達と姉妹達」の團體の基礎は、甚だ單純なものであつた。フランチェスコは何等新しい教理を世界にあたへなかつた。彼の使命に新しかつたことは、全く彼の愛のうちに、福音的生涯に對して彼が受けた直接な召命のうちに、道德的活力と勞働との理想のうちに、存したのであつた。

勿論、この眞に單純な美を理解しない人々が直ちに顯れた。彼等は俗界に住みながら、しかも種々な理由のために隱遁するこのできないこの僧院生活を模倣し、苦行と祈禱三昧とに耽るに至つた。しかし「懺悔の兄弟達」が、かゝる人々の例に倣つたものであると想像するのは、不當なことであらう。

彼等は「規範」を聖フランチェスコから受けたのであつたか否や、斷言するは不可能である。法王ニコラス四世によつて、一二八九年彼等にあたへられたものは、十三世紀の終はりに存在してゐた

俗兄弟團のすべての規範を單に改鑄し合金せしめたものに他ならない。この文書をフランチェスコに歸するのは、新しい建築物に古代建築の、或る珍重せられし石を置くに異ならないのである。それは正面と裝飾との問題であつて、それ以上の何ものでもない。

フランチェスコ自身から出た如何なる「規範」もないに關らず、この團體が彼の眼中に、如何なる位置を占むべきであつたかは、充分に明白である。福音書とその勸告と模範とが、その眞の「規範」であつたに相違ない。第三(教)團によつて企てられた偉大なる革新は、和合といふことであつた。この兄弟團は平和の組合であつて、驚愕せる歐羅巴に神の新しい休戰を齎らしたのであつた。武器を採るを絶對に拒むことが、全然空想で一時的なものであつたかどうか、それを證明する數々の文書がある。しかし數年間たりとも、それを實現せしめる力をもつてゐたことは、喜ぶべきことである。「懺悔の兄弟達」の第一の主要な義務は、出來得るかぎり彼等の必要物を減じ、そして眞に無くてならぬもので自ら滿足し、收入の自由に費され得る部分を、適當な間隔を置いて、貧民に配分すべく、彼等の財産を蓄藏することであつたやうに見える。

喜悦をもつて彼等の使命の義務を果たすこと。極めて些細な行動にすら聖き靈感をあたへること。無窮に小なる存在物や、一見極めて平凡な事物のうちに、神の事業の部分々々を發見すること。すべての下賤な興味から純潔に身を保つこと。委ねられしターラントの勘定を、直ぐ行なつた比喩中

の僕達のやうに、恰もおのが所有にあらざるかのごとくに事物を使用すること。心情を憎惡に閉ぢ、貧民、病者、すべて見棄てられしものゝために廣く開くこと。斯かることが「懺悔の兄弟達」、および「姉妹達」の他の主要な義務であつた。

彼等を自由と、愛と、そして責任との、この王者の道に導くために、フランチェスコはとき〳〵地獄の恐怖と、天國の喜悅とに訴へた。しかし打算的愛は、ほとんど彼の性質の部分を占めることがなく、如上の思考、または同種類の思想は、遺存せる彼の著書に、また同じく彼の傳記のうちにおいて、全然第二位を占めてゐるに過ぎないのである。

彼にとつては福音的生涯は、靈魂に自然なものである。何人にてもそれを知らんがために來たるものは、自由に悟ることができる。それは外氣や光と同樣、何の證明をも要しない。たゞ俘虜達をそれに導き、彼等をして貪慾と、憎惡と、輕佻との牢獄に歸り行かうとする、すべての願望を失はしめるだけの必要がある。

フランチェスコと彼の眞實な弟子達とは、高嶺への苦痛おほき登山をなした——只々內心の聲に不可抗的に促迫せられて。彼等が受けた唯一の外よりの援助は、イエスの記憶のみであつた。彼は彼等に先き立つて高嶺へ登り、晩餐の聖典のうちにあつて彼等の眼前に神秘に再び活きてゐたまふた。

これらの思想が吐露せらるゝ、かのすべての基督教徒に寄する書翰は、第三(教)團(Tetiarios)に對する聖フランチェスコの教訓の活ける記念物である。

これら第三(教)團を完全な具體的形態において、わたし達の眼前に髣髴たらしめんがためには、傳說が「懺悔の兄弟」の最初のものとしてゐる聖ルッケジオ(St. Lucchesio)の物語を見ればいいのである。[6]

トスカナの小さい都市の生れなる彼は、その政治的確執を避けんがために其處を去つて、シェナから程遠からぬポッヂボンシ(Poggibonsi)に定住し、彼處に穀物の商買を繼續した。既に當時富裕であつたので、すべての小麥を買ひ入れ、凶作の時にそれを賣つて巨大な利盛を獲ることが、彼にとつて困難でなかつた。しかも間もなくフランチェスコの說教に感化せられて、彼は仕事に從事し、すべて剩餘のものは貧民に分配し、そして家と、小さい庭と、一疋の驢馬とのほかに何ものをも殘さなかつた。

そのとき以後彼は、身をこの地面の端片の耕作を委ね、彼の家を一種の宿屋とし、貧民や病者が群をなして來てゐたやうに見える。彼はたゞ彼等を歡迎したのみでなく、彼等を探し索めて、マラリアの漫衍してゐたマレンマにまでも赴き、しばしば彼の背に病人を跨がらし、同じ荷物を負へる驢馬を先き立たせて歸るのであつた。庭からの收獲は必然に極まり切つたものであつた。他に方法

がなくなつたときに、ルッケジォは旅囊を取つて、戸毎に施與を乞ふたが、しかし大抵のときは不必要であつた。何故なれば彼の貧しい客人達は、彼のいかにも勤勉で親切であるのを見て、極めて豐かな食事をするよりも、彼とともに庭からの、些(さ)かな憐な野菜を食することをもつて、一層滿足したからである。

缺乏のうちにあつて斯くも喜悅に充てる、この恩人の前において、彼等は自己の清貧を忘れてしまひ、かくて困苦者の囁(うそぶ)きは、嘆美と感謝との爆發に、變ぜられるのであつた。

回心が彼の心の中に、すべての家族の絆を殺しはしなかつた。彼の妻なる Bona Donna（善き貴女）は、彼の最善の同勞者となつた。やがて一二六〇年に彼女の段々衰へゆくのを見たとき、彼の憂苦は餘りに深くして堪へ切れなかつた。彼女が最後の聖典を受けたとき、彼は彼女に云つた、「愛する伴侶よ、ともに神に仕へ得たあひだ、いかに私達は互ひに相愛したかを汝は知る。何故にわたし達は云ひ難き喜悅さして去るときまでも、依然として結合し得ないことがあるであらうぞ。自分を待て、自分もまた聖典を受けて、汝とともに天に行かう」と。

かくて語つて司祭を呼び返し、彼のために聖典を司らしめた。それから彼は彼の瀕死の伴侶者の手を採り、柔しい言葉をもつて彼女を慰め、彼女の靈魂が去つたのを見たときに、彼女のうへに十字架の記號をなし、身を彼女の側に横たへ、かくて愛をもつてイエス、マリア、および聖フランチェ

スコを呼び掛け、永遠に向かつて彼は睡眠に落ちたのであつた。

---

1 スポレト (Spoleto) の Conventuals（フランチェスコ派中規範に對して安易な見解を採用する一派）の保存所にある自筆に據り、Wadding これを傳ふ。この一片は確實に信ずべきものである。

2 この複數はレォが團體の名において語つたことを明白に示す。

3 初期の僧會にドメニコが臨席したことは、この故に、全く自然なことであつた。

4 一二八九年八月十七日の法王令 Supra montem.

5 一二〇一年の日附を有する、Humiliati（謙讓派）の第三教團の「規範」も、同樣な句を包含してゐる。

6 オルランド・ディ・キウジ (Orlando di Chiusi) もまたフランチェスコの手から衣鉢を受けた。フランチェスコ派の團體は、他の第三諸（教）團の影響を受けて、急速にその特徴を失つてしまつた。「第三(教)團といふこの稱號は確かに元來は段階政治的意義のものであつたが、徐々に年代的意義を被むるやうになつたのである。すべてこれらの問題は、Humiliati について識らるゝところのものと比較せらるゝときに、著しく明瞭になつて來る。

第十六章　「小さき兄弟達」と智識

一二二一年の秋――一二二三年の十二月

一二二一年の僧會後、教團は何ものも阻止する力のないほどな、迅速さをもつて發展した。教職の任命がこの方面に、巨大な一段を劃した。當然な必要からして教職は、一定の家屋を建設した。指揮者は從屬者を手の屆く範圍に置いて、始終彼等が何處にゐるかを知らねばならぬ。斯くて兄弟達は立派に僧庵といはるゝものなしに、もはや遣つてゆくことができなくなつた。この變化は自然に他の多くの變化を齎らさずには置かなかつた。このときまで一の會堂すらを、彼等はもつてゐなかつた。會堂なしに托鉢僧達は、たゞ巡回する説教者で、彼等の目的とするところは全く利害以外に、超然たらざるを得なかつたのである。彼等はフランチェスコの願つてゐたごとく、僧侶の朋友的補助者であつた。しかしすでに會堂を建てた以上は、嫌でも應でもその中において説教をし、群集を引き寄せ、次いでそれに對應する一種の教區を造らんと切望するは、避くべからざることであつた。

一二二二年三月二十二日の法王は、全力を擧げてこれらの變化を、早めんとしたことを私達に示

す。鐘を鳴らさず、戸を閉ぢ、そして破門せられし人々を前もつて放逐するといふ、當然な條件のもとに、禁止の時間にその會堂において、神聖なる秘義（聖餐）を司る特典を、法王はフランチェスとその托鉢僧達とにあたへた。

しかし驚くべきほど意外に、法王令それみづからがその無用、少くともそれが發布された當時は、無用であつたことを證明してゐるのである。曰く「もし汝等會堂を一つでも有するやうになれば、その中において禁止の時間に、聖禮典を行なひ得る特典を、汝等に附與す」と。これ一二二二年に教團が、まだ會堂を有してゐなかつた一の新しい證據である。しかしこの文書のうちに、彼等の活動の方法を變更し、且つこの特典をして無効たらしめざらんとする强迫的勸告を見ることが困難でない。

時を同じうする他の文書は、異なれる方面において表れてはゐるが、同一な目的を示してゐる。一二二二年三月二十九日の法王令 Ex parte によつて、オノリウス三世はリスボンの「説教者達」（ドメニコ派）と、「小さき人達」（フランチェスコ派）とに共に、微妙な使命をあたへた。すなはち熱心家が財産の三分の一を、遺言によつて自分達に貽さんことを强要し、それに從はなかつた人々に對しては教會の埋葬を拒むことをしたところの都市の監督と僧侶達とに向かつて、反對行動を採る全權を彼等に許したのであつた。

法王が兄弟達に、彼等の欲する如何なる方法でもを採る全權を委ねたといふ事實は、彼等が羅馬にあつて、彼等本來の目的を忘却し、自らを法王の代理者に變せしめんと、いかに焦慮してゐたかを證據立てゝゐる。それ故にこれらの法王令の冒頭に、フランチェスコの名が記されてあることの無意味であるのは、指摘するまでもない。未だ必要な境遇になつてゐないのに、わが Poverello (貧しき人) が、特典を覓めたとは、わたし達の想像し得ないところである。こゝにウゴリニの感化をわたし達は認める。ウゴリニは自分の思ひにかなふ「小さき兄弟」をエリアの人物のうちに見出してゐたのであつた。

この時期のあひだフランチェスコは、一體何を爲してゐたのか。わたし達は少しも知らないが、しかし此時より以前、並びに以後については、極めて夥しくある文書が、獨りこの時期に對して缺乏してゐるといふその事が、彼が既にポルティウンクラを去つて、彼にとり常に力强い愛着であつたところのウムブリアの僧院の一つに、住むために赴いたことを、充分明白に示してゐる。彼の記念を殘してゐない小山一つすらが、中央伊太利亞にはないと云つていい。彼の名または彼の弟子達の名をもつてゐるところの、小山のうへにある若干の小屋に出遇はずに、フィレンツェと羅馬とのあひだを、半日行くことは殆んど困難である。

嘗てこれらの小屋に、人が住んでゐたことがあつたので、この葉の假小屋にあつてエヂディオ、

マッセオ、ベルナルド、シルヴェストロ、ジネブロ、その他歴史が名を忘れた多くの人々が、彼等を慰めんとて來たる心靈的父の訪問を受けたのであつた。

彼等は彼に報ゆるに愛に愛をもつてし、慰藉に慰藉をもつてした。彼はこの兩者を要した、何故なれば彼は長い不眠の夜な夜な、時々奇怪な聲を聞くことがあつたからである。疲勞と悔恨とが彼を壓迫し、過去を顧みて殆んど自己と「淸貧の貴女(ドンナ・ポエルタ)」と、そして萬事を疑ふやうになるからであつた。

キウジとラティコファニとのあひだに、――サルティアノ(Sartiano)の村より一時間の歩行――數人の兄弟達は彼等のために、僧院ともなり、また奥まつた處にフランチェスコのための室を備へた一軒の隱遁所を造つた。其處に彼は彼の生涯中の、最も苦しい一夜を過ごした。禁慾主義の德を誇張して、神の愛を充分考へなかつたといふ思ひが、彼を襲ふて、急に彼は彼の生涯を空費したことを悔いるやうなこともあつた。願へば然か成るを得、欲したならばもつことが出來た、靜謐な幸福な家庭の幻夢が、心奪はるゝほど生々した色彩をもつて、彼の前に現はれるのであつた。血の出るまで大麻の帶をもつて、みづからを打擲したが無益であつた。幻影は消え去ることをしなかつた。

それは冬の半ばであつた。雪の重たげな堆積が地を蔽ふてゐた。彼は衣も着けずに飛んで出で、雪を大きな塊とし、「一列の人形を造り始めた。彼は云つた、「見よこゝに汝の妻がゐる。そして彼

女の背後に、二人の息子と、二人の娘とがゐて、僕と婢とが、すべての荷物を携へてゐる」と。

既に棄てた筈の物質的慾望の壓制を、斯く子供らしく表現することによつて、彼はそれより逃がれ、遂に誘惑を斥けてしまつた。

サルティアノにおいて起こつたものであると、物語が云つてゐるもう一つの出來事は、同時代に屬せしむべきものであるかどうか、それを定める手掛りが少しもない。「何處から汝は來たのか」と、彼が訊ねた一人の兄弟が、「汝の僧房(チェルラ)から」と答へた。この單純な答が、「清貧」のわが熱烈な戀人をして、その僧房に再び入らざるやうに決心せしめるに充分であつた。「狐は穴あり」と彼は反復することを好んだ、「空の鳥は巣あり、されど人の子は枕するところだになかりき。主が四十日四十夜荒野にあつて、祈禱し、斷食したまひしとき、彼は僧房も建てずに、たゞ嚴の一方を彼の隱家とせられた」。

ある人々が誤つて考へたやうに、時が經(た)つに從つてフランチェスコが、彼の意見を變更したといふのは誤謬である。教會的著者家達のうちには、彼が彼の教團の增大を願つて、たゞそのために變更を許したと推定してゐるものさへある。この推測は如何にも尤もらしいが、しかしこの點に關して私達は憶測を逞しうする必要がないのである。一二二一年以後教團に行はれた殆んどすべてのことは、フランチェスコの承認なしにか、または彼の意志に反して爲されたのであつた。人もしこれ

を疑ふ氣があれば、彼の思想の、崇嚴でまた最も適切な記念——彼の「遺言」をたゞ一瞥すればいい。其處に彼は、往々おのが思想表白において彼をたじろがしめたところの、すべての誘惑から解放せられ、心を定めて大膽に、原始の理想を再び召還し、弱點に付け込んで奪取せられた、すべての讓歩に巍然として反對する彼が示されてある。

「遺言」は一二二三年の「規範」の附錄ではない。それは殆んどその取消である。しかしその中にある、初期の理想へ復還せんとする企圖をもつて、初めてのものであるとするのは誤謬であらう。彼の生涯の最後の五年間は、彼の模範と彼の言葉とによれる、實に反抗の絶えざる努力であつた。

一二二二年に彼が、ボロニアの兄弟達に送つた一通の書翰は、悲しい前兆に充たされてあつた。ドメニコ派が注目の中心となり、訓練組織の堅城に立て籠つてゐたその都市において、「小さき兄弟達」は他の處にあるよりも一層多く、單純と清貧との道を棄て去るやうに誘惑せられた。フランチェスコの警告は極めて暗黑で、脅威的な色彩を帶びてゐるので、かの全北方伊太利亞を汎く震駭せしめた一二二二年十二月二十三日の有名な地震があつた後、彼がこの災害を豫言したのだと、少しの躊躇なしに信ぜられたほどであつた。まことに彼はそれに劣らざる、全然精神的な恐ろしい災害を豫言し、その幻想は最も苦々(にがゝ)しい呪禱を、彼から絞り出させたのであつた——

「主なるイエスよ、汝は汝の使徒を十二人選びたまふた。そしてそのうちの一人は汝を裏切つたが、他のもの等は汝に結合し、汝が受けしものと同じい靈感に充たされて、汝の聖き福音を宣傳した。見よ今、誕の日を記憶して、汝は信仰を振起せしめんがために「兄弟達」の宗教を興こし、彼等によつて汝の福音の奥義を、完成せんとしたまふ。彼等もしその使命を成就し、萬人に對して赫々たる模範たらんかはりに、自らを暗黑の樂に委れしごとくに思はるゝとせば、何人が彼等の職責を果たすべきであらうか。おゝ主よ、彼等は汝と、天廷のすべてのものと、そして汝の最も價値なき自分とによつて呪はれてあれ。汝が原初に爲し、また今尙ほこの聖き教團の兄弟達によつて、爲すことを廢めたまはざるすべてのことを、その惡しき模範により、轉覆し破壞する彼等！」。

傳記者達のうち最も穩健なチェラノのトゥマゾから引用したこの句は、柔和なフランチェスコが、激越と憤怒との如何なる高度にまで、善く登り得るかを示してゐる。

おのが心靈的家族の將來に關する、創設者の苦惱に對して、陰蔽の面帕を投げ掛けようとする、甚だ無理からぬ努力にも關らず、その痕跡をわたし達は到るところにおいて發見するのである。彼は或る日に云つた、「わたし達の教團が、汎く知られた特徴のすべてを失つて、その團員が日光にみづからを曝すことを、耻づるときが來たるであらう」と。

彼は夢に、頭は純金で、胸と腕とは銀、胴體は水晶で、脚は鐵である一つの像を見た。彼はそれを、彼の團體のために備へられたる未來の前兆であると考へた。

彼は彼の子達が、清貧と同時に謙讓に不忠實といふ、二つの疾病に冒されることを信じたが、しかし恐らく富の誘惑よりも一層强く、知識の惡鬼を彼等のために怕れたであらう。

知識といふ問題に關する彼の見解はどうであつたか。彼がこの問題を全體として研究したことは決してなかつたが、しかし彼は常に諸大學に、かなり學生がゐることゝ、そして假に學術的努力が、神への臣從であるとしても、其處にこの階級に對する崇拜者達が到底なくなる氣遣ひのないことを見るのに、何の困難ももたなかつた。彼は徒らに自分の周圍を汎く見廻した。もし托鉢僧達が不忠實になつたとすれば、彼の教團のために備へられてあるところの、愛と謙讓との使命を成就すべき、何人も其處にゐないことを見たのであつた。

この故に彼の苦悶のうちには、彼の希望の惑亂せしめらるゝのを見る苦痛以上のものがあつたのである。一軍隊の敗北も、一理想の轉覆に比しては何でもない。彼のうちには一の理想が化身してあつた。すなはち物質の捕獲網に對する愛の勝利によつて、人類に回復せられる平安と幸福との理想これである。

抹殺すべからざる神秘によつて、彼は彼自身が當代の「人」であること、すなはち人民の全努力と、願望と、憧憬とを、一身に體現するものであることを感じた。彼とともに、彼のうちに、彼によつて、人道が再新せしめられ、且つ福音書の言葉を用ゐるならば、再生せしめられんことを、喘ぎ求めてゐるのを感じたのであつた。

この確信のうちに彼の眞の美がある。これによつて虛しい相似や、外面的模倣より遙かに類を異

にして、彼は一の基督であつた。

彼はまた世界の憂患を負ふてゐた。もし彼の靈魂の眞底に覗き入らんか、この憂患といふ言葉に向かつては、イエスに對すると同樣な、能ふかぎり廣大なる意味を、彼のためにあたへねばならぬ。イエスとフランチェスコとは共にその憐憫の情によつて、人類の肉體的苦難を負ふたが、しかしその壓倒する苦悶は遙かにこれ（肉體的苦難）以上のもの、すなはち神の產痛そのものであつた。彼等の苦んだのは、彼等のうちに「言」が受肉してゐたからである。そしてグレッチオ（Greccio）の橄欖樹下におけるごとく、ゲッセマネにおいて、彼等が悶えたのは、「その民彼等を受けざりし」が故である。

然り聖フランチェスコは、その神々しい運命さして前進する人道の胎に行はれつゝある、化成の產痛を永久に感じ、そして一身を供物として献げ、彼のうちに神秘的再生を、體現せしめようと願つた。

これで善くわたし達は彼の苦痛を理解し得たといふべきか。彼は福音の神秘に對して顫動しつゝあつた。死に面と面を合はす瞬間における、生命の震動を回想せしむる或るもの、精神的生命を對象とするこの場合に、更に更に苦痛に感ぜしめる或るものが、彼のうちにある。

これ惡徒の後を追ふて、彼等を弟子達となさんとした人が、たとひ善意であつたにもせよ、不謹

慎な熱心に驅られて、その使命を忘れ、彼の敎團を一の學術的團體に變せしめようとする同勞者達に對して、いかに無慈悲たり得たかを說明するのである。

知識を神と宗敎との用に供するといふ口實のもとに、敎會は罪惡と傲慢との、最も尤なるものを養育した。或る人々によれば、それは彼女（敎會）の光榮の稱號であるが、しかしそれは彼女の最大恥辱であるであらう。

信仰の敵に對してこの武器を使用することを、わたし達は批難すべきであらうかと、彼女は訊ねる。しかしイエスがラッビの徒に應答せんがために學ぶべいふ口實のもとに、この學徒に加はり、彼等の辯證的煩瑣と、狂想的な註解とによつて、彼の思想を衰弱せしめられたことを、汝等は想像し得るか。彼は恐らく偉大なる學者になり得たであらう。しかし世界の救主たり得たであらうか。得なかつたことを汝等は知る。

ガリラヤの貧しい十二人の漁夫達によつて宣傳せられた福音の、驚異すべき傳播を說敎者達が、歡喜して述べるのを聞くときに、わたし達は奇蹟が彼等の云ふよりも或ひは一層驚くべく、或ひは驚くに足らざることを、彼等に指摘し得ないであらうか。その一層驚くべしといふのは——十二人中數人のものが、彼等の甘美な湖の岸邊に歸へり、神秘な網のことを打ち忘れ、そして「十字架に釘けられしもの」のことを、もし思つたとすれば、それは彼を哭げくためであつて、決して彼の事

業を世界の隅々に繼續することによつて、彼を死より甦へらしむることではなかつたといふことである。その驚くに足らずといふのは――現今この十九世紀の末期においてさへも、説教者達が愛の心を湛へて出發し、昔彼等の師が爲したまひしごとく萬民のために身を犧牲となし、奇蹟が再び繰返され得るといふことである。

しかし殘念なことには神學が宗教を殺してしまつた。僧侶はこの二者の混同すべからざることを、わたし達に屢くほど反復した。然しながら實際において兩者を明らかにしないならば、何の益になるのであらうぞ。

十三世紀ほど熱心に知識が貪られたことが嘗てなかつた。帝國と教會とは、彼等の相反する權利を擁護する論理を頻りに知識に覓めてゐた。インノケント三世は彼の「布令(デクレタリス)」の蒐集を、ボロニアの大學に送り、同大學に愛顧を注いでゐた。フェデリコ二世はナポリの大學を建設し、そしてパタリニ(Patarini)派さへも彼等の息子達を、トスカナやロムバルディアから、巴里へ勉學に送り出した。

一二二〇年八月ボロニアにおける、フランチェスコの説教の成功をわたし達を記憶する。[2] その頃兄弟達を、彼等の所有に爲つてゐたやうに見える一家屋のうちに置いたといふためのみでなく、特に一種の大學(ユニヴェルシタス)のごときものを、其處に組織したといふ理由で、州教職で法律學者であつたピエトロ・スタッチア(Pietro Staccia)[3]を、彼は强く叱責したのであつた。

この教職はこれらの非難に對して、少しも注意を拂はなかつたやうに見える。彼の頑冥であるのを知つたとき、フランチェスコは怖るべきほど奮激して彼を呪つた。彼の憤怒は極めて烈しく、後日ピエトロ、スタッチアが死に瀕したとき、彼の多くの友人達が來てフランチェスコに、その呪詛を取り消さんことを懇願したが、すべて彼等の努力は徒勞であつた。

わが創諸者の斯かる態度を顏前にしながら、このパドゥアのアントニオに送られたものとせらるゝ書翰を、信憑すべきものと考へるのは、極めて困難である――

「わが甚く愛するアントニオに、兄弟フランチェスコが基督にあつて平安を問ふ。汝が兄弟達に聖書と神學とを講解する狀が、如何にも私達の『規範』に合致し、また自分が熱心に願つてゐるがごとく、所謂の靈が汝のうちにも自分のうちにも、消滅しないやうであるのを喜ぶ。さらば」。

知識に對するフランチェスコの明瞭な無數の宣言を弱める敬虔な欺瞞を、この中にわたし達は見出すべきであらうか。

最も名聲赫々たる學者達を、各の教團に引き入れんとの企圖において、當時ドメニコ派とフランチェスコ派とのあひだに存した競爭を、わたし達の心中に描くことは困難である。某々の有名な學者をして衣鉢を受けしめんがために、小陰謀が仕組まれて、歸依者が皆それにあづかつてゐた。も

し聖フランチェスコの目的が、學術にあつたとすれば、ボロニア、巴里、およびオックスフォードの托鉢僧達は、決して彼と爭ひ得なかつたのであらう。

この潮流は甚だ强くあつて、先進の諸教團は、その欲すると否とに關らず、その中に押し流されてあつた。二十年後にシトオ派さへもまた、法律家、神學者、布令研究家、その他のものたらんことを願望するに至つた。

おそらくフランチェスコは最初この危險の、重大なることを認めなかつたであらうが、しかし幻惑(イリュジョン)はもはや不可能となつて、このときより彼は、既にわたし達の見たごとく、打ち勝ち難き斷乎たる決意を發揮した。なる程後に彼の思想は改竄せしめられたが、斯くするがために惡むべき人々——法王達と團長の大部分と——が、彼等の名譽でない種々な手品を、使用せねばならなかつたのである。彼は云つてゐた、「汝等はすべての國語と、星の軌道と、その他一切萬事を知つてゐるほど充分に、煩瑣と知識とを有してゐるとしても、何處(どこ)に誇るべきものがあらうぞ。一疋の惡鬼が、この世界にあるすべての人々を一緒にしたよりも、一層善く斯かる問題については知つてゐる。しかし惡鬼にはできないたゞ一つのことがあつて、しかもそれは人間の榮光である。すなはち神に忠信なることこれである」と。

一二二二年および一二二三年の僧會に關する、確實な記錄は缺乏してゐる。一二二一年の計畫に

對して提議せられた變更は、教職達によつて論議せられた後、僧正(カルディナレ)ウゴリニによつて、明確に制定されてあつた。ウゴリニはこの問題についてフランチェスコと、長い協議をしたのであつた。その事情をフランチェスコ自身が叙述してゐる。

その結果が一二二三年の「規範」である。詳細に檢べるのは冗漫であるが、不思議な物語の群が直ちに、この文書の起原に關して結び付けらるゝに至つた。しかしそれについて記憶にとゞめ置くべきはフランチェスコが彼の理想を支持せんがために、教職達と爭つた戰鬪が傳へられてゐるといふ一事である。

最後の認可を請ふために羅馬に赴く前、彼はリエティに近いモンテ・コロムボの、寂寥の地に長く瞑想した。この小山は間もなく新しいシナイ山となり、そして弟子達は彼等の師が、その頂上にあつてイエスの手より親しく、新十誡を受ける狀(さま)を描いたのである。

これらの傳說の最も周到な記述者の一人なるアンヂェロ・クラレノ(Angelo Clareno)は、その價値の極めて少ないものであることをみづから指摘してゐる。すなはち彼はオノリウス三世が臨終に、この方案の主要な句を變更したことを私達に示す。この「規範」については、既に詳しく述べて置いたがゆゑに、こゝにこの問題に關しては、繰返す必要がない。

それは一二二三年の十一月二十五日に認可せられた。フランチェスコの羅馬旅行には、多くの記念

が總付けられたやうに見える。一日彼が歡待を受けた僧正ウゴリニ、並びにその客人達は、食卓に就かうとして彼の不在であるのを知り、大いに驚いたが、間もなく乾いた麵麭片を、一容積携へて歸つて來、欣然としてこの高貴な一團の各へ分配するのを彼等は見た。彼の主人公（ウゴリニ）は、この行爲のためにやゝ當惑して、食後フランチェスコを少しく譴責しようとした。すると彼は豪奢な御馳走のために、彼を毎日養つて呉れる施與の麵麭を忘れる權利のないことゝ、また斯くして最上の豐富な食卓も、靈の貧しい者に對しては、主のこの食卓ほどに價値あるものでないことを、彼の兄弟達に示さうと欲したのであると説明した。

初期時代には「小さき兄弟達」が、奴僕として出稼ぎをし、彼等の麵麭を儲けるのが風習であつたことを私達は既に見た。彼等のうち或る極小數の人々が、斯く爲すことを繼續した。しかし漸次この點においても變化を受けた。仕へるといふ言ひ草のもとに、托鉢僧達は法王廷の高官の家族の中へ入り込み、その忠勤な從者となつた。一二二一年の「規範」の命ずるやうに、萬人に自らを屈從せしめるかはりに、彼等はすべての人々のうへに立つやうになつた。

使徒的生涯の俤を全然失つて、彼等は一種特別な型の佞人となつた。半ば敎會的で半ば平信徒的な彼等の身分は、羅馬敎會の主敎達の大部分が始終行なつてゐたやうに見える種々なる陰謀に對して、微妙な使命と役割との數々を果たすに、好都合なものになつてゐた。反抗の手段としてフ

ランチェスコは、たゞ一つの武器をもつてゐた。おのが模範これであつた。

Speculum（鏡）が述べていふ、一日祝福されしフランチェスコは、オスティアの監督（ウゴリニ）に遇はんために羅馬に來て暫く彼の家に滯在した後、また彼を非常に崇拜してゐた僧正（カルディナレ）を訪れるために赴いた。

それは冬であつた。寒氣と、風と、雨とが、如何なる旅行をも不可能たらしめたので、僧正（カルディナレ）は彼に數日をおのが家に過ごしまた食事をしに來る貧しい人々のやうに、彼の食物食をせんことを乞ふた――「自分は汝に充分奥まつた善い部屋をあたへるであらう。其處に心のまゝに祈禱もし、食事もすることができる」と、彼は附け加へた。すると最初の十二人の弟子達の一人であつて僧正（カルディナレ）とともに住んでゐた兄弟アンヂェロが、フランチェスコに云つた「直ぐ近くに一つ離れて、甚だ靜寂な大きい塔がある。其處に居れば僧院にゐるに等しいであらう」と。フランチェスコはそれを見に行つて大いに喜んだ。そこで僧正のところに歸つて彼は云つた、Monsignor（わが主よ）、自分は數日間汝と時を過ごすことができる」と。僧正は非常に悅び、兄弟アンヂェロは祝福されしフランチェスコと、その伴侶者のために、塔を整へに赴いた。

しかし彼が眠つた直ぐ最初の夜に、惡鬼達が來て彼を擊つた。すると彼は彼の伴侶者を呼んで云つた、「兄弟よ、惡鬼達が來て自分を烈しく擊つた。どうか自分に近く寄つて呉れ、自分はこゝに獨りで恐れてゐる」と。

彼は熱病に罹つた人のやうに、四肢を震はしてゐた。彼等兩人とも一睡もせずに夜を過ごした。フランチェスコは云つた「惡鬼達は神の懲罰といふ使命を授けられたのである。恰度長官（ポデスタ）が犯罪人を罰せんがために、彼の執行者を遣はすやうに、神は惡鬼達を遣はし、惡鬼はこの點において、彼の司達（つかさ）である――何故に彼は彼等を自分に遣はされたのか。恐らく斯ういふ理由であるであらう――僧正は自分に親切ならんと欲し、自分にもまた實際大いに休息の必要があるのであるが、しかし汎く世界に出で、飢饑と幾多の困苦とを受けてゐる兄弟達や、また僧院や惨（みじめ）な家々にゐる人々が、自分の僧正と一緒に滯留してゐることを聞かんか口惜（くや）しがるであらう。彼等は云ふであらう「わたし達はすべての缺乏に堪へてゐる間に、彼は彼の欲するまゝに躍動（ふるま）つてゐる」と。自分

は彼等に善き模範をあたふべきである――これわが眞の使命である」――

そこで翌朝夙く彼は塔を去り、仔細な僧正に告げた後、彼は訣別して、リエティに近いモンテ・コロムボの僧院に歸つた。彼は云つた、「彼等は自分を聖人だと考へてゐるが、見よ、牢獄から自分を出だすために、惡鬼達を要したではないか」と。

この物語は、その奇妙な色彩にも關らず、獨立獨行に對する彼の本能の、いかに强かつたかを明白に表してゐる。僧正の歡待を投獄に比してゐるが、これ教會と彼の教團との關係を一言に、彼の自覺してゐたよりも善く洞破したものであつた。

雲雀は死んではゐなかつた。寒氣と北風とに關らず、それは欣然としてリエティの谿間へ飛んで行つた。

それは十二月の半ばであつた。降誕節の記念を身に浸るほどに守りたいといふ熱烈な願望が、フランチェスコを捉へた。かれは彼の友人達の一人で、必要な準備を整へてゐた勳爵士ヂオヴンニ・ディ・グレッチオに、彼の心情を打ち開けた。

イエスの模倣はあらゆる時代を通じて、基督教の眞の中心であつたが、しかし充分心情からの模倣たらんがためには、著しく靈的であらねばならぬ。大抵の人々にとつては、一の外面的模倣が先になり、且つこれに依つて支持されるのである。かくて生命をあたへるものは實に靈であるのである。しかし肉は何の益なしといひ得らるゝのは、たゞ天使達の國においてのみである。

中世紀における宗教的祝祭は、他のすべてのものに拔きんじて、事實を回想せしめ、それを多少忠實に再現するものであつた。そこでプロヴァンスの santons(回教行者達)、Palmesel(回教歸依者達)の行列、復活節前木曜日の聖餐、復活節前金曜日の「十字架への行道」、復活節の復活劇、および聖靈降臨日の「燃ゆる粗麻」等の祭があつたのである。眼に映ずるすべてのものが、神とその愛とを告げるところの、これらの祝祭を愛せざるべく、フランチェスコは餘りに生粹の伊太利亞人であつた。

かくてグレッチオとその附近の人々、並びに鄰接せる數々の修道院からの兄弟達が呼び集められた降誕節の通夜の宵、手に炬火を捧げ、林を彼等の樂しげな聖歌に鳴り響かして、あらゆる途から僧院へと急ぐ信心家を、人は見ることを得たであらう。

萬人が歡喜してゐた。――就中フランチェスコはその最たるものであつた。曩の勳爵士は蓑で厩を拵へて、牡牛と驢とが伴れて來られ、その息氣が、寒氣に凍けたわが憐なる bambino (嬰兒)を、暖めてゐるやうに見えた。この光景を見てわが聖徒は、悲慘の涙を催し、彼の顏を濡すのであつた。彼はもはやグレッチオにゐるのではなくて、彼の心情はベッレヘムにあつたのである。

ついに彼等は朝の勤行を誦じ出だし、次いで彌撒が始まり、フランチェスコは補祭として聖書を朗讀した。すでにすでに人々の心情は、かくも柔和で、かくも熱情の籠もつた聲をもつて諳まるゝ、神聖なる物語の、單純な朗誦によつて感動せしめられてあつたが、しかし彼が說教を始めるや、